部

768. 3-Sa75ウ
1200500752430
8.3
175

9V 12
768.3
SA75

韋氏舞曲集

逸塵堅編
并序說

昭和十八年十二月

第一書房鐫梓也

985
15

目次

例言……一一

幸若舞曲

日本記（大頭左兵衛本）……一七
いるか（大頭左兵衛本）……一九
たいしよくわむ（大頭左兵衛本）……二八
大臣（大頭左兵衛本）……五一
信太（毛利家本）……七五
満仲（毛利家本）……九七
鎌田（毛利家本）……一一四
いふき（大頭左兵衛本）……一二九

伏見常槃（毛利家本）……一四〇
築島（大頭左兵衛本）……一五二
硫黄之嶋（大頭左兵衛本）……一七四
文學（大頭左兵衛本）……一七九
夢あはせ（藤井氏本）……一九二
馬揃（大頭左兵衛本）……一九五
木曾願書（大頭左兵衛本）……一九九
敦盛（大頭左兵衛本）……二〇三
なすの与市（大頭左兵衛本）……二一九
景清附籠破（大江本）……二二四
はま出（大頭左兵衛本）……二四七
九けつのかひ（藤井氏一本）……二五〇
常盤問答（越前本）……二五二
笛卷（毛利家本）……二五八
未來記（内閣文庫本）……二六七
くらま出（内閣文庫本）……二七二

烏帽子折（大頭左兵衛本）……二七八
山中常盤（大頭左兵衛本）……二〇〇
磨常盤（平瀬氏本）……三〇九ノ一
腰越（毛利家本）……三一〇
ほり川（内閣文庫本）……三一七
四國落（大頭左兵衛本）……三三二
しつか（大頭左兵衛本）……三三九
とかし（大頭左兵衛本）……三六〇
笈さかし（大頭左兵衛本）……三七〇
屋嶋軍（毛利家本）……三八二
岡山（平瀬氏本）……三九八ノ一
和泉が城（大頭左兵衛本）……三九九
清重（大頭左兵衛本）……四一二
高たち（大頭左兵衛本）……四一八
含狀（大頭一本）……四三九
一滿箱王（毛利家本）……四四四

元服曾我（内閣文庫本）……四五八
和田宴（毛利家本）……四六五
小袖乞（大頭左兵衛本）……四八〇
つるき讃談（大頭左兵衛本）……四九一
夜討曾我（大頭左兵衛本）……四九六
十番斬（毛利家本）……五一九
張良（内閣文庫本）……五三一
新曲（大頭左兵衛本）……五三六
三木（毛利家本）……五五三
本能寺（毛利家本）……五六五

幸若歌謠

松の枝（高野氏幸若安信本・三浦氏幸若安信本）……五七九
山科（三浦氏幸若安信本）……五八〇
老人（高野氏幸若安信本）……五八一

一天平（幸若長明本）……五八二
天下泰平（幸若長明本）……五八三
長生殿（幸若長明本）……五八四
時津風（幸若直良本）……五八五
敷嶋（幸若直良本）……五八六
天下歸伏（幸若直良本）……五八七
四季の節（高野氏幸若安信本）……五八八
都あたり（京入の内）（曲節集一本）……五八九
日本記の内（短中之部）……五九〇
入鹿の内（曲節集・短中之部）……五九二
大しよくはんの内（彰考館幸若安信本・曲節集・毛利家幸若安信本・幸若正信本・幸若正利本・曲節集一本・三浦氏幸若安信本）……五九五
百合若大臣の内（幸若正利本・曲節集一本・幸若正信本・三浦氏幸若安信本・毛利家幸若安信一本）……六〇一
信太の内（曲節集一本・彰考館幸若安信本・高野氏幸若安信本・毛利家幸若安信一本・幸若直房本）……六〇六

滿仲の内（曲節集・曲節集一本・毛利家幸若安信一本・幸若正信本）……六一一
鎌田の内（彰考館幸若安信本・曲節集一本）……六一七
雪吹の内（短中之部）……六一九
伏見常葉の内（短中之部・曲節集・彰考館幸若安信本）……六二四
兵庫の内（曲節集・幸若正利本・高野氏幸若安信本・曲節集一本）……六三一
硫黄ヶ嶋の内（短中之部・幸若正利本・曲節集）……六三九
文學の内（三浦氏幸若安信本・短中之部・曲節集・毛利家幸若安信本・
彰考館幸若安信本）……六四三
木曾之願書の内（三浦氏幸若安信本・短中之部）……六四八
敦盛の内（曲節集・舞々岡・幸若正利本・曲節集一本・角倉素庵寫本・幸若正信本）……六五〇
奈須之与一の内（三浦氏幸若安信本・短中之部・幸若正信本）……六五六
景清の内（短中之部）……六五七
蓬萊ノ山の内（短中之部・幸若正信本）……六六一
九穴之貝の内（短中之部）……六六二
常葉問答の内（短中之部・幸若正信本）……六六三
笛之卷の内（短中之部・幸若正利本・彰考館幸若安信本）……六六六

未來記の内（彰考館幸若安信本・短中之部）……六六九
鞍馬出の内（短中之部）……六七一
烏帽子折の内（曲節集一本・幸若正利本）……六七四
腰越の内（短中之部・幸若長明本・曲節集）……六七七
堀川の内（短中之部）……六八二
四國落の内（短中之部・曲節集・高野氏幸若安信本・彰考館幸若安信本・
毛利家幸若安信本）……六八四
司土の内（彰考館幸若安信本・曲節集一本・幸若直房本・高野氏幸若安信本・
幸若長明本）……六八八
勸進帳の内（幸若正信本・曲節集・短中之部）……六九四
笈捜の内（短中之部・毛利家幸若安信一本・幸若正利本）……六九九
八嶋の内（幸若正信本・幸若正利本・毛利家幸若安信一本・曲節集一本・曲節集・
彰考館幸若安信本）……七〇三
清重の内（短中之部・彰考館幸若安信本・三浦氏幸若安信本）……七一〇
高館の内（曲節集・曲節集一本・彰考館幸若安信本）……七一三
一清箱王の内（三浦氏幸若安信本・幸若正信本）……七一六

元服曾我の内（短中之部・彰考館幸若安信本・曲節集）……七一八
和田酒盛の内（短中之部・曲節集・彰考館幸若安信本）……七二二
夜討曾我の内（幸若正利本・曲節集・毛利家幸若安信一本・曲節集一本・彰考館幸若安信本）……七二六
十番斬の内（曲節集・短中之部・彰考館幸若安信本）……七三四
張良の内（短中之部・幸若正信本・彰考館幸若安信本）……七三九
新曲の内（幸若正信本・毛利家幸若安信本・彰考館幸若安信本・高野氏幸若安信本・三浦氏幸若安信本）……七四一
三木の内（幸若正信本・彰考館幸若安信本）……七四六
本能寺の内（彰考館幸若安信本・幸若正信本）……七四八
熊野落の内（幸若長明本）……七五〇
湊川の内（幸若長明本）……七五一

索引……七五五

本文

例言

一、この書は、幸若舞乃至音曲の研究の土臺たらしめんがために、今までに知りえた幸若の諸正本中の善本から舞曲と歌謠とを集成して、それらを全く底本の通りに複刊したものである。

一、この書は「幸若舞曲」と「幸若歌謠」との二部より成り、その本文は『序說』で檢討して幸若の正本と認めたもののうち、なほ古く、由緒あり、正本としての條件を十分に備へてゐると考へられるものから撰輯した。その諸本の解說は『序說』に詳かである。

一、「幸若舞曲」に於いては、『大頭左兵衛本』はその全部を收め、この本にない曲はそれに次いで貴重な『毛利家本』を主とし、更に『大頭一本』『平瀨氏本』『大江本』『內閣文庫本』『藤井氏本』『藤井氏一本』『越前本』のうちから採つた。また「幸若歌謠」に於いては、『三浦氏幸若安信本』『高野氏幸若安信本』『毛利家幸若安信本』『毛利家幸若安信一本』『彰考館幸若安信本』『幸若正利本』『幸若正信本』『幸若長明本』『幸若直房本』『幸若直良本』『曲節集』『曲節集一本』『短中之部』『角倉素庵寫本』『舞々詞』のうちから撰輯したが、同曲にあつては、その中の最も長篇にして整つたものにより、全く同一のものにあつては、その書寫の最も古い本のうちのものによつた。

一、從來、幸若舞曲の正本の刊行されてゐるものは、『大江本』『内閣文庫本』『越前本』『藤井氏一本』のうちから「日本記」「入鹿」「百合草若大臣」「信田」「鎌田」「硫黄が島」「文覺」「木曾願書」「敦盛」「奈須の與一」「九けつのかひ」「笛の卷」「未來記」「鞍馬出」「烏帽子折」「靜」「富樫」「笈さがし」「いづみが城」「高館」「切兼曾我」「和田酒盛」「夜討曾我」「張良」の二十四番であるが、これは「日本記」「いるか」「たいしよくわむ」「大臣」「信太」「滿仲」「鎌田」「いふき」「伏見常槃(マヽ)」「築島」「硫黄之嶋」「文學」「夢あはせ」「馬揃」「木曾願書」「敦盛」「なすの与市」「景清 附籠破」「はま出」「九けつのかひ」「常盤問答」「笛卷」「未來記」「くらま出」「烏帽子折」「山中常盤」「靡常盤」「腰越」「ほり川」「四國落」「しつか」「とかし」「笈さかし」「屋嶋軍」「岡山」「和泉が城」「清重」「高たち」「含狀」「一滿箱王」「元服曾我」「和田宴」「小袖乞」「つるき讃談」「夜討曾我」「十番斬」「張良」「新曲」「三木」「本能寺」の五十番を收めた。また幸若歌謡の正本の刊行されてゐるものは、『曲節集』と『短中之部』との「松之枝」「山科」「老人」「四季の節」「都あたり」、「日本記」の内二節、「入鹿」の内六節、「大職冠」の内五節、「滿仲」の内十二節、「雪吹」の内十一節、「伏見常盤」の内十五節、「兵庫」の内十一節、「硫黄ケ島」の内五節、「文學」の内九節、「木曾之願書」の内二節、「敦盛」の内三節、「奈須之與一」の内四節、「景清」の内十節、「蓬萊ノ山」の内二節、「九穴之貝」の内一節、「常盤問答」の内七節、「笛之卷」の内六節、「未來記」の内四節、「鞍馬出」の内五節、「腰越」の内四節、「堀川」の内六節、「四國落」の内十節、「靜」の内一節、「勸進帳」の内六節、「笈捜」の内十一節、「八嶋」の内八節、「清重」の内五節、「高館」の内一節、「元服曾我」の内十節、「和田宴」の内十

五節、「夜討曾我」の内十節、「十番斬」の内十節、「張良」の内三節、「新曲」の内二節及び、『彰考館幸若安信本』のうちの「三木」の内一節、「本能寺」の内一節の歌詞だけであるが、これは「松の枝」「山科」「老人」「一天平」「天下泰平」「長生殿」「時津風」「敷嶋」「天下歸伏」「四季の節」「都あたり」(京入の内)、「日本記」の内二節、「入鹿」の内六節、「大しよくはん」の内十二節、「百合若大臣」の内九節、「信太」の内九節、「滿仲」の内十四節、「鎌田」の内四節、「雪吹」の内十一節、「伏見常葉」の内十五節、「兵庫」の内十五節、「硫黄ケ嶋」の内五節、「文學」の内九節、「木曾之願書」の内二節、「敦盛」の内十一節、「奈須之与一」の内四節、「景清」の内十節、「蓬萊ノ山」の内二節、「九穴之貝」の内一節、「常葉問答」の内七節、「笛之卷」の内七節、「未來記」の内四節、「鞍馬出」の内五節、「烏帽子折」の内四節、「腰越」の内四節、「堀川」の内六節、「四國落」の内十節、「司土」の内十二節、「勸進帳」の内六節、「笈捜」の内十一節、「八嶋」の内十二節、「清重」の内五節、「高館」の内五節、「一滿箱王」の内五節、「元服曾我」の内十節、「和田酒盛」の内十五節、「夜討曾我」の内十三節、「十番斬」の内十節、「張良」の内三節、「新曲」の内九節、「三木」の内四節、「本能寺」の内三節、「熊野落」の内一節、「湊川」の内二節を、それらの正本の通りに收めた。

一、「幸若舞曲」に於ける曲名は、底本に記されたところによつたが、これを缺くものは一般に通じ易い曲名を附した。但、「山中常盤」「含狀」は『序說』に考證したところによつた。また「幸若歌謡」に於ける曲名は、底本に記されたところによつたが、これを缺くときは其の他の歌謡の正本、或は「幸若舞曲」の曲名を

とつた。「幸若舞曲」の排列は、大體詩材の年代により、その性質によつて、（1）王代の史傳に取材したもの、（2）源平兩氏に關する史傳に取材したもの、（3）義經に關する史傳に取材したもの、（4）曾我兄弟に關する史傳に取材したもの、（5）それら以外の特殊な取材のもの並に新作のものの順序をとつた。また「幸若歌謠」の排列もそれに準じた。但、「幸若舞曲」の內、「山中常盤」の次に入るべき「靡常盤」、「屋嶋軍」の次に入るべき「岡山」は、『本文』校了後の發見に係るもので、それぞれの個所に追加した。

一、何れも底本を忠實に飜字し、正本としての性質を保有するにつとめ、宛字、衍字等もそのまゝとし、明かに誤脫ととられさうな個所にのみ（マゝ）と附し、また「ば」のやうな假名に一點、「候」のやうな漢字に濁點の加へられてゐるものは、底本に從つて附したが、異體字略字の特殊なもの、讀物、音曲附等の特殊な性質を有する部分の片假名の他は、すべて通行の漢字と平假名とを用ゐた。また胡麻節、音曲附は、、〳－－／／、、＼ゝ〵〵〳〳〵〵〳〵〵〵ゝ〵ヿヾ〵ゝ〵ゝ〵ゝ〻ー〵ト｜ｉｉ！‥‥ ゜゜゜ 。゜ヽ の譜を特に鑄造し、底本に從つてこれを附したが、ヤキヤはヽに、◌゛は゜に同樣のものとして統一した。なほ朱を以てした文字、記號も別にしわけるところがない。

一、索引は主として固有名詞、事項及び意味、用法等で注目すべき言葉に限り、發音に基いて五十音順に排列した。なほ檢索と繙讀とに便せんがために文字を改めたるは、括弧の內に底本の通りを附記した。

但、「靡常盤」「岡山」は『本文』校了後挿入したもので、その索引は追加としてこれを補つた。

幸若舞曲

日本記

（大頭左兵衛本）

抑日本開闢のみぎむ。いさなきいさなみふたりのみことかたらひをなし。ともにわかちてのたまはく。已に天開るうへ。定て下に國あるへし。八十嶋をもとめむとて。雲の上よりも御鉾をさしおろし。一大海の面をかきさぐり給へとも。ほこにあたれる嶋もなし。さればにや則其くうごうの已前には。天地ひらけはじめず。今じやうこうの時をえ。尊出現の身をわけ。かしらを須彌と名付。眼を日月のことし出入いきを風とし。よつのえたを四州とす。骨はかねなむだは水しゝむらをつちとなし。かみひげを木草とし。青きをひがしあかきを南。白きを西くろきを北と名付。黄なる色を中央とするなり。中をつちにつかさとつて。あまきあぢいて來る。北にはくろき水ありて。しはゝゆきあぢをなすとかや。西には白き金ありて。からきあぢをなせり。みなみにあかき火をしやうじて。にかき味をなせり。東に青き木をしやうじて。すきあちをなせり（カヽル）すきあぢをばやくしとし。双調の聲をせつほうす（フシ）にがきをもつてはふしきの。ほうしやう如來これなり。（下）からきあちをはあみたとしひやうでうの聲をいたすなり。じははゆきはばむしきてう。（下）しやかの音聲是なり。（中）あまきあちをは大日の。一こつてうのひゝきあり。（下）宮商角徵羽。五韻は酸苦あまからしはゝゆく。（上）にうみらくみ。（上）しやうそみじゆ

くぞみだいこみ。五つの聲をあつめつゝ。けこむあこむほうとうはむにや法花とこれを申なり。佛も經も眞言も。此中よりも作りいたす。地獄極樂をしなへて。佛も法も僧法も。一躰かならす三寶。三寶やかて三觀三觀一義に一心一心やかて空にして。へたてもさらになき物を。いかなるまよひふしきにか。是ほとひろき。大海にひとつの嶋のなかるらん いさなぎ御鉾を上させ給ふ。いさなみ御覽じて。何とて其御鉾をあげさせ給ふぞ。天のやうをかたどり。地のゐむぜいのあがつてこそ。ゐむやうともひらくべけれ。此理にまよひ。いたづらに御鉾をあけさせ給ふか。たゝ念比にさがし給へと仰けれは。かさねて御鉾をさしおろさむとし給ふ。その鉾の下だりが。遙の海にとゞまつて。ひとつの嶋となりぬ。いさなぎ御覽あつて。あは。地よとおほせられし其御詞をかたどり。今の淡路嶋これなり。さてそのほこの下だりは。何といへる子細によつて。かたまりけるとたづぬるに。大海のおもてに。大日の梵字のうかむて。なみにゆられてたゝよへる。いゝちのその上に。ほこの露のとゞまりて。かたまり土と成にけり。大日の梵字の其上に。出來初し。國なれは大日本國とは申也。日本國の淡路しま。けしの勢に出來て。天竺もひらけりさて大唐もはしまれり。さしもにひろき天竺國。月をかたとる國なれは。月似國とは申なり。唐土もひろしと。申せとも晨旦國と名付つゝ。星をかたとる國にてあり。日本わかてうは。小國なりとは申せとも。日域と名付つゝ。日をかたとれる國にて。三國一の吾朝ぞ。心のまゝの。壽命にてなかくさかふるめてたさよ

いるか

抑かまたりの先祖を委尋るに。あまつこやねのみことより三十八代の御する。みけこの卿と申て天下にかくれぬ臣下也。君の御おぼえ目出度し。天下のまつり事をもわかまゝにし給へば。よそねみ人へむしゆして。いかにもして御中のあさらけなむをたくみ。ざむしむのきやうがいを奏問すると申せとも。御門御もちいなかりしかと。けには又諸卿一味のおむるにてなだめかたくやむおほしけむ 科もなかりきみけこの卿にちよつかむのせむじをかうふりて。はるかなりけるあつまちや ひたちの國にはいしよある。おもひをばかむさむの。夕部の雲にかけながら。なみたを遠嶋の。みちよりするにさきたてゝ。みもならはざるあつまちや。ひたちの國にくたり。みやのあたりに庵して。あかしくらさせ給ひけれは。あたりの里人みまいらせかしまのみやに。住はとて四郎ねきとそ申ける。いつしかはやくおちぶれ。農夫田舍にまじはりさむのうの時をえ。いつけいのすきをになひ。すむの田をかへし。いつしのくはのはをとり。けむはくのたぐゐをいとなみ。いみしからねとくはうゐむの。去年は今年に。をしうつりあやめもしらす住給ふ かくて過行給ひしに。はりなきいもせの中なれば。若きみ出き給ふ。ありしにかはる御住居にもいつきかしつき給ひけり。すでに其年も打過 夏くれゆけは

（大頭左兵衛本）

みな月も。中の五日のあつき日に。田の草とりに出給ふ。いたはしや若君を。此田のあせにくし出て。青葉の柴を折かさし。中ていねよとちをふくめ。夫婦ともに百草を。とるてに付てなへのはの。さかへむ事を。悦てひめむすとりぞくらさるゝ。かゝりける所に。いづくからともしらざるに。ひとつのきつね來り。かまを口にくはへ。やうしの枕神にをき。かきけすやうにうせければ。ちゝはゝいそき立寄。かまをとりて見給ふに。氷手の内にかゝやく様なかまてあり。もしも寶になるやとて此子にそへてそたてらる。ふゆくれむまの時をえ。はや十六に成給ふたちはなの卿の御時に。農夫田舍のわさなれば。庭の夫にさゝれ。なく〳〵京へのぼりつゝ。百敷や大内の庭の小草を清めしに。ぎやうじの辨は御覽して。おほくのじちやうふの中にいとけなきわつはあり。かたちはやつれ。はてたれとたゝ人ならすおほえたり。こむこつのさうのあり。こむこつのさうとは大臣のさうの事なり。田舍へ今はくたすまし。宮中にとゝまりて。御門をしゆごし申せとて。もむしやうぜうににむせられ右京の太夫にへあがりて。宮中のまじはり。はや雲客に。なり給ふ果報の程のゆゝしさよ。かゝりける所に。そかの入鹿の大臣とて大あくげきの臣下あり。君の御位をうばひとつて。我王にならむとたくむ此事天下の大事とて。東山藤の多くはひかゝりたる。大木のもとにてせむぎひそかに時をえ。かの入鹿の大臣を。右京の太夫に仰付うたるべきとのりむけむなり。勅命なればそむきえず。りやうじやう申かへり。ようちの時狐のあたへたびたる。ひとつのかまをたばさみ。ねらひうかゞひ給へとも。かの入鹿の大臣は。三年の事をかねてしり。劍をたばさみほこをもち。宮中の出仕にもけいごの者前後にみち。先をはら出入はうつへき

やうぞなかりける。かまたり心におぼしめす。人をたばかるはかり事。したしくならてはかなはじと。みめよき女房をたつね。我姫とかうし。いつきかしつき給ひけり。美人はいはねどかくれなし。都の上下かつしつてをよぶもをよばさりけるも。のぞみをかけぬ人はなし。有時かまたり入鹿の臣の御方へ。御文をつかはさる。うき世にきたるしるしに。ぐしを一人もちて候。せめてふうむのいたりにや。かいなき姫にて候を。いもとやらんの其爲か。のそみは多く候へともうけ引かたも候はす。當君の御代におかた様ならては。したしみ申さむたよりもなし。じうしよとおぼしめさるゝとも。めしをかせ給はゝ。みの面目たるへしと書こそ送り給ひけれ。入鹿はおもき人なれども。いもにははやくくつろき。多年望の折節。御ゆるされは喜悦とてやかてむかひとり。いつきかしづき給ふ。かくて若君いてき給ふ。家門の般昌時をえ。何事か是にしかじと上下さゝめき給ひけり。鎌たり聞しめされて。今ははやたばかり寄。やす〳〵とうたはやとおほしめし。風の心ちにもてなし。日をへて万事いつせいのふりをまなひ給へは。宮中の上下とはせ給ぬ人はなし。されども入鹿は見えさせ給はす。待かね給ふ風情にて。入鹿の臣の御方へ御文をつかはさる。すてに浮世のしやうがいよめい今をかぎり也。親子はりなきたいめむも。今度ばかりの事成へし。入鹿の臣も。北の方も御入あれとかゝれたり。入鹿大きにおどろき。車やりだせ牛飼よ。いそがせ給へ御前と。とるものもとりあへす。左右なく出させ給ひしが。中にて心をひつかへし。しばしうしかひよ此車をとゝめよ。御前ばかりやり申せ。われはゆかしとおもふなり。それをいかにと中に。昔も異國にたとへあり。みな面〳〵も聞給へ。語てきかせ申べし。れうぎむ國のれう王と。

げむ國のげむわうと。國の堺をあらそひ。數度のたゝかいありしかど。げむ國は大勢れう國は無勢。しかりとは申せども。れう國の味方にきむぞむきむらくとて二人のたけき兵者あり。天をかけりうき雲をはしる事平地をつたふごとし。大地をとをる時盤石をうがつ事薄氷をとをすことく也。海の上にて馬に乘。みやう火の中に身をかくし。大通自在にかけまはれば。げむ國のつはものかずをつくしてうたれけり。すでにはやけむ王。うたるべきにておはせしが。けむわうかしこき人にて。みめよき女をたつね吾姫とかうし。ぼとう女と名付。きむぞむをむこにとる。きむぞむたげき兵者なれども。いもにははやくくつろぎ。かの姫宮にちぎりげむ國へこそわたりけれ。おと〳〵のきむらくもあにかかやうに成うへ。力をよはぬ次第とて兄弟つれてぞ渡りける。けむ王斜におぼしめし。二人の者を近付。かの姫宮と申はまるがまさしき姫也。ちぎりをこむる汝達。などか子にてなかるべき。親子わりなき中なれば。れう王をうつてたべ。もしさもあらば汝等に。れう國をわたさむと。むつましげにの給へば。兄弟のものども。のがれがたくやおもひけむ。やかてりやうじやう仕り。れう國へしのびかへつて。便宜あらばとねらひけり。れう王御覽じて。例ならず汝等が。丸に近付事よきは。內に惡心こもる故。うたれじとだにおもひなば。いかにねらふとうたるまし。去なから汝等が。日比丸へ仕へ數度のけういをほろぼし。今まて國を知事もたゝ汝等かきうこうたり。日比のちうのふかけれは。命をばなむちらにあたふる也。然とは申せとも。五躰ふくに有ものは佛躰をも請がたし。丸が崩御のはうたいをちつともそむさゝず。きむ山に廟をつき。籠奉るへきなり。すはたましゐと宣ひて。みづから胸の間より。青きくちなは取出し。三

わけにとつてをしはげ。きむぞむにたび給ふ（上イロカヒル）御最後のりむげむに（フシ）まるかいのちはおしからす。汝等他國のたばかりを。（下）しらさりけるそむさんなれ。かならず後悔（ハル）すへきそと。これを最後の。りむげむ（ハル）にてたちまち崩御成給ふ（下ッノ）御遺言に任せて。（上）きむ山に廟をつき。御からだをほりうつみ。魂のくちなはを。げむ國へわたし。げむ王にこれを見せ申。げむわうなのめにおほしめし。爰まてのわざなれは。きむぞむをもきむらくをも。諸友にうちとつて。世をおさめむとの宣旨にてあふ官軍うむかにとりまいたり。（カタッノ）むさんの有様や。れう王おはせし時にこそ。きむぞんきむらくかゆみやのゆうもつよくして。（下）おなからしよこうをせいせしに。れう王崩御の其後は。通力もつかれはて。はかり事もめくらず。劔もとはすいはむや。ほこをなぐる事もなく。たゝいたづらにかれら。うたるへきにてありしが。猶兵法の德によりおほくの中を打やふりれうこくさしてにけてゆく。跡より官軍おつかくるせむはうつきてれうわうの。御廟の前にまいり。いかゝはせむとかなしふ廟（下）の內に聲あつて丸かまつこのりむけむ今こそ思ひしるべけれ。かたきはちかつきぬ。いたづらに汝等を。うたせん事のむさんさよ。いて〳〵さらは汝等を。一みつきみつき。今度の命たすけむ。丸がからたをほりおこしゝきの鹿にをしのせて。ひとつのほこをあたへよ。ふせいでみむと宣旨あり廟はおほきにしむどうし塚はふたつにわれにけり。（下）ふしきのおもひをなしつゝ。骨をひろひつく程に。いかゝはしてなかりけりおとがいの骨のたらされば。左のひさのかはらをとつておとがいの骨にさしつく。さてしゝむらは朽うせぬとりつくろふにあたはす。青黃赤白の四色の鹿にをしのせほこをまいらせたりけれは拍子に合せかけひく。面（下）を合るものはなし。

げん國の兵者數をつくしてうたれけり。しかりとは申せ共其日もすでに暮晩鐘時になれば。ぼうこつとつがふかばねにて。日もいらばはなれて。かなふへしとおぼえす。たかき岡にあがり。入日をしはしとゝまれとまねきたまひたりけれはけに日光もあはれひて。山のはにかゝる日か又巳の刻にたちかへる。(下色)かたき是を見て。いよ〳〵しむいをとゝめ。合戰をやめてにけかへる。後代の名跡。ぶがくに作りをかれたり入日をかへすまひの手。この御世よりも始れり。れう王のひきよくこの御事なりけりばとうの舞と申は。やうじの姫の事なり。きむそむきむらくはらくそむなつそりこれ也。げむじやうらくはやたいな。げむじやうらくに作らるゝ此理りを聞時はわれも女にちぎり。かまたりにたばかられ。明日後悔のあらん時せむひをくうとかなふまし。今日はゆかでもありなむ。明日はひがらよからすとうちとけ給ふ事もなく。今度もたばかりそむじてうたてそやまられけるとかや。(コトハ)錄たり力に及せ給ず。春日の宮にまいらせ給ひ。一七日參籠あつて。一せつ他生の道理にてころすはとがにて候へとも。かの入鹿の大臣はてむがを輕するのみならす。國をついやすげきとたり。入鹿の臣をやす〳〵と。うたせてたまふものならば。奈良の都の其内に興福寺の金堂とて。大がらんを建立し。ぢやうろくのしやかのさうを作り。けう王をいのり國家をごゝくすへしと大願をたて。すこしまとろみ給ふ。夢にもあらずうつゝともなく。葵の榊葉一ふさなをしの袖におちかゝる。亦あたりを御覽ありければ。榊の細杖ひとつあり。そも此杖と申は何といへる心そや。(下イロ)凡杖にもたしゆあり。佛の杖は摩訶薩杖。むみやうぢやう(上下)夜のたみのうきまよひをしる杖也。井の杖はしやくぢやう。くどくのたかきをへうせり。ごむぐげたつの竹杖。はくた王

のしゆはむぢやうし(下人)ゆもむのもてるしゆちやうこそ。ふかき心のあるなるに。(トフシ)今の榊の細杖は。まうろうのめいあむちやうめくらのつくつえなり。照日月は。(ハ入)あきらかにましませと。こくうぢやうやのことくなれは。杖にひかれてたとりゆく。かるが故に名付てめいあむぢやうと申なり。(コトハ)われもめくらにあらすとも。この杖をつきつゝまうもくのまなひをし。かたきに心をゆるさせてうてとおほしめさるゝかと。はや下向のみちよりも此間の病氣に。目をやみつぶしたりとて。たどりありき給ひけり。入鹿此よし御覽じて。人をたばかるはかり事。何とかたくみ給ふらん。おそろしさよと用心す。皆人申けるやうは。かのかまたりと申は。ひたちの國鹿嶋の宮四郎禰ぎか子にて。田夫野人の者なるを。宮中にめしをかれ。きうろにのぼり殿下をけがすとがにより。位にうてゝまうもくに成たるよと云けれは。入鹿けにもとおぼしめし。ちつとくつろぐ風情あり。かまたり今はかうとおぼしめし。やす〳〵とたばかりよせ。うたばやとおぼしめし。比は霜月下旬なるに。入鹿の臣を請し。いろりに火をゝかせ。入鹿の臣とかまたり御手をあたゝめ給ふ所に。かまたりのわかきみの。まだいとけなくましますを。めのとがいだき申。あたりを通り申時。むつからせ給へば。かまたり聞しめされて。何とて其子をなかするぞ。これへ〳〵と仰けれは。さうなくまいらするとて。いかゝしけむ。さかりのすみの火の中へとりおとし申。入鹿此よし御覽じて。誠僞こゝなるへし。などみおとさであるべきと。さしのいて見給ふ。かまたりいとゝさとつて。(中イロ)あらさるかたに手をあけて。(フシ)もたえこかれ給ふまに終にむなしく成給ふ。(中)かいなきしがいをとりあけて。おひさの上にまいらする。かまたりいたき取給ひ。爰はいつくおもてかほ。かしこはいつ

く前うしろ。あしてをさぐりまはしつゝ。こはいかにあさましや。あたりに人はおはせぬか。などとりあけてたひ給はぬ。しひとくど善とたはほさつの行にあらすや。あはれかたはの其中に。めくらは殊にうらめしや。しかも一子の若なれは。かくかたはなるうきみこそ。さきたち。ぼだいをもとはれむとこそおもひしに。眼前みやうくわの中に入るを。たすけぬ事のむさむさよ。いきてかいなきうき身をも。ころしてたへや人々とて天にあふき地に伏て。りうていこかれ給ひけれは。見る人も聞人も袖を。しぼらぬ人ぞなきコトハ入鹿此よし御覧して。あらいたはしやまことにきうもくし給ひけるを。今まてうたがひける事よ。さればわが身に僞ある者が。人の誠をうたがへり。今より後はうたがひの心をやめ。したしむへしとおほしめし。ちつとくつろぐふぜいあり。かまたり今はかうとおぼしめし。便宜よきまなり。御用意あれと内へそうもむ申されたり。御門ゑいらむまし〳〵て。かねて御用意の事なれば。異國よりさんがのへうをわたされ。ひらかるべきだうりあり。諸卿のこらす參内あれ。承と宣ひて。諸卿のこらず參内有。かまたりばかり御不參有。御門ゑひらむまし〳〵て。たとひまうもく成とも。大事のせむぎなる間。參内なくてかなふまじいと。重てちよくしたちければ。かまたりの臣も參内有。いつよりも法衣引つくろひ。小八葉の車のあざやかなるにめされ。やうめい門より車をとゞめ。ざつしきともに手をひかれ。御前ちかく成ければ。恐なればそれよりもかいしやく申ものもなし。しんでむのきさ橋を。さぐり〳〵打のぼり。大床のすのこにしやくもつてかまたり。御前をうしろになし。あらさる方をふしおかむ。心を知たる人々は。爰をせむとゝきもをけす。心をしらざるひと〳〵は。ゆゝしかり

つる臣下をと。なげく人もあり。御門ゑいらむまし〳〵て。いかに鎌たり本座にあれとの宣旨なり。諸卿達ものこらす。御本座あれと申さるゝ。御聲に付てかまたり。さぐり〳〵打のぼり。すてに入鹿の座ちかくなる。入鹿はかたひきをしたて。鎌たりの御手をとつてをしあげむとのしきだい也。鎌たりは入鹿を。をしあけむとのしきだいなり。すでにはや御ざしき。みのけをたてゝおぢおそれ。はやさはがしく成けれは。かたきに色をさとられ。あしかりなむとおほしめし。三年か間ふさいたる兩眼をくわつと見ひらき。弓手のなをしの下よりも件のかまを取出し。うちふり給ふと見えしかは入鹿の臣の御くひは水もたまらす落にけりくひもなきむくろが。おたる所をつむとたつて。かまたりをゝしのけ。めてのなをしの下よりも。氷のやうなる劔をぬき。御座へはしりあがつて。御しとねにいだきつきつゝいつじこくして。北枕にそ伏にけるされとも君はかねてより。あらうみのしやうじの間に。たちかくれさせ給へば。さらにつゝかもましまさす。入鹿うたれて其後。國もとみさかへたみのかまともゆたかなり

たいしよくわむ

（大頭左兵衛本）

夫我朝と申はあまつこやねのみことのあまの岩戸ををしひらきてる日の光もろともに春日の宮とあらはれて國家を守り給ふ也されはにや春日をはるの日と書事は夏の日はこくねつす秋の日はみちかし冬の日はさむけし春の日はのとけくしよつく万ふつをしやう〳〵す四季に殊更すくれ名日なるによりつゝ春の日とかき奉つて春日と名付申也かの宮の氏子は藤原氏にておはします藤原の其中にたいしよ官と申はかまたりの臣の御事也始はもむしやうせうにて御坐有けるかいるかの臣をたいらけたいしよ官になされさせ給ふ抑此官と申は上代にためしなしさて末代にありかたきめてたきくわんとなりけりいつもかまを持給へはかまたりの臣とも申也春日の宮に參籠あつてあまたの願をたてさせ給ふ中にも興福寺のこむたうさいしよにこむりうあるへきとてしやうこむしつほうをちりはめしやこむたうをたてさせ給ふ是によつてくわほうは天よりもあまくたり國のなひきしたかふ事はふる雨の國土をうるほふしたゝさうようの風になひくかことく也きむたちあまたおはしますちやく女をは光明くわうくうと申奉りしやうむ天王の后にたゝせ給ふ二女にあたり給ふをこうはく女と申て三國一のひしむたり　然るにかの姫君のゆうにやさしき御かたちたとへをとるにためしなしかつらのまゆはあをふして遠山に

匂ふかすみにゝ　もゝのこひあるまなさきはせきやうの霧の間にゆみはり月の入ふせひひすいのかむさしはくろふしてなかけれは柳の糸を春風のけつるふせいにことならす　すかたは三十二さうにし情は天下にならひもなしかゝるゆうなる御かたちのいこくまても聞えのありて七御門のそうわうたいそうくわうていは傳えきこしめされ　みぬ戀にあこかれ雲の上もかきくもり月の友もをのつから光をうしなひ給ひけり　臣下けいしやう一とうにそうもむ申されけるやうはきよくたいの御ふせいよのつねならす拜申て候何をかつゝませ給ふへきおほしめさるゝ事さうはちしむか中へせむしあれとそうし申されたりけれは　御門ゑいらむまし〳〵てあらはつかしやつゝむにたえぬ花のかのもれても人のさとりけるか今は何をかつゝむへきこれよりとうかい數千里日本なちの都にすむだいしよくわむか乙姫を風のたよりに聞からに見ぬ面影のたちそひてわすれもやらていかゝせむ

しむかけいしやう承てこれは何よりも目出度御所望にて候もの哉ちよくしをたてたりむけむにてむかへとらせ給ひゑいらむあれとのせむきにてうむかと申兵をちよくしにたてさせ給ふうむかすてにたいそうのきむさつと給りすせむ万里のかいろをすき日本ならの都に付たいしよくわむのみもとにてたてうさつをさゝくたいしよくわむは御覽してわれはこれしちいきとて小國のわうのしむかとしいかにとしていこくの大王をさうなくむこにとるへきと一度はちよくしをちたいあるちよくし立戻て此旨をそうもむすたいそういとゝあこかれ二度のちよくしをたてさせ給ふしやうむくわうてい聞しめし情は上下によるへからす小國の臣下の子なりとも其はゝかりはあるへからすまるへむてうをいたすとて辱もくわうていのいむはんをなされけれはちよくし面目ほとこして

いそき立戻てへむてうをさゝくれはたいそう大きにゑいりよあり吉日ゑらひさう〳〵にむかひふねをそこされ
ける今度のむかひのちよくしにはたちはなのあつそむに右大臣ほうけむ也そも本朝と申は小國なりとは申せと
も智惠第一の國也みれむのいてたちかなふましひけつこうあれとのせむきにてむねとの大船三百そうきさきの
御ふねをはれうとうけきしうと名付てしゆたむをもつてかたとりへにはわうむの頭をまなひともにくしやくの
をゝたれたりふねの内ににしきをしきちんたんをましへくわうようらむけいみかきたて玉のはたは風になひき
こかねのかはらは日にひかりくせいのふねともいつつへしはつひてむくわむ玉をたれ身をかさつたる女官ちに
よ三百人すくつて是は船中の御かいしやくのためにとてかさりふねにそのせられたりけるしちいきよりももろ
こしまて數千万里の海上の御なくさみの其ためにおむかの舞あるへしとてちこ百人すくつて身をかさつてその
せられたるすてに卯月の末つかたともつなといてをしいたすあまの川瀨にあらねともつまこしふねのほをあけ
たりかくて浪風しつかにてふねは本朝つの國やなむはの浦に着しかはちよくしはならの京につくたいしよくわ
むは請取てひとつはいこくの聞えといひ又ひとつは本朝のいくわうのためそとおほしめされ山海のちむくわを
山とつみ五千人の上下を其年の八月なかはより明る卯月始まてもてなし給ふたいしよ官くわほうの程の目出た
さよ卯月もやう〳〵末になりゆきけれは吉日ゑらひ玉のみこしにめされなむはの浦へ御出ありそれよりもれう
とうけきしうにめされ順風にほをあけけれは舟は程なくたいたうのみやうしうのみなとにつかせ給ふたいりに
聞しめされすはやこくむのきやうけいよいさ〳〵御迎にまいらんと左右の大臣女官所百官けいしやう官人しち

やうにいたるまて殘所はなかりけり抑太國の國のかすを申に一千四百四十國郡のかすを申に九万八千四郡寺の
かすを申に一万二千六ケ寺市のかすを申に一万二千八百ちやうあむの市と申は在家の數は百万間人のかすを申
に五十九臆十万八千人たつ市也ちやうあむしやうのみなとより十のみちわかてりけむろけむなむ道とはたつみ
をさしてゆく道卅五にふみわけりおくなむたうと申はひつしさるへゆくみち五十九にふみわけり西けいたうと
申は西を指てゆく道廿六にふみわけりかう北道と申は北をさして行道すゑはたゝふたつ　とうやうたうは舟地
にて末は日本につゝけり　かゝるみち〳〵よりもみつき物をそなへきさきをおかみ奉るあらありかたやたゝ一
めおかみ申人たにもひむくをのかれたちまちにふつきの家となるされはにやくわうていもれうかむにしたしみ
なれちかつかせ給へは諸病をいやしたちまちに　やうしやうのたいゝにあへる心ちしてこちの間世すなをにた
みのかまともゆたかなり　かくて過行給ふにきさきのみやおほしめすわれは是しちいきとて小國のものとあり
なから大國のきさきにそなはりたる其高名を日本へのこしてこそとおほしめし御ちゝのたいしよ官興福寺のこ
むたうおなしきしやかのれいさうを御こむりうあるへきにかの御堂のせにうに佛具ほうくをおくつて末代のし
るしともなさはやとおほしめしそろへ給ふたからにはまつくわけむけいしゆひむせきくわんけんげいと申はう
ちならしての其後に聲さらになりやますとゝめむとおもふ時には九てうのけさをおほふ也しゆひむせきはすゝ
りかの硯のとくゆふは水なくしてすみをすつて心のまゝにつかふ也ほむ〳〵の法花經をたらようにてあなむ尊
者のあそはしたるしちしやうるりの水かめしやくせむたむのけいたいへいるりのはなたてせむたんのけうそく

にくたむしゆのしゆす一れむくわうこの虎のかはこむしきのしゝのかはくわそのかわ三枚かゝるたからの其中にしやくせむたんのみそきにて五寸のしやかを作りにくしきの御しやりをこしむに作り籠なから方八寸のすいしやうの塔の中におさめてむけほうしゆとなつけて是を一の重寶にしおくり文を別帋にかき石の箱におさめておくらせ給ひけるとかや此玉は則興福寺の本尊しやか佛のみけむにゑりはめ給ふへきなりと書こそおくり給ひけれさてしもかゝる重寶をたれかしゆこしおくるへきぎりやうの仁をゑらめとてつはものともをめさるゝに太(マヽ)國のならひにて百人の大將を百こと云千人か大將をせむことゝ万人の大將を万こむとなつけ候かうほくたうの末雲州といふ國に万こしやうくむうむそうとて大かうのつはものありおとらぬ程のつはものを三百人相そへ都を立てたいたうのみやうしうのみなとより一ようのふねにさほゝさしをひての風にほをあけてすせむ万里をおくりけり　かいていに住給ふ八大龍王の惣王玉の日本へわたる事を神通にてしろしめしもろ〳〵の龍王たちをあつめて仰けるは　われらはすてにかいていの龍王たりといへと五すい三ねつひまもなくおつこうにもあひかたき　しやくせむたむのそ(マヽ)みきにて五寸のしやかのれいふつの此なみの上に御座有をいさ〳〵うはいとつてわれらしやうかくなるへし尤然へしとて八大龍王のなみ風あらくたて給へはふねへうたうしちさむしなみちもしつかならさりきされともきとくふしきの佛のめしたる御舟なれは　上かいの天人は雲をしのきふつほうしゆこのやしやらせつはなみかせをしつめさせ給ひけれはふねに子細はなくしてみつはのそやを射ることく殊更追手となりにけり　龍王いとゝいかりをなし浪風にてとゝめすはをさへてうはいとるへしさあらん時にいこく

のものさためてつよくふせくへし龍王のけむそくに然るへきものはなししゆらはたけきものなれはたのふてみんとの給ひてあゆらたちをそたのまれけるかのしゆらの大將まけいしゆらもろ〳〵のしゆらともを引くしてこそ出られけれもとよりこのむとうしやうなれは百千やつかむのけむそくともをいきやういるひに出たゝせほこたうちやうをとりもたせかたきは數万騎候ともいくさは家のものなれは玉におひてはうはいとつてまいらせむと申て　日本とたうとのしほさかひちくらかおきに陣をとり万こかふねを待ゐたり　これをはしらて万こは順風にほをあけて心に任せふかせゆくに日比ありともおほえぬ所に嶋ひとつうかめり見れははたあしひるかへしくろかねのたてのあひよりもつるきやほこのいなひかりたうちやうのかけともかうむかのことく見えけれはあれは何といへる子細そやいかなる事のあるへきと心もとなくおもはれけれともさあらぬ躰にてふかれゆくにかのしゆらの大將まけいしゆら一陣にすゝみいて天をひゝかす大昔にて唯今此沖にせきをすへたるつはものをいかなるものとおもふらんしゆらといへるもの也かいていの龍王達をみつかむためしいしゆをいかにとおほすらむ御舟にましますしやくせむたむのみそきにて五寸のしやかのれいふつよのたからはほしからすそのすいしやうの玉すみやかにわたされ候へさらすは一人もとをすましいと申万こ此よしきくよりもあらこと〳〵しのいきほひさうやさては昔に承るあしゆらたちにてましますよなわか大國のならひにて百人か大將を百こと名付官人といふ千人か大將を千こと名付しゆりやうといふ万人か大將を万こと名付將軍とこれをいふかい〳〵敷はなけれとも一万人か大將なれは万こ將軍うむそうとはそれかしか事にて候尤龍宮よりの御所望にしたかつてすいし

やうの玉まいらせたくは候へとも七御門の中よりもきりやうの仁とゑらまれ日本のちよくしを給はる時日より
も命をはわか君のおんのために奉るされはめいのかるき事は此儀による事なれは命のあらんかぎりは玉におひ
てはとらるましいそけにと玉かほしくはまむこをうつてとれやとてから〳〵とそ咲けるしゆらとも此よしを聞
よりもさらはてなみを見せむとててつちやうらむはのつるきをひつさけうむかのことくせめかゝるまむこ是を
見てかなふへきやうあらされはふなそこにつつと入てしやうそくをそきたりける方こか其日のしやうそくにし
むつうゆけのうてかねさはむやつかむのすねあてし妙法蓮花のつなぬきはきにむにくしひのよろいをくさすり
なかにきくたしてあのくたら三みやく三ほたひの五枚かふとをゐくひにきしのひのをゝそしめたりけるかうま
りけむの大かたなまむ十もむしにさすまゝに大たうれむといふつるきあしをなかにむすむてさけけむみやうれ
むといふほこもつてふねのへいたにつつ立あかる三百余人のつはものともおもひ〳〵に出立てはしふねおろし
をしうかめすてにかけむとしたりけりたうのいくさのならひにてみたむにかくる事はなしてうしを取てかくを
うつてひやうしに合かけ引勢そろへの太皷はらむしよ〳〵しよつてうしかけよとうつ太皷はさそう〳〵とうつ
也ひけよとうつ太皷はおむてうこつとうつ也くむてくひをとれとはつるてうこつとうつ也かなはぬ時のせむに
はしはうてつはうはなしみたれひやうしきりひやうしきうにをよふ時には血をは瀧となかしてかうへをつかに
つめよとうつしゆら唐人のたゝかいはむかしも今もためしなし其上しゆらかたゝかいにくわえむの雨をふらし
悪風をふきとはせはむしやくをふらす事は雪の花のちることくつるきをとはせほこをなけとくのやをはなつ事

まなこをまくかことし身をかくさむとおもふときけしの中へわけていりあらはれむとおもふ時しゆみにもたけ
をくらふへしかゝる神通めいようをまの前にけむし爰をせむとゝたゝかへはすてにはや唐人心はたけくいさめ
とこのいきほひにをされてのかれかたくそ見えにける　去間まむこは御方をめしていひけるはとてもの事にて
あるならはしゆらか大將四五人底のみくすとなしてこそいこくの聞えも然へけれわれとおもはむ人々は供をし
てたへやとてこむかうかいのまむたらたいさうかいのまむたらりやうかいしよそむ一千二百よそむのまむたら
をほろにかけて吹そらしふな底よりも名馬を其數あまた引出す万こかひさうの名馬に神通あしけと名付七きは
ちふむ明六歳おかみあくまてあつうしておつさまむかふよこはたはりおくちそうとうつまねのくさりしゝあひ
ほねなみよめのふしは作りつけたることくなりらつてむのくらをゝきしよつかうのにしきのうはしきにこむ
〳〵ぬつたるるりのあふみりきしゆのちからかわをはしやう〳〵のちにてそめたりけりおなしきおもかひをか
けさせこかねのくつはかむしとかませ錦のたつなゑつてかけ万こゆらりとうちのつてなみにしつまぬうくくつ
を四のあしにかけたれは浪の上をはしる事はへいろをつたふことくなり三百余人のつはものともいつれも馬に
のつたれともみな〳〵うくゝつかけたれは雲井にかりのとふやうに一村かりにさつとちらししゆらか陣へきつ
ているしゆらともこれを見て一ひき二疋のみならす三百疋の馬ともかいつれもなみをはしる事はふしきなりと
きもをけしか程にいさむしゆらともゝにけ眼にそなつたりける大將のうしあゆらすゝみ出て云けるはなふこゝ
さうそかねてより申せし事のちかはぬなふめたれかほのすくやかしおもてかほくせ目にすみたていらむあらそ

ひあらかふ儀にはにましき事にて候そや手をくたかてはいかにとしてかうみやうふかくか見えはこそ一かつせ
むせんとて出たつたりしありさまはあくこうしむゐのよろいをきむみやうけむこのかふとのをゝしめとうしや
うむさむのほこついてしむいくちのはたさゝせ百千やかむのけむそく共を相したかへしきりにときをつくれは
へきてむやふれはしやうにおち海底をうこかしなみをあけこくうさなからとうようしてる日の光もうつもれ
てひとへにちやうやとなつたりけり此程音に承るまむこしやうくむうむそうに見參をせむと云まゝにまむこを
中にとり籠たり万こかつはものとも爰をせむとゝきつたりけりらこあゆら三百人からこむらあゆら五百人手を
くたいてそきつたりけるまむこはめいよの馬のりうみの上にてのるたつなさうかいふとりうはいふのりうかめ
たる馬のあしゆむてのものをつく時わうきやうのたつなきつとひきめてのものをつく時にふきやうのふちをち
やうとうつにくる物をおう時にはせむきやうあをりのあふみのふちをきよくしんたいにのつたりけり西からひ
かしきつてとをる時には三百余人か跡に付て爰をせむとゝきつたりけりいれかへ〳〵たゝかへはしゆらかいく
さはこたれかゝつてかなふへしとも見えさりけり惣大將のまけいしゆら八めむはつひをふりたてゝやつしたの
ほこをうちふりうちしにこゝなりとおうめきさけむてかけにけりまむこ是を見てかなふへきやうあらされはう
しほをむすひてうつとししよてむにふかくきせいする然るへくは觀世音非願たかへ給ふなふしむくむちむ中
ねひ觀音りきしをむしつたいさむちかひ今ならてはしゆらかおそれしけまむのはたをたゝさしかけよやあさし
かけよと下知すれはけまむらはう玉のはたをまつさきにさゝせわれおとらしとせめかゝるまむこかつはものと

もかつにのつてをつふせ〳〵きつたりけり神力もつきはて通力ひきやうもかなはすしそこのみくつとなりにけ
りいきのこるしゆらともすみか〳〵にかくれたりまむこかちとき作りかけもとの舟に取のりしゆらたうしんの
たゝかひにかちぬや〳〵といさみをなしたうとかうらいはしり過日本ちかふそ成にける　去間龍王たちこれを
はさていかゝせむとそせむきせられける其中に取てもなむた龍王のたまはく夫人間の心をたはからんにはみめ
よき女によもしかし爰をもつてあむするに龍女をもつて此玉をたはかつてとるへき也尤然るへしとて龍宮の乙
姫にこひさいによと申てならひなかりしひしむたりしをみめいつくしくかさりうつほふねに作りこめなみの上
にをしあくるこれをはしらて万こは順風にほを上て心に任せふかせゆく　かいまむ〳〵としては又はしやうち
ゝんたりへきてむのおきぬく風くわう〳〵としては又いつれのほくさうにかこえやとさむかしらなしおうかは
らきとの嶋もろみの嶋もめい嶋さつまの國にきかいか嶋ゆきのもとおりつしまのないことゆへなくはしり過九
國の地をはゆむてに見てさぬきの國に聞えたるふさゝきの沖をとをりけり　なかれ木一本うかむてありすいし
ゆかむとり是を見て爰にきたいなる木こそ候へ此程の大風にてむちくたうとのちむかうはしふかれてなかるゝ
やらむと人々あやしめたりけれはまむこ是を見てなんのあやしめ事そとりあけよと云御諚にしたかひはしふね
おろしとりみるにちむかうにてはなしあやしやわつて見よとて此木をわつて見るに何とこゝはにのへかたきひ
しむ一人おはしますすいしゆかむ取これを見てをのまさかりをなけ捨てあつとはかり申万こ此よし見るよりも
いか樣にも御みはてむまはしゆむのけゝんにてしやうけをなさむ其ためなあやしやいかにといひけれは何と物

をはいはすして涙くみたるはかり也万こ重て申けるは何とたるませ給ふともせひにつけておほつかなしたゝ海底にしつめみくつになせといさみをなせはあらけなきつはもの御てにすかり海へいれんとす　龍女はいとゝあこかれてあらうらめしの人の言葉のにふし山を家とするこらうやかむのたくひさへ情はありとこそきけみつからと申はけいたむこくの大王のいつきの姫にてさふらふなるかあるきさきのさむにようつほ舟に作り籠さうは万里へなかさるるたま〳〵きとくふしきに人倫にあひたれはさりともとこそおもひしに何のつみにふたゝひうきかいていにしつむへきそうらめしさよとかきくとくみたれかみをつたへてなみたの露のこほるゝはつらぬく玉のことくなり霜をおみたるをみなへし下葉しほるゝ風情しせいしかやさうに捨られてひしき物には袖しぬれほす日もなしとわひけるも今こそおもひしられたれかつらをかきしまゆすみはちすをふくむくちひるもゝのこひますあひきやうなみとなみたにうちぬれ物おもふ人のふせいかやうちむつけたる御ありさまよそのみるめもいたはしや　さしもかしこきまむことは申せともやかてたるまかされけに〳〵さそおはすらむそれ〳〵とうせむ申せとてやかてふねにのするかくて龍わうのわさなれはむかふ様に風ふいてふさゝきのおきに十日はかり逗留すさなきたにりよはくは物うきまむこ餘にたえかねて風のたよりにかよひきていねかりそめのうたゝねは何となるとの(マヽ)音たかく世にもすゝめのすみうきにおとろかさむかいたはしさにあふきの風をいさめつゝ　月てうさむにかくれぬれはあふきをあけてこれをたとゆ風たいきよにやみぬれは木をうこかしてこれををしゆ　あひ見る人をこふるには文かよはねともこふるならひ君か心をとりにくるなふいかに〳〵とおとろかす龍女は本

よりねもいらすさりなからうたゝねいりたる風情にてたそや夢見る折からにうつゝともなき言のはの夢の浮世のあたなれは人の言葉もたのまれす夜の間にかはるあすか川水ほのあはのかりそめに風にきえぬる言のはの末もとをらぬ物ゆへにあたなたちてはなにかせむ中〳〵人には始よりとはれぬはうらみあらはこそ　其上われは生れてよりこのかたかいもむをあやまたすむしゆより今にいたるまておゝくのしやうをうけし事あるいは六よくししやうに生れこすひはつくのくをうけあるいは三つしやくにおちしたいもつの火にあへりかゝるさいこうをふり今人間と生るゝ事もかいりきによつて也第一せつしやうかいをたもつてはしむのさうとなるちうたうかいをたもつてはかむのさうとなるしやゐむかいをたもつてひのさうとなるまうこかいをたもつてははいのさうとなるおんしゆかいをたもつてはしむのさうとこれなるこれにこゐむしつせいありいはゆるきうしやうかく(マヽ)そうはうひやうはむ一こつこれまたみみやうのみのりとしこちの音せいこれ也是に五つのたましゐありこむしはくいしむなりき此五つのかたちをくそくするを佛と申　五つのかたちかけぬれはくちあむへいのちくるいたりいかにも佛をねかはむする人は五かいをよくたもつへし一つもかいをやふりなはむそくたそくのものとなつてなかく佛になるましい　仰はおもくさふらへと第三のかいもむをいかにとしてやふらんとなみたくみたるはかりにておもひ入てそおはしける万こもたいたうそたち佛法るふの國なれはあら〳〵かたり申あらしゆせうやさては後生の御ためにきむかいをたもたせ給ふか其かいもむの中に六はらみつのきやうあり其中にとつてもにむにくはらみつとは人の心をやふらすいかに五かいをたもちても人の心をやふりなは佛とさらに成かたしさ

れはにや佛には三みやう六つうましますこれはひとへにくわこにしてしよはらみつをきやうとせし其とく今にあらはれて佛となりたまへりたとい一度はたきの水にきりてすまぬものなりとつねにはすみてきよからん戀には人のしなぬかさてもむなしくこひしなは一念五百しやうけむねんむりやうこう生々世々の間につきせぬうらみのふかふしてともにしやしむとなるならは佛にはならすしてしやたうになかくおつへし　かいのしなあまたあり五かいをよつくたもつては人間と生れて五躰をうくるなり十かいをたもつては天人と生れて五すいを請る也二百五十かいはまたしやうもむと生れて佛には成かたし五百かいをたもつてはゑむかくとこれなるこれも佛にえならすほさつさむしゆ一心かい此かいをたもつてはやかてほさつとなりつゝ佛とさらに成かたし大乘圓頓かいこのかいをたもつてはやかて佛に成なり大せうのかいきやうは二念をつかぬかい也しむたいはむさうにてかしむもとよりしくうなりしやうしにもつなかれすねはむにさらにちうせすしやしやうすなはちきよけれはすゝくへきあかもなしいとふへきほむなうなしねかひてきたる佛なし見る一念をほうとし聞事をみのりとす爰をしらぬをまよひとすゐむやう二つわかふの道いもせふうふのなからへこれ佛法のみなもとおろかにおもふへからすおなひきあれやとそおもふいかに〳〵と申けり　龍女は聞しめされてそれはほつしむのみのりとし佛法におひてはひさうの所なれともねかふ事なくしては佛とさらに成かたし上代はきも上こむにしてちへも大智惠なるへし末世の今はけこむにて智惠ある人もすくなしむかし上代の大智惠の人たにも家を出てさいしをすて法のためになむきやうす七た太子はかうゐなるはむしやうの位をふり捨わりなきちきりふかかりきやしゆたら女

をよそに見十九にて出家をとけたむとくせむのほうれいあらせにむをしとたのみわしのみやまのれいほうにたきゝをこりみをこかしせむこくにむすふあか水こほりのひまをくむたひになんたは袖のつらゝとなるよるは又よもすからせにむのゆかの上にしさせむのとこのふとむとなりかゝるしむくのこうをつみまさしくしやかとなり給ひ三かいのとくそむししやうのゑことまし〳〵て一代しやうけうをときひろめ給ふ也爰をもつてあむするにほむなう即菩提心生死即ねはむとてさいしをたいしさふらひて佛とやすくなるならはなとや太子しやくそむは王の位をふり捨てきさきをいとひ給ひけむ其外せうくわのらかむたちいつれかさいしをたいして佛となりし人や有さても佛の御おとゝなむた太子と申せしはしつきほむなうつきすして女人をこのみ給ひしをかくては佛にならしとて佛ほうへむめくらして淨土ちこくの有様を即心に見せ奉り終に出家とけさせてなむたひくとそなし給ふ　いとゝこのむしやきやうをよしとをしへ給ふはまうもくにあしき道をしゆるふせいなるへしかやうに申せはとてもとよりわれは佛にて有也こくういつしやうとう一たいかしらはやくしみゝはなはあみたむねはみろくはらはしやかこしは大日如來也其外十方の諸佛達もろ〳〵のほさつとしわかたいに具足し十方のこくうにほうによとしておはします來りもせすさりもせすいつもたえせすましますをほつしむ佛と申かたちを作りあらはししやうとをたてゝすみかとし給ふをほうしん佛と申也八さうしやうたうし給ひてのりをとき即しゆしやうをりやくし給ふをおうしん佛と申也三心をとりわき一心を信するはさとりの前の佛なり三心一そくとくわむしいつれをも信するをさとりの前と申佛とならん其ためなむきやうくきやうせむものいかて善惡みたるへし身

はいたつらになさるゝとかなふましと仰ける　去間まむこ事の外に腹をたていかに〳〵聞しめせ佛をねかふ人はみなたうと智惠としひしんひとつかけても成かたしたうといつはきやうたい智惠といつはさとりの心しひといつはいつさいしゆしやうをふかくあはれみて人の心にしたかへり第一しひのかけては佛と更に成かたしあふ所詮物を申せはこそ言葉もおゝくつくれ今は物を申ましいかくて爰にひれふしおもひ死となつて此世のちきりこそあさくともちこくかきちくしやうしゆら人天に生れかはり死かはり六道四しやうの其中をくるり〳〵と追めくりうさもつらさものちの世におもひしらせ申さむと其後物をいはす龍女はもとよりかやうにめされむためたはかりすまさせ給ひてたまをのへたる御手にて万こかたもとをひかへさせ給ひなふいたうなうらみさせ給ひそよまことに心さしのましまさはみつからか所望をかなへてたへくさの枕のうたゝねの露の情は夢はかりちきりなむ万こ餘のうれしさにかつはとおてみをいたきなふこはまことにて御坐候かふたつとなき命をもまいらせむと申いやそれまてもさふらはすけにやらむ承れはしやくせむたむのみそきにて五寸のしやかの靈佛の舟に御座有よしを承る其すいしやうの玉みつからに一夜あつけさせ給へともかくも仰にしたかふへし万こ此よし聞よりもあらしやうたいなやしよの所望とこそおもひしに此すいしやうの玉におひては中〳〵おもひもよらぬ事なるへしとふつつとおもひきりけるかいや〳〵何程の事のあるへきそおもひなをしさても〳〵御みは何として御存候ひたるそやさしくも御所望候物哉さらはそつとおかませ申さむとくろかねしやうをおろしわむはむをもつてふうしたる石のからうとの中よりもすいしやうの玉をとりいたし龍女のかたへわたすけいせいと書ては都

かたふくとよまれしも今こそおもひしられたれかくてしうあひれむほのわりなきちきりとみえつるか三日も過さるにかきけすやうにうせぬ玉はと人に見せけれはとりてうせぬと申たゝほうせむとあきれはてこくうに手をこそたんたくすれ　あら口惜や龍宮よりたはかりけるをしらすしてとかう申にをよはすとのこるたからをさきとしたいしよ官のみもとに付さま〳〵のほうふつと取出してたいしよくわむにまいらせ上るたいしよ官は御覽して送り文の其中に第一のたから物すいしやうの玉の見えぬは如何とたつねさせ給ふ万こ承りつゝむへきにて候はすありのまゝに申へし此玉をとらんとて龍王度々に所望するをしみてさらにいたさすしゆらをかたらひとらんとすちむのたゝかひをのつから言葉にものへかたしふてにもいかてつくすへきおゝくのしゆらを打とつて龍王なうをやすめ今はと心やすくしさぬきの國ふさゝきのおきをとをりし時なかれ木一本うかむたりすいしゆかむとりこれを見爰にきたいなる木こそ候へ天ちくたうとのちむかうはしふかれてなかるゝやらむと人々あやしめたりけれは万こ此よし聞よりも何のあやしめ事そとりあけよとけちをなす御意にしたかひとりあけ見るにちむかうにてはなしあやしやわつて見よとてとりあけ見るに天下ふさうの天女あり海へいれむとせし時りうていこかれかなしふを見れは餘かはゆさにたゝ一夜とうせむすひまをうかゝひしのひ入てとりてうせぬと申かまたり聞しめされて餘おもへは無念なるにせめてわれを具足し其浦の有樣をわれに見せよと仰けれは承ると申戻りのふねにのせ申ふさゝきの沖へをし出して爰なりと申たゝはう〳〵としたる浪の上を御らむしてむなしく戻給ふ　道すからおほしめすさもあれ無念なるもの哉三國一の重寶を吾朝のたからとはなさすしていたつらに龍

宮の寶となしけむくちおしさよよく〳〵物を案するに龍宮かいは、六道におひてもちくしやうたうの内人間の智惠にはるかにおとるへき物をさあらむ時は何としてかたはかられけむふしきさよ　われ又せむけうほうへんしいかにもあむをめくらし此玉におひてはとらふする物とおほしめし都にかへり給ひてうせきあむをめくらし玉をとるへきはかり事くふうまし〳〵けれともさすか海中へたたつてたしう遠嶋ならされはふねのかよひちあらはこそしかりとは申せとも人足におひておやたいせ太子は辱もによいの玉をとらんとてゑむしの貝をもつてきよつかいをはかりつくしつゝ終にほうしゆえ給へり大願としては又終にむなしき事あらしわれもちかひてねかはくは生々世々の間に此玉におひてはとらふす物とおほしめし都の内をしのひいてかたちをやつし給ひ又ふさゝきへくたさる（マヽ）る　かの浦に着給ひ浦のけしきを見給ふにあまともおゝくあつまつてかつきする事おひたゝしゝかのあまの中に年のよはひはたち計に見えみめかたちしむしやうなるかるすいにむつれてあそふ事は唯へいろをつたふことく也かまたり見籠給ひてかのあまのとまやに宿をとり日數を送らせ給ひけるにあまにもいまた妻もなしかまたりたひのひとりねの床もさひしき事なから爰にて日をやかさねけむねかたけれとも姫松のはや浦風にうちなひくなにはもつらき浦なからそよよしあしといひかたりてふたりあれはそなくさみぬ　うきねのとこのかちまくらなみのよるにも成ぬれはともゝなきさのさよちとりふきしほれたる浦風に聲をくらふるなみの音すさきのまつにさきあれは木すゑを浪のこゆるに似てしほやのけふり一むすひ末はかすみにきえ匂ひ夢ちににたるうたかたのなみのこしふねかすかにてからろの音のとをけれは花になく音のかりかねかわれも都

の戀しさに聲をくらへてなくはかりうきみなからもまきのとを明ぬくれぬと過ゆけは三とせになるは程もなし

かくて男女なからへわりなき中のちきりにや若君いてき給ふ今はたかひに何事をも打とけたりし色見えたりかまたり仰けるやうは今は何をかつゝむへきわれこそ都にかくれもなきたいしよくわんとはわか事也心にふかき望のありてこのほとこれにありつるそ然へくはみつからか所望をかなへてたひてむや　あま人承りなふこはまことにて御座さふらふかあらはつかしや四海に御名かくれもなきかゝるきにむにしたしみ申ける事よひとつはみやうかつきぬへし又ははくちよけせむにてはたえはなみのあらいそたちゐはいそのなかれ木　聲はあらいそに　くたくるうつせなみの音　かみはやしほに引みたすつくものことくなるみにて都の雲の上人におきふしひとつとこにして見ゝえぬるこそはつかしけれしかしたゝみをなけてしなむとこそはくときけれ　かまたり仰けるやうはとてもしせむいのちをわかためにあたへ龍宮かいへわけ入てたつぬる玉のあり所を見てかへれとの御諚なりあま人承りて龍宮かいとやらんはありとは聞ていまた見すゆきてかへらむ事はかたかるへしたとひいかなる仰なりともいかてかそむき候へきとかまたりに暇を申一ようのふねにさほをさし沖をさしてこき出なみまをわけてつつといり一日にもあからす二日にもあからす三日四日もはや過て七日にこそ成にけれ　かまたり仰けるやうはあらむさんやかのものはうほのゑしきとなりけるかあやしやいかにおほつかなしと心をつくさせ給ふ所によみかへりしたるふせいにて本のふねにそあかりけるかまたり御覽し候ていかにととはせ給へはしはしは物を申さすやゝありて申けるはなふ此土より龍宮かいへゆくみちは事もなのめの事ならす一つのかしらを

さきとしてくらき所をまほつてちいろの底へわけているうしほのるすゐのつきぬれは紅いろの水そあるなをし
底へ分ゆくにこかねのはまちにおちつく五色の蓮花おひふしあをきくちなふおゝくしてれむけのこしをまとへ
りなをしさきを見渡すにれいかきよくなかれ水の色は五色にてさうかむたかくそはたてり川にひとつの橋あり
七寶をちりはめ玉のはたほこたてならへ風に任てへうようすかの橋を渡るに足すさましく肝きえ夢うつゝとも
わきまへすなをしさきを見わたすにろうもむ雲にさしはさみ玉のまくさはかすみの内こかねのかはらは日にひ
かりさうてむまてもかゝやけり三ちうのくわひらうに四しゆの門をたてたるひとつのたいりおはしますりう宮
しやうこれ也けりへいるりの柱をたてめなうのゆきけたにはりのかへをいれにけりししゆのまむしゆのやうら
く玉のすたれをかけならへちやうにも綾をかけつゝとこにしきのしとねをしきちむたんをましゑなをらむけ
いをみかきたつかゝるめてたきうたくにしやかつた龍王はしめとしてわしゆきりうにいたるまて法衣をかさ
りさせらるゝもろ〳〵のせうりうとくりうこかねのよろひかふとをきて四つの門をまほれりさてもたつぬる玉
をは別にてむを作つてたからのはたをたてならへかうをもり花をつみ二六ちゝうにはむをおりいねうかつかう
中〳〵に中にをよはさりけり八人の龍王時々刻〳〵にしゆこすれは此玉をとらん事今生にてはかなふましまし
て未來て取かたしおほしめし切給へわかきみとこそ申けれ　かまたり聞しめされてさては玉の有所をたしかに
見つるもの哉ありとたにもおもひなはとりえむ事はけつちやうなり龍ともゝはかり事をめくらしてたはかつて
取たれはわれもたくみをめくらしてたはかつて取へきなり夫龍神と申は五すい三ねつひまもなくくるしみおゝ

き御みなり此くるしみまぬかるゝ事はしらへの音によもしかしこゝをもつてあむするに龍王をたはかるならは
舞と管絃にてたはかるへし此海のおもてに極樂淨土をまなふへし玉のはたほこ百なかれたてならへさて又かく
やをさうにかさつて左右の絃管をしらへすまし其みきりにみめよき兒をそろへおむかくをそうする程ならは只
天人に似たるへしさあらん時に大僧正からりむを打ならし上天下界の龍神をおとろかしくわむしやうする程な
らはすゝめによつて神佛のそみ來臨ましまさは龍宮の都より八大龍王先としてそくはくのけむそくともを引く
して出らるへし其間は龍宮かいには龍ひとりもあるましきそ留守の間を伺てそろりと入てぬすみとつてやたへ
かしとそ仰ける　海士人承りあらゆゝしの君の御たくみやさふらふかゝるせむけうなくしてはいかてたやすく
とりえなむたゝし留守の間なりとも玉のけいこは有へしたといむなしく成ともまたたらちをのみとり子のちふ
さをはなるゝ事もなし君ならて後の世をあはれむ人の有へきかとてなくより外の事はなし　かまたり聞しめさ
れて心安くおもへもしもむなしくなるならはけうやうの其爲にならの都に大からんをこむりうすへし又此若に
おひてはいまたようちなりといふとも此浦によそへたむかいこうとなつけ都へ具足して上てむかの御目にかけ
ふひとうとなし藤原のとうりやうたるへきよしをこま〳〵との給へはあま人承つてよろこぶ事はかきりなしや
かて都へ使者をたて舞のしをめしくたしあたりの浦のふねをよせしゆたむをもつて色とれるふたいこそはりた
てけれ十杖のはたほこ百なかれたてならへ風に任てひるかへせはさうかいはやかてしやうとゝなる左右のかく
やにかさりたてたる大たいこまむまくを上させしゆれむにたまのすたれをかけ法座をさうにかさらせうけむち

とくの大僧正からりむをうちならし上天下界の龍神をおとろかししやうすれは八大龍わうしゆらいしてせむきまち〳〵なりけりなむせんふしうふさゝきの浦にして法座をかさりてうしやうあるいさや來臨やうかうなつてちやうもむせむとせむきしてそくはくのけむそくとも引くしてこそ出られけれ已に龍神出給へは國中の兒たちみをかさりまうけこゝをせむとゝまひ給ふたゝ天人のことくなり去程に龍神五すい三ねつたちまちまぬかれ給ひける間何事も打わすれ舞に見とれ給ひてふさゝきに日そおくらるゝ　すはや隙こそよけれとてあまもいてたちをかまへけり五色の綾を以てみをまとひやくわうの玉をひたいにあてぬのつなのはしを腰につけかねよき刀わきはさみ浪間を分てつつといるたといなむしのみなりともとくのうを龍かめ大しやのおそれもあるへきに申さむや女と身とあつて一人海へいる事はたくひすくなき心哉數千万里のかいろを過龍宮の都につくやくわうの玉にてらされてくらき所はなかりけりかねて見をきたりし事なれはまよふへきにて候はす龍宮のほうてむにあかめをくすいしやうの玉おもひのまゝにぬすみ取て腰に付たる約束の布つなをひけは船中の人々あはや約束こゝなりとてむ手につなをそ引にけるあまはいさみてかつけは上よりもいとゝ引あくる今はかうとおもふ所に玉をまほれる小龍此よしを見つけ跡をもとめておふ事は只みつはのそやを射ることく船中の人々あはやほのかに見ゆるにあふくり上よと下知するにあまの跡に付てひとつの大しやおふてくるたけは十丈計にてひれにつるきをはさみたて眼はたゝタ日の水にうつろふことくなりくれなゐのことくなるしたのさきをふりたてすきまなくおつかくるあまかなはしとおもひける間かたなをぬいてふせきけり船中の人々此よしを御覽してをあかき身を

いたきおつつふいつころむつあはや〳〵と仰けりかまたり御覽し御劍をぬきようちの時きつねのあたへたひたるひとつのかまにとりそへとむていらんとし給ふを船中の人々ゆむてめてにすかつてこはいかにとてとゝめけりすてにはやこのつなのこりすくなく見えし時大しやはしりかゝつて情なくもかのあまのふたつのあしをけちきれは水のあはとそきえにける　むなしきしかいを引上諸人の中にこれをゝき一度にわつとさけふかまたり御覽してたまはとりえぬ物ゆへに二世のきえむはつきはてぬむねの間にきすあり大しやのさけるのみならすとあやしめ御覽有けれは此きすの中よりもすいしやうのたま出させ給ふ大しやのおつかけし時かたなをふると見えしはふせかむためになくし玉をかくさむ其ためにわかみをかいしけるかとよせめて此きすをわかみすこしおひたらはかほとに物はおもふましきを女ははかなきありさま哉男の命をちかへしとていのちを捨るはかなさよともし火にきゆるよるのむしは妻ゆへそのみをこかすなり笛によるあきの鹿ははかなきちきりにいのちをうしなふそれはみな〳〵しうあひれむほのわりなきちきりとはいひなからかゝるあはれはまれなるへしわれには二世の氣縁なれは又こむ世にもあひ見なむなむちは今こそかきりなれわかれのすかたをよく見よとていとけなき若君をしかいにをしそへたりけれはしゝたるおやとしらぬ子の此程はゝにはなれつゝたまにあふたるうれしさにむなしきちふさをふくみつゝはゝのむねをたゝくを見て上下万民をしなへて皆涙をそなかしける　あまはむなしくなりたれとかしこきせむけうはうへんによつて龍宮界へうははれしむけほうしゆを事ゆへなくうはひ返し給ふ事有かたしとも中〳〵に申にをよはさりけり此たまはすなはちおくり文に任せ興福寺の本尊しやか佛のみ

けむにゑりはめ給ひけるとかや正心のれいさうしやくせむたんのみそきにて五寸のしやかを作りにくしきの御しやりこしむに作り籠なからほう八寸のすいしやうの塔の中におさめむけほうしゆと名付三國一の重寶龍王のをしみ給ひし理とこそ聞えけれ

大臣

（大頭左兵衞本）

抑（コトハ）むかし吾朝に嵯峨の帝の御時。左大臣きむみつと申てならひなき臣下一人おはします。然どもきむみつに御代をつくべき御子なし。角てはいかゞ有べきと。大和國初瀬の寺にまふで。悲願つきせぬ觀音の利生をあふき。三拾三度のあゆみをはこび申子をこそし給ひけれ。今にはじめぬ觀音のねがひのしほもはやみちて。程なく御子をまふけ給ふ。しかも男子にて御坐ある。夏のなかばの若なれば。花にもよそへてそだてよとて。百合草若殿と名付申。いつきかしづき給ひけり。七歳にて御はかまめし。十三にてうゐかふりをめされ。四位の少將殿と申拾七歳にては程なく。右大臣にならせ給ふ。御わらはなによそへて。百合草若大臣と名付申。三條みぶの大納言。あき時の卿の姫君をむかへとらせ給ひ。ゑむなうひよくのかたらひはあさからすこそ聞えけれ。角て過行給ひしに。そも吾朝と申は國とこよりもはしめて。さていざなぎといざなみは。かの國にあまくだり。二柱の神となつて。第一に日をうみ給ふ伊勢の神明にて御坐有。其次に月をうむ。高野のにうの明神月よみの御子是なり。其次に海をうむ。つの國にお立ある。ひるこの宮ゑひす三郎殿にておはします。其次に神をうむ。出雲の國そさのおは色カ（ヒヽ）大社（ヒヽ）にておはします。其外まつしやのふるいとうは。みな此神の惣社（ハヽ）たり（ヒヽフシ）神の本地

を。佛とは。よくもしらさる言葉かな。こむぼむしの神こそ。佛とならせ給ひつゝ衆生をけどし給ふなれ。それはともあらはあれ。そも吾朝と申は。よつかいよりはまさしく。魔王の國となるべきを。神みづからひらき。佛法こしの國となす。大まわうたけじざひ天に腰をかけ。種〻の方便めぐらして。いかにもして吾朝を。まわうの國となさむと。たくむによりて。即天下にふしきおほかりき。此度の不思儀には。むこくのむくりかほうきして。四万そうの舟ともにおゝくのむくりを取のせ。りやうざうと火水。飛雲とはしる雲。かれ四人を大將にて。つくしのはかたに舟をよせ。放火をあけ大皷を打て。とくのやをはなちせめ入とこそ聞えけれ。國にありあふ弓取。ふせぎたゝかひけれども。かれらがはなつとくの矢はふる春雨のことくにて。しほう鐵炮はなちかけ。天地をうこかしせめいれば。かなふべきやうあらずしてみな。中國さして引しりぞく。そも吾朝と申は。國はそくさむへんとにてちいさしとは申せとも。神代よりもつたはれる三のたから是あり。一にはしむしとて。大六天の魔王の。をしての判是あり。二つにはないし所とて。あまてる神のみかさみ也。三つにつるぎほうけむとて。出雲の國。ひかみの山の。大じやの尾よりもとりしれいけむ也。これみな天下の重寶にて。代々のみよに。いこくよりけういおこつてあざむけども。神國たるによりつゝ。ぼう國となす事もなし。今もあまてるお御神の。いすゞ川の末つきず。伊勢へほうべい奉り。ないし所の御たくせむによりつゝ。討手を遣すべしとて。諸社のほうへい臨時の。御神樂まいらせ給ひけり。其中にとつても。内侍所の御たくせむは辱なふそ聞えける。七つにならせ給ひし。乙女か袖にたくして。すゞふり立てしむたく有。むくりかむか

ふ日よりして。天か下のかむだち。たかまか原にしゆえして。いくさひやうぢやう取〻なり。しかりは申せとも。むくりか大將りやうざうか。しよでうにはなすとくのやが。住吉のめされたる。神馬の足にたつ。此きすいやさん其ために。神のいくさをのべられたり。是によつてけうい共。力をえたりとせめ入なり。されともかれらがぶるまひは風ふかぬまの花なるべし。いそぎ此度ぼむふのいくさをはやめよ。神もむかはせ給ふべし。ぼんぶのいくさの大將に。左大臣か嫡男に。百合草大臣をむくべきなり。かの人討手にむくならば。諸神。合力まし〻〻てこむがうの力をそゆへき也。若さもあつて下向せはくろがねの弓矢をもつへき也。おそくて此事あしかりなむいやいそけ〻〻と神侘あつて神はあがらせ給ひけり。御父の左大臣御子のゆり大臣をめして下向せよとの御諚也。神たくといひりむけむ又ぶめいなりければ。吉日をゑらみ。都出と風聞す。さて神詫に任せて。かねのゆみやを持べしとて。かぢの上手をめしよせ一所を清めかちやとさだめ。せい〻〻をつくして作りたつる。弓のながさは八尺五寸。まはりは六寸二分なり。矢數は三百六十三やつかは三尺六寸也。ねには八めのかぶらを入。弓もやもくろがねにて。ひきてはかへすべからすと人魚のあぶらをさし給ふ。すてにえらふ吉日はこうにむ七年かのへさる。二月八日に都をたち。國にありあふゆみとり。皆たうぜむの兵者にて。一騎ものこる所はなし。大臣殿の御勢は三十万騎にしるさるゝ。其外已下の軍兵は。百万騎ときこえける。都を立て其日は〻八幡の御前に〻ぢむをとり明れはつの國。難波方こやのにぢむをとり給ふ。去程に王城のちむじゆをはしめ奉り。いくはんをぬぎかへ鎧をめし。せいれいみさいの色の上には。やしやら神のかたち

をげむじ。雲にのりかすみにのり。ひとつは國家をまもらんため。又は氏子をしゆごせむため。我か氏子〳〵。かたちにかけのそふことく さきにたつてぞまもらるゝ。扨神たちの儀によりて。神風涼しく吹けれは。つくしに陣とるむくり共。此由を承つて今度はまつ〳〵ひけやとて。四万艘にとりのつて。むくり國へそ引にける。扨こそ天下も。おだやかに國も。目出度おはしけれ 大臣殿は奏問申されたりけれは。内よりのせむじには。大臣か此度のけしやうにはつくしの國司をとらするぞ。いそいで罷下れとの宣旨也。大臣殿は九國にすまむ物うさに。治退申されたりけれども。國のまもりのためなれば在國せでは叶まじと。重て勅使たちければ。力をよばす御臺所を引ぐして。いそぎつくしに下。豐後のこうに京をたてさなから都におとらず住せ給ふ。又都はくぎやうせむぎまち〳〵たり。むくりが大將は四人ときこふるを。せめて一人打取てこそ。いくさにかちたるしるしもあるべけれ。けういは二さうのものなれは。何とおもひてか引つらん。心の内もさとりがたし。まづかうらい國へ打越七百六十六國をせめしたがへ。其大勢をそつしはくさい國をせめなびけ。其後むくりをせめむ事。何の子細の有べきとせむきして。つくしへ勢をぞ下されける。大臣殿も吉日をえらひ御出とこそきこえけれ。新ざうの大船百余そう。枝舟は數しらず。浦〳〵れうふねかたせふね。惣じてふなかずは八万艘。むくりは四万艘にてむかひけるに。一ばいましてそむかはれける。大臣殿の御坐舟をば。錦をもつてかざりたて。ともへにいはふ神〳〵に。六十余州のれい神達の。ゐかき鳥井榊葉。雲に光をまじへつゝ。ほうくわ太鼓をそふすれは みのけもよたつ 計也。卯月半に大臣は。はや御座舟にめされけり。御臺名殘をおしみて。

おなしふねにとの給へとも。おもひよらすとの給ひてをしこそとゝめ給ひけれ。さてふねどものともへには。五色のへいをはぎたてゝ。神風涼しく吹ければ。まゑむまがいもおそるべし。昔のたとへを引時は。神宮后宮の。新羅をせめさせ給ひし時神あつめして。むかはれしもかくやとおもひしられたり むこくに陣取むくりども。天のいろをきつと見て二さう神通のものなれば。うつてのむくとさとりをなし。ちかふよせてはかなふまじい。しほざかひへ打出。ふせいてみむとせむきして。四万艘のふねどもに。おそくのむくりを取のせ。おめきさけむでをし出し。たうと日本のしほさかひちくらか沖にちむをとる。大臣殿の御坐舟をも。ちくらが沖へをし出す。かれもおそれてちかづかす。たがいにおそれてよりもせて。五十余町をへたてつゝ三とせの春をそおくられける。かゝりける所に。むくりが大將りやうざう。一陣にすゝみ出。天をひゞかす大音にて。われらか軍の手だてには。霧をふらするならひあり。きりふらせよと下知すれば。きりむ國の大將。ふねのへいたにつつ立あがつて。あをきいきをつく。いかなるじゆつをかかまへけむ。霧となつてそふりにける。はじめはうすくふりけるが。しだひ〳〵にあつくなつて。こくうぢやうやのごとくにて。一日二日にてはれもせて。百日百夜ぞふりにける さしもにたけきゆみとりも。霧のまよひにわろびれて。弓の本すゑだにもしらされは。引へきやうこそなかりけれ 此霧はかりにおかされて。さうはのみくづと。ならん事うかり。なむとそなけきける 大臣殿は無念至極におほしめし今ならていつの時神力をあをくへきとおほしめされける間。うしほをむすびてうづとめされ。南無天照皇太神宮 其外六十余州の大小の神祇。各ちからをよせ給ひ。此霧晴してた

び給へと。きせいを申させ給ひければ。あらありかたや。きせいのしるしはや見えて。いせの國。荻吹嵐に霧も程なく住吉の まつふくかぜも涼しくて。まよひの闇も白山の。雪よりはやく。きえけれはいつしかかしまかむ取もよろこびのほをそあげにける 大臣殿はなのめならずに御よろこびあつて。さらばいくさをはやめむとてはし舟おろしめされけり。熊大勢はむやく。おもふ子細のあるぞとて。十八人を引くして むくりが舟へぞかゝられける。りやうざう火水是を見てたうらうかをのといさみつゝ。ほこをとはせつるぎをなげ。四はうてつはうはなちかけ天地をうごかしせめけれど。大臣ちつともおさはぎなく。むくりがふねへそかゝられける。ふねのへさきにつかせたるくろかねのたての面には。はむにやしむぎやう觀音經。こむでいにてぞかゝれたる。そむしやうだらにの中よりも。しやや〳〵びむじややといふもじが。三どくふしぎの矢さきとなつてむくりがまなこをいつぶいたり。不動の眞言に。かむまんふたつの文字か。つるきとなつてとひかゝりおほくのむくりがくびをきる。觀音經のめいもむに。おふいきうなむといふ文字が。金のたてとなつてむくりが矢さきをふせけば。味方一騎も手もおはず。さてこそ諸人ちからをえ。ちむこのかつせむ手をくだく。大臣殿は御覽じて。いつの用ぞと仰あつてくろかねの弓のつる音すれは。雲の上までひゞきあり。三百六十三筋の矢を。のこりすくなくあそばせは。りやうさうはうたれぬ。火水腹きりぬ。飛雲とはしる雲。かれら二人はいけどられぬ。其外以下のむくり共。あるひはうたれ腹を切て。海へ入てしするもあり。四万艘にとりのつたる。むくりおほくうたれて。わづか一万艘になる。さのみはつみになるべしとて。起請をかゝせたすけをき。本地へもどさせ給ひ

て。いや日本はいくさにかちぬとて八万艘のふな内のあふよろこびあふ事かぎりなし 大臣殿は此まゝ御歸朝あるならば。めてたかるべき事共を。此間の長陣にせいきをつくさせ給ひ。めのとの別府をめして仰けるは。いづくにか嶋やある。あがりて身をやすめむとの御諚也。別府承て。はしぶねおろさせ尋るに波間にひとつの小嶋あり。げむがいが嶋是也。みかたの中をばしのびやかにあげ參らせ。御しきがわをのべ。岩の角を枕にせさせ申すいめむならせ給ふ。大力のくせやらん。ねいりてさうなくおきさせ給す。夜日三日そまとろみ給ふ。去間別府兄弟はとせむさのあまりに物語をぞはじめける。弟の別府のしむが申けるは。あらめでたや此君。先度はつくし九ケ國を給はらせ給ひ。上見ぬわしと御坐ありしが。剩此たひは多くのむくりをほろぼし給へは。日本國を他のさまたげなくたまはらせ給はん事のめでたさよ。人のくわほうをねがはゝ此君のやうにと申す。兄の別府か是をきゝ。されはこそとよ其事よ。君はさやうにとみ給はゝ。我等兄弟はもとのまゝにて朽はてなむ事こそ口惜けれ。いざ此君をこゝにて。我等か手にかけ申し。しうなくして御跡を知行せむと申す。おと〳〵が是をきゝ。あらもつたいなの御たくみや候。此きみの御恩を天山にかうふり。人と成し我等ぞかし。いにしへの御恩を忘申し。我等が手にかけ申ならは。天命いかでのがるべき。御恩安有へく候。別府此よし聞よりも扨は汝は君と一躰よな。つねに此事もれきこえなば。我一人がとがたるべし。余所に敵はなきぞとよ。わとのとあふてしなんとて。刀のつかに手をかけてとむてかゝらむとす。弟か是を見て。こはいかなる御事候ぞ。げにとさやうにおぼしめしたらば。たとひ手にかけころし申さずとも。いきながら此嶋に捨をき申てかへるならば。

所はわづかの小嶋にて。十日計も御命の何にながらへ給ふべき。兄の別府是を聞。おもしろくも申されたるもの哉。さらばさやうに仕らんとて。いたはしや君をば。げむかいが嶋にすてをき申。本の舟にあがり。味方の軍兵どもをちかつけて申けるは。いたはしや君は。むくりが大將りやうざうがはなつやを。御きせなかの引合に請とめさせ給ひ。うすでにて御座ありし間。さりとも〳〵とたのみをかけししるしもなく。つゐにむなしくならせ給ひて候。御しかいをもくかにあけ。御臺所の御目にかけたくは存候へとも。諸神をいはひ申たる御座舟にて有間。いたはしながら海底にしづめ申て候。扨あるべきにてあらされば。やあふねを出せと下知すれば。味方の軍兵共は。ひとへに夢の心ちして。我おとらじとをし出す。一艘二艘のふねならず。惣して舟數は八万艘。一度にほをひきかぢをとれば天地もひゝく計也。此聲共に大臣は。夢うちさまし給ひて。たれかあるとめさるれど。御返事申者もなし。こはいかにと思召。かつばとおきさせ給ひて。あたりを御覽有けれと人一人もなかりけり。めしたるふねを見給へは。ほをあげてこそをし出せ。さてはべつぶか。心がはりを仕るか。たとへは別府こそ。心がはりをするとも。なとや以下の軍兵等われをばつれてゆかぬそやゝあのふねこちへとの給へと。皆舟共の音たかく。聞つけ申者もなし。せめておもひの餘に。海上にとひたつて。いきをはかりにおよかせ給へどふねはうき木の物なれば。風に任せてはやかりけり。ちからをよはす大臣はうかりし嶋に又もどりそなた計を。見送りてあきれてたゝせ給ひけり。さうりそくりがいにしへ。海岸はたうに捨られしも。これに似たりと申せとも。せめてそれはふたりにて語なくさむかたもあり。所はわづかの小嶋にて。くさ木もさらになかりけり。さうてむひろう。遠して月の出へき山もなし。あしたの日は海よりいて。又夕日も海にいる。露の身は頼なや。夜更て聞もなみの音。岩間の宿をたのめてや。うちふすかたもぬれまさる。まれにも事とふ物とては。なみにながるゝ村かもめ。汀の千鳥なく時はなを又ともゝ戀しくて。いとゞ明行夜もなかく。暮行日かげもおそかりけり。露のいのちをくさの葉に。やとすへきやうなけれとも。なのりそつみていのちをつき。うき日數をそ送らるゝ。いたはしゝとも。中〳〵に申。計もなかりけり去間別府兄弟は。つくしのはかたへふねを寄。よろこびの歸朝と風聞す。豐後のこうに御座ある御臺所はめつらしきよく共をかまへさせ給ひ。御入おそしと待させ給ふ所に。別府兄弟打つれて先。御所様へ參る。御臺所は御覽じて。あれはいつもの御さきの。案内にこそ參りつらめと。人してきこしめすべき事をおそくおほしめされ。じしんみすまちかく御出あつて。めづらしの兄弟や。何とて君はおそく見えさせ給ふぞ。兄弟しばし御返事を申さす。かさねていかにとたづねさせ給へば。其時兄弟泪をながす躰をして。申さむとすれば泪おつる。申さずはしろしめさるまし。いたはしや君はむくりか大將りやうざうと申者と。をしならべくませ給ひ。二人ながら海底にしづませ給ひて其後。又も見えさせ給はねは。其おもひのみふかうしていくさにかちたるしるしも候はず。さりながら。御かたみの物をば給はつて候とて。御きせながと金の弓。御劍をそへて參らせ上るみだい此よし御覽じて是はふしぎの事ども哉。かたきとくませ給はむに。いつの隙に御かたみをとゝめて海に入給はむ。前後ふかくの事申物哉。あはれ此者兄弟を。とつておさへてがうもむし。めしとはばやとはおぼしめせ共。はかなき女姓

の御事なれは。心ひとつにくたしつゝ簾中ふかく入給ひ。かたみの物をめしあつめ。いたきつかせ給ひて。りうていこがれ給ひければ。御前中居の女房たち一度にわつとなきけれは。余所のたもとに。いたるまでしぼるはかりに哀なる 其後べつふ兄弟打つれて急都へのぼり。よろこびの歸朝と風聞す。天下のはむじやう世のきこえ何事か是にまさるへきと上下さゝめき給ひけり。しかりとは申せども大臣殿御歸朝なき間天下闇のごとし 御父の左大臣御母御臺所。老たけよはひかたふき。さかりの御子におくるゝ事はかれ木にえたのなき風情。つれなきいのちにかへばやと。なげき給へとかなはす 内よりの宣旨には。大臣が歸朝するならは日本國をとおもひつれども。うたれぬる上力なし。たれにけじやうをおこなふべき。別府兄弟にはつくしの國司をとらするそ。いそき罷下後家にみやづき。大臣かけうやうねむごろにとへとのせむじ也。別府承つて。あむにさおひのせむじかな。日本國をとのそみてこそきみをはふり捨申たれ。めづらしからぬつくしへとて。又こそ下けるとかや。去間別府みち〳〵あむじけるやうは。さもあれ吾君の御臺所は。天下一の美人にてましませば。風のたよりの玉章を參らせあげてみむずるに。請ひき給はゞしかるべし。もしそむき給ふ物ならば。ふしづけ申さばやとあむじすまし。玉章懇にこしらへこれは。都よりの御狀なりとてさゝけければ。きむしゆの女房達取つぎ參らせあげ。御臺所は都よりの御狀と聞食。中〳〵上がきをだにも御覽じあへず。いそぎひらいて見給へは。おもひの外に引かへて別府か方よりの玉章也 餘の事のかなしさに。ふたつみつに引さき。かしこにかはと捨させ給ひ。命あれはこそとの給ひて。御まぼりがたなをめしよせ自害をせむとし給へは めのとの女房

が參り。御まぼり刀をうばひとり申し。尤御道理にて御座さふらふ。三條みぶの御所よりも。必御むかひの參さふらふへし。命をまたふし給へととかくなだめ奉る。返事をせぬものならばふとく心なる別府にて。いかなる所存かたくむべきと。めのとの女房がそばよりも返事をする。三とせの後の新枕。われにかぎらぬ事なれば。すまふ草もとり〳〵引はやなひくならひなり。まみえむ事はやすけれとも。君のむこくへ打手におむきの時。うさの宮に參り。千部の經をかきよまむと大願をたて。七百余部は書よみぬ。今二百余部は書よまず。此宿願成就の後はともかくもとかきとめて是は。みだい所の御返事なりとてかへす。使はいそぎたちかへり。別府殿に見せ奉る。別府ひらいて見奉るに。あらめてたや。さてはなびかせ給ふべきや。此宿願成就の間は。いか程か有へきと。たゞ百年をくらす心ちして。明し暮して待ゐたり 其後御臺所かすの女房たちを。召あつめさせ給ひ。つれなき命のあれはこそ。かゝる事をも聞なれば。今もふちせにみをなげて跡かきくれたくおもへども。草のゆかりもしのふゆへ。そよく心もよしあしと。君かおもかげの夢うつゝに。たちそひ給ふ時はまた。しゝたる人とはみえたまはす。戀はいのりの物ときくあふまでいのちおしきなり。大臣殿此まゝ御歸朝なきならば。我もみをなけむなしくなるべし。さあらん時に御形見を山野のちりとなさむより。たつとき人にほうじ跡をもとはせ申さむと。御手なれのびは琴 わこむしやうひちりきさうしの數を。取あつめたつとき人にほうせらる。四十二疋の名馬ども。みな寺〳〵へひかれけり。三十二疋のたかいぬの。きづなをきつてぞはなされける。此程ありしたかぜうたちをもおもひ〳〵にちらされけり。十二てうの鷹共の。あしをゝといてぞはなされける。

十二てうの其中に。みどり丸と申て。大たかのありけるがきみのなこりを。おしみてやたちさる方もなかりけり（コトハ）みだい所は御覽してあれはきみのひさうのみとり丸なるが。つかれにのそみてあるやらむ。はをたれひれふしゐたるらめあれ〳〵女房たちゑじきをあたへてはなさせ給へと仰ければ。承るとは申させ給へども。いづれもみな女房たちの事なればゑかふやうをしらずして飯をまろめてそなふる。此鷹うれしげにて此飯をくはへ。雲ゐはるかにとびあかり。はねうちのへてとひけるが。三日三夜と申には。大臣殿の御座あるけむかいか嶋にとひつき。飯をは岩の上にをき。わかみもそはなる岩に羽をやすめてぞゐたりける。あらいたはしや大臣殿は。たゝうつせるかげのごとくにて。岩間の宿をたち出汀の方を見給へは。此程見なれぬたか一もと羽をやすめてぞゐたりける。大臣あやしく思しめし。心しづかに見給へば。むかし手なれしみどり丸也。餘の事のうれしさに。いそぎ立寄給ひてめつらしのみとりまるや大臣か此嶋にあるとはさて何としてしつて來りたるそ。けに鳥類はかならず五通あるとは是かとよ。扨もこれなる飯は。みだい所の御わさかや。此飯をたばむより。なとことつての文はなきそ。豐後にいまたましますか。都へかへりお上りか。ふちは瀨となるならひかやいかに〳〵ととひ給へは。心くるしきふせいにて涙。はかりそうかめける。大臣殿は御覽して。今これ程のみとなりて。此飯ふくしてあればとて。いく程命のなからへん。鳥類なれともあのたかの。見る所こそはつかしけれ。くはてもあらてとおほしめすか。さもあれみとり丸が。万里のなみを分こしたる。心さしのせつなきに。いで〳〵さらはぶくせむとて。御手をかけさせ給ひけれは。うれしけにて。此鷹か。はをたゝきつめを

かき。おひざのまはりに。ひれふして物いはぬ計のふぜいなり（言葉）大臣殿は御覽じて。あらたよりもなやみどり丸。木の葉だにもなき嶋なれば。おもひの色をも書やらず。いかゝはせむと仰ければ。此たかうれしげにて雲ゐはるかにとひあがる。大臣殿は御覽して。しばしもかくて候へかし。あら名殘おしのみどり丸や。はやかへるかと仰ければ（上クトキ）さはなくしてみとり丸いつくよりとりて來りけむ。ならのかしははふくみて。（フクミ）大臣殿に奉る。そぶかこゝくのたまづさを。（上）かりのつばさに言傳しも今こそおもひしられたれ。われもおもひはおとらじと。御ゆびをくひきり。木の葉に物をそあそばしたる。たむの落葉成ければ。只哥一首書付。をしたゝみまろめて。すゞ付にゆひ付て。はやかへれよと有しかは。うれしけにて此鷹か三日三夜と。申には豐後の御所に參りけり（言葉）まだ早朝の事なるにみたい所は。緣きやうだうして御座ありしが。みどり丸を御覽して。汝はこくうをかけるものなればいたらぬ所よもあらじ。ものいふものにてあるならば。大臣殿の御ゆくゑをなとかは申さてあるへきぞ。あら浦山しのみとり丸やと仰ければ。此鷹うれしげにて御前さして參り。すゞつけをふりあけゐなをりたり。御臺ふしぎにおぼしめし。くはしく見給へは。（上クトキ）いにしへの人のことつてに。一首の哥に。かくばかり。とふ鳥の。跡計をは。たのめきみ。うはの空なる風のたよりをと（ハ上フ）かやうによませ給ひつゝ。扨は此世に。大臣はいまたなからへ給ふそや。これこそ命あるしるしなれ。かみなき方にてあればこそ。このはに物をはあそばしたれ。硯と墨ふでなけばこそ。血（中）にて物をばあそあそはしたれ。いざや硯を參らせて。おぼしめされむことのはを。くはしくかゝせ申さんとて。むらさき硯油煙のすみ。かみ五かさねにふてまきそ

へ。御臺をはじめ奉り。其數〳〵の。女房たち。我おとらしと文をかく取あつめたるまき物にはよしなきわさとおほえたり（二段）すゞ付にねむごろにゆひ付。かまひて今度とくまいれみどりまるあら浦山しやと仰ければ。此鷹うれしけにて又。雲ゐはるかにとひあがり。はねうちのへてとひけるか。むらさき石のならひにて。しほ、のみちひにしたかひて時〳〵おもく なる程にひかれてしだいにさかりけり。今はとおもひてとびけるが。おほくの文と書ともに。露をふくみておもくなりたゝひきにひかれつゝ。其まゝうみにひたりてむなしくなるぞむざんなる 嶋にまします大臣殿。たかたにも今はかよはねは。何になぐさみ給ふへきそや。此鷹のまたもまいらぬはもしも別府かかたへもれきこえころされても有やらんと。時〳〵かよふいきだにもかぎりの色と見え給ふが。なをも命の捨がたくて。みるめあをのりとらんとて。岩間の宿をたち出汀のかたを見給へは。なみうちかくる岩間に鳥の羽すこし見ゆる。大臣あやしくおぼしめし。いそぎ引あげ見給へは 此程かよひし御たか也。餘の事のかなしさに。かしこにとうとまろひゐて。たかをひざにかきのせてあらむざうの有樣やと。くはしく躰を見給へはしつむもひとつ理なり。むらさき硯油煙の墨。其かすゝの文ともは。しほにみたれて見えわかねと。心しつかに見給へはとり〳〵にこそ見えにけれ。これや女姓のはかなきとは。かみ筆墨たにもあるならば。これ程多きいはほにて。いか程も物をばかくへきに。硯を付るは何事そや。扨も此鷹かきかいかうらい。けいたむ國へもゆかずして。今此嶋にゆられきて。ふたたひ物をおもはする。かなちす生をうくる物。こむばくふたつのたましゐあり。こむはめいとに。おもむけはくはうき世にあると。きく

われもいのちのつゝまりて。今をかぎりの事なれは。めいどのみちのしるへをして。つれてゆけやみとりまる。われをはたれにあつけて。扨何となれとおもふぞとて。此たかにいたきつきりうていこかれ給ひけり。かの大臣の。御なけききみに見せはやとそおもふ 是は大臣殿嶋にての御なげき。豐後のこうに御座あるみたい所の御なげきは。中〳〵申計もなし せめておもひの餘にや。うさの宮にまいり。七日籠り願書をかいてこめさせ給ふ。きみやうちやうらいそうびやうじむ。もしも大臣殿歸朝のゑみをふくませ給ひ。ふたたひ御目にかゝるならはうさのざうゑい申へし 玉の寶殿みかきたて金の戸びらをのべひらき るりのかうらむやりわたししやかうのぎぼうしみがきたて みぎりのいさごに金をませ かべには七寶ちりはめて。池には玉の。橋をかけ。ゐがきはくはうよう。らむけいし。くわいらうとはいてむ四つの樓門玉のまぐさを。みかくへしとうりやうのむねを。うきやかにしむてむひさしを。ひろ〳〵といかにもやうらく。むすびさけけまむのはたは雲をわけ四せむへいはく。しゝこまいぬ金をもつて。みがくへし。大塔としゆらうをいかにもたかく雲の上に。光をはなつて。つくるへし四季の祭禮。別臨時花のみゆきを。なすべき也九品の鳥井を。たかくたて極樂淨土を。まなふへし極樂外に。更になし諸神のしよけうを。淨土とすあゆみを神にはこへは神たうよりも。佛道にきする更便是なり其かいていのいむもん今もつきせす。あらたなり。ほうさい神にいたせはぼだひのたねをつゝむなり抑神と申はじむそくたるを。すかたとし。正直たるを。心とすちりの内にましはり我らにえむをむすへり本願かきり有ならば我をばもらし給ふなようやまつて申と書とめてくる〳〵とひむまいて。神前にとう

どをき七日七夜まどろまて。しじやう。神にそいのらるゝ誠に神のちかひにや。ゆきの浦のつり人。つりに沖へ出たるか南のかせにはなされて。北の沖へながれゆき大臣殿の御座あるげむかいが嶋にふきつくる。ふな人どもは嶋かげにあがり。しばらくいきをつぐ。かしこを見れはいきやうなるいき物ひとつねり出る。いとゞ物おそろしき折ふしに大臣殿を見つけ申。かたたこなたへにげさつて。おぢてさうなくちかづかず。大臣殿は御覽じて。あら口惜や。扨はなにかしがすがたは人間とは見えざりける事よ。何と成行事ともとて。御泪にむせはせ給へは。泪をなかす躰を見て。ちつと心かかふに成て。さもあれ汝はいかやうなるいき物そととへは。大臣うれしくおぼしめし。ありのまゝにかたらばやとおぼしめすが。もしも別府方の者にてもありもやせむとおぼしめし。偽かうそ仰ける。これはひとゝせ百合草若大臣殿。むこくへ討手におむきの時。ふなぶにとられまいらせむかひたりし者なりしが。ふしぎにふねにのりおくれ。大臣殿御歸朝の後ははや三年になるとおほえて候。然へくはお情に。われを日本の地へ着てたへと仰ければ。ふな人共か是を聞。あらふひむのしだいやな。くじする身には。なにはにつけ物うき事のおほひそや。人の上ともおもはねは。たすけてさらはもとらふすが風の心をしらぬなり。われ人の果報目出度は順風ねがひにいたすべし。ありともうむがつきはてなは。なをしもとをくはなたるべし。唯果報をねかへ。大臣げにもとおぼしめし。うしほをむすびてうづとめされ。日本の方をふしおかみ。あらうらめしや何とて日本の佛神は。我をは捨はて給ふらん。觀音經のめいもむに。入於大海。けしこくふうすい。ごせむほうへうだらせつ。たとい。せむほうへうたらせつらせつの國におもむく

と。われ一人が。きれんによつて。本地のきしへ。着てたべと。祈念申させ給へば。誠に佛神も不便におぼしめさるゝか。八大龍神こと〳〵く。おもてをならべ座せられたり。舟のへさきには。不動明王の。がうまのりけむを。ひつさけてこむがうけむどのさつくのなは。あくまをよせしとしゆごせらるゝ。かむまむふたつの御まなじり。ともにはがうふくぞうじやうでむ。いしやなでむ。大光天。とらせつ天。風天水天火天どう。雨風なみをしつめむため。上かい下界の龍神。しやしむのどくを留て。夜日三日と申には。つくしのはかたにふきつくる。ありがたしとも中〳〵に申計はなかりけり。船人共か申けるはこれまでとゞけたるちうに。われにしばらくみやづかひ。恩を送れとそ申ける。大臣けにもと思召ならはぬわざをし給ひて恩をぞ送らせ給ふ。國内つうげの事なれば別府のしむかつたえ聞。ゆきの浦のつり人か。けうがる物をひろひきてやしなひをくと傳えきく。いそぎつれて參れと御使立。其比なびかぬ木草もなし。やかてくしてそ參りける。自身たち出つく〳〵見て。あらけうかるいき者かな。鬼かと見れは鬼にてもなし。人かと見れは人にてもなし。たゝかきとやらんはこれかとよ。われにしばらくあづけよ。都へぐして上り。物わらひの種となさむとてをしとゞめ。門脇のおきなにあつけやがてふちをぞくはへける。かの門脇の翁と申は。年比大臣殿にめしつかへし者なれども。いたはしや大臣殿には。御かほにも御足手にもさなから苔のむし給ひ。御せいもちいさく御色もくろく有しにかはる御すがたを。いかでか見しり申べき。されとも情のふかきふうふにて。あらむざうとやせおとろへたるがきやとて。かさねてふちをぞくはへける。ある夜のねさめにおうちがうばにかたりけるは。扨も先祖のきみゆりわ

か大臣殿。む國へ討手に御むきあつて。其まゝ御歸朝なき間。其おもひのみふかふしてそゝろに年もよるぞと
よ。扨もみだい所は。こうのちやうやにましますよな。うば此よしを聞よりも。さればこそとよ其事よ 上クトキ 別
府殿のみだいに心をかけさせ給ひ。御玉章の有しかともさらになびかせ給ねは。 コトハ 無念至極に思召。此二三
日先程に。まむなうが池にいきながらふしづけ申けるときく 下クトキ 是に付てもうき命。つれなく久にながらへ。
かゝる事をもきくやとて。せきあへすこそなきにけれ 言葉 大臣殿は物こしにて聞召 上クトキ あら何ともなの事ともや。
今まで命おしかりつるも君にやあふとおもふゆへ。今は命もおしからす。明なはいそき尋行 上フシ まむなうが池
にみをなけて。二世のちきりを。なさはやとおもひ入てそおはしける。 コトハ 其後おうぢが聲として。今より後は
いま〳〵しうなゝいそとこそ申けれ。うば此よしを聞よりも。哀けに世の中に。心づよきは男子也 上クトキ おうぢ
がやうなるつれなしこそ。しうのわかれもかなしまね。 下 われら日比の御情。只今のやうにおもはれて。いかに
いふとも なかふそとて又 マヽ さめ〳〵と。なきぬたり コトハ おうぢ此よし聞よりも。あらやさしのうばごせやさ程
君を大事におもひ申さば物語してきかすへし。かまへて口はしきくなおそろしや。かのべつぶ殿のうしろみの
中太は。おきなかおいにて有間。みだい所のふし付られさせ給はむ事を。おうちかねて承り。是をはさていか
ゞせむとおもひ。我等かあひしのひとり姫。みだい所と御同年にまかりなるを。君の御命にかはるべきかと尋
てあれば。姫はなのめによろこふで。男子女子にはかぎりさふらふまし。御しうの命にかはらんこそさいはい
にてさふらへ。しのひやかにと申程に。おうぢ餘のうれしさに。姫をばみだい所とかうしまむなうが池にしつ

め。ひめがゐたりしちやうだいに。きみをばかくし申たれ。かたみはこれにあるぞとて。かずの形見をとり出
し。うばが手へこそわたしけれ 上クトキ うばはかたみをとりもちてこれは夢かやうつかや。さりなから君をたすけ
申こそなけきの中のよろこひなれ。しかりとは申せとも。人間にかきらす。生をうけぬるたくひの子をおも
はぬはなかりけり。三界一のどくそむしやかむに如來たにも。御子の羅ごら尊者をば又 バ みつけうとゝき給ふ。
こむじつ鳥は子をかなしみ。しゆらのなづきにはしをたつる。よるの鶴は子をかなしみれんりの枝にやどらず。
やぎうこうじをねむり野外の床にふすときく。いきとしいき生をうけぬるたぐひの 子 フシ をおもはぬは。なき
物を。わがみをわけしひとり姫。 上 しうのいのちにかへし事。うらみとはさらにおもはねど。あらおしの姫やと
て。りうていこかれなきけれは。おうちもともになく時そ。大臣殿はきこしめし。 上 ともにつれてしのひねの
せきとめかたき御なみだやるかたなふぞ聞えける 言葉 大臣殿は唯今も立出。これこそいにしへのゆりわか大臣と
なのつてきかせ。よろこばせはやとおほしめしけれども。しばしとおもふ所存にて時節をまたせ給ふ。かくて
其年も打暮。あら玉月になりければ。九國のさいちやう弓のとうをはじめ。別府殿をいはふ。いたはしや大
臣殿には。御かほにも御足手にも。さなから苔のむし給へは。苔丸と名付申やとりの役をぞさしにける。大臣
弓場に出させ給ひ。爰にて軍 ヲヽ をためさばやとおぼしめし。あそこなる殿の弓立のわるさよ。爰なる殿のをして
のふるふと。さむ〳〵に悪口し給ふ。別府此よし聞よりも。いつ汝か弓をいならふてさかしらを仕るぞ。もど
かしくはひとや射よ。大臣殿はきこしめし。射たる事は候はねとも餘に人々の射させ給へる御すかたのみにく

き程に申て候。別府聞て。さ程汝か射ぬ弓をさかしらを仕るぞ。只今射じと申さば。うさ八幡もしろしめせ人手にはかくまし。じきに切て捨へしとつて射よとせめかくる。大臣殿はきこしめし仰にて候程に一矢射たくは候へども引べき弓が候はず。別府聞て。やさしく申もの哉。つよき弓の所望か又よはき弓の所望か。同はつよき弓の所望にて候。やすき間の事とて。つくしにきこゆるつよ弓を十ちやうそろへて參らせあぐる。二三ちやうをしかさね。はら〳〵と引おつて。何も弓よはくして事をかいたと仰ければ。別府是をみてきやつはくせもの哉。所詮大臣殿のあそばしたる。かねのゆみやを射させて見よ。尤然べしとて。宇佐八幡の寶殿にあがめをく。かねのゆみやを申おろし大臣殿に奉る。いつしか本より御だらし。かゝりの松にをし當。ゆらりとはつてすびきし。かねの御でうすをつがはせ給ひ。的には御目をかけられず。くわんらくしてゐたりし別府の大夫に御目をかけ。大音あけて仰けるは いかにや九國のざいちやうら。我をば誰とかおもふらん。いにしへ嶋に捨られし。ゆりわか大臣が。今春草ともえ出る たうりに任せてわれやみむ 非道に任せて別府やみむ いかに〳〵と有しかは。大どもしよきやう松浦たう。一度にはらりとかしこまり。君にしたがひ奉る。別府もはしり折。かうさむなりとて手を合る。いかてかゆるし給ふへき。まつらたうに仰付。たかてこてにいましめ。汝がしたのさえつりにて。われに物をおもはせつる。ゐんぐわの程を見せむとて。口の内へ御手をいれ。したをつかむて引ぬいてかしこへかはとなけすて。くびをば七日七夜に。引くびにし給へり。上下万民をしなへてにくまぬ者はなかりけり 弟の別府の臣をも同しごとくにさいくわ有へきを。嶋にて申情のことばを。有の

まゝに申ければ。さらばなむぢをばたすけよとて。ゆきの浦へぞながされける 其後大臣殿こうの長屋にうつらせ給ふ。みたいこのよし聞召ひとへに夢のこゝちして。たもとをかほにをしあて。泪とともに出給ふ。あはぬがさきのなみたは。理なれば道理なり。あふての今の。うれしさに言のはもたえてなかりけり。何のつらさに。わかなみたおそふる袖にあまるらん。 言葉 みだい所はうさの宮の御宿願のよし御物語ありければ。大臣なのめにおほしめしたてさせ給ふ御願は。事のかずにてかずならず。金銀しゆぎよくをことゝく。ちりばめ給ひける間。ありがたしとも中〳〵に申計はなかりけり。其後ゆきの浦のつり人にちつとたつぬへき子細あり。いそぎめせとて御使たつ。浦人承りいかなるうき目にかあふへきとたゝ鬼にかみとるふぜいにて。こうのちやうやにまいり庭上にかしこまる。さはなくして大臣殿。自身立出給ひ。命のしうにて有ものが。何とておそれをばなすぞ。それへ〳〵と仰あつて廣縁までめされ うれしきをもつらきをも。なとかはかんぜざるべきと。御盃にさしそへて いきとつしま。兩國を浦人に下したひにけり。 門わきの翁を。めし出させ給ひて。つくし九ケ國の惣政所たびたまふ。翁か姫のために。まむなうが池のあたりに。御寺をたて給ひて。一万町の寺領を。よせさせ給ひけるとかや。 色 みとり丸かけうやうに。都のいぬいに。じむごしと申。御寺をたて給ひけり。鷹のためにたてたれはさてこそ今の世までも。たかお山とは申也。 大臣殿の御諚には。つくしに住居を。するならはものうき事もありなむと。御臺所を。引くして都へ上り給ひけりあじろのこしは拾二ちやう。はりごしは百余ちやう大どもしよきやう松浦たう。御供を申さるゝ。昨日まではいやしくも。苦丸とよばれ給ひしが

けふは(上)いつしか引かへて。七千余騎を。引(二下)ぐして都へのぼり。父母にたいめむあつて後やかて參内申さるゝ。御門ゑいらむまし〳〵て。いかにめづらし。先度別府が上り。うたれぬるよし申せしを。まことぞとおもひて。勅使を下す事もなしふしぎの命ながらへ。二(下)度參内する事。一かむのかめのたまさかにふほくにあふがごとしとて。日の本の將軍になさせ給ふぞありがたき。扨こそ天下太平。國土安全。壽(ノル)命長遠なりなり(マヽ)とかや

信太

（毛利家本）

既に承平は七年にて開元す。天慶九年に代る。天曆十年丙辰。彌生央の比。相馬殿の姫君を小山の太郎にとらせらるゝ。小山の太郎行重は。のそむ所の叶うへ。よろこひこれにしかしとてむかへもてなしてかしつき申す。ひとつには仁儀の法といひ。草の陰なる相馬殿の。おほしめされんする所もあり。孝養ふかく申さんと。山河の殺生をきんたんし思ひいりてそ吊ひける。信田にましますの御臺所。傳へ聞し召れて。小山の太郎行重をは。あらおとこかと思ひてあれは情のみあるものなり。親の事をおもふものたにも。よにはまれなる事そかし。まして見もせぬしうとを。かやうにふかく吊ふはよくたのもしき心かな。時々こなたへ來れかし。相馬殿の形見とも見はやとこそ仰けれ。有時御臺所。浮嶋太夫をめして仰けるは。相馬殿の末後の時。おほしめしやわすれけん。是ほとおほき所領を姫に一所も御讓なし。いつくにてもすこしはからひ侍へ。うきしま承り。謹而申けるは。相馬殿もあしき事をは爭か思しめしをかるへき。弓取のきむたちに。姫こはつゐに他人となる。聟はいつしやうちかゝらす。移れは代る世のならひ。わりなくおほしめされ候はゝ。折々のひきてものに。たからはつくさせ給ふとも。所領にをひては一所をも讓せ玉ふへからす。人には貪欲こまうとて。欲心うちにふくめ

は。したしき中もうとうなり候。よ所〳〵なからの御對面こそ。中〳〵末の世までも。目出度渡らせ給ふへけれ。小山殿に。御對面も　無益の御事。たるへしともつての外に。申けり　御臺きこしめし御返事なふてたゝせ玉ひ。いつしか相馬に過をくれ一周忌たにもすきさるに。うちの者さへかろしめてをかしきものとおもはるゝ。果報のほとのつたなさよ。中々うき世にありかほに。家をもちても何かせん。信田殿にいとまをこひ（たし）たつとき。山のかくれかにも。ひきこもらはや。なんとゝふかくそ。恨み玉ひける（詞）信田殿きこしめされて。母この御うらみは御道理。御意にもれてはせんなしとて。信田の庄を半分わけ。母上に奉る。母うへなゝめならすに思召。小山か館へをくらせ玉ふ。小山なゝめによろこふて。ひとつは聟入又ひとつは（つゝ）祝の所地入也けれは。あしろの輿は八ちやう。はりこしは十二ちやう。惣して騎馬は三百騎。上下はなめきゆゝしくして。信田の館へそ移られける。新殿をつくらせ。角て爰にすみ玉ひ今みたちとのとはゆり（ゆゝ）。信田の先祖の郎等共。日々に出仕隊もなし。されとも浮嶋父子六人はをり〳〵はかりの出仕にて。さなから御前につめされは。御臺の御意もうすくなるあふなにはにつけて昔よりも物うき事共おほくして。心のとまる事もなし。世のありさまを見るにつけ。のちの世あやうかりけれは存へさらぬ物ゆへ。しやいつまてとおもひきり信田の河内へひきこもり隱居してこそねたりけれ（詞）御臺此よし御らむして。あらをかしの浮嶋か振舞や侍ふ。小山殿一人たにも有ならは。なんのしさひの有へきと。喜をなしてさかへ玉ふ。さりなから浮嶋太夫は隱居しぬ。信田はいまた幼稚なり。大夏のちけんまき物。家につたはる重寶を。内にをきてはせんなしとて。一ものこさすおしまくつて小山の太

郎にあつけらるゝ。有時小山。人なき所に引籠て委く見るに。正門代々よりも持傳へたる證文共か一ものこらす爰にあり。なに〳〵信田玉造り。とうてうは八万町の處。あゝらをひたゝしや。此内纔一万町。某知行するさへ不足なきに。ましてやのこる七万町。常陸下總兩國の。おほひすけとなるならは。我にましたる弓取の。國にふたりとも有へきかとやかて大欲心そ出來る。かゝる目出度重寶を。さうなくあつかる事は。天のあたへと存れは。安堵を申さんする其爲に。熊野まふてにことよせて（つゝ）急國を打立て。都へそのほりける。關白殿下に着申し。安堵の旨を奏聞申す。裡よりのせんしには。相馬か跡を申は。何者そとのせんし也。相馬か爲にはいつして候讓のてつき證文共。代々のくしよともを。しせうたゝしくまいらせあけ。理非をすまひて奏聞す。其上國はうとくなり。ようにもしよしにも別當にも。寶をあかせていさませたり。君にも金。れうの馬綾羅金銀の類を。數を盡してまいらせあくる。左右の大臣。后の宮女房達。其外の人々にも。寶をあかせていさませたりけりたとへは敵方さゝふるとも。なとかはかなはて有へき。ましてあらそふ者はなしむくうしさいに申なし安堵玉はりくたりけり（詞）角て小山。道々あんしけるやうは。御臺所と信田殿に。少分成共まいらせ。ふちせはやとおもふか。いや〳〵かゝるむつかしき者をたすけをき。末の世の煩となる事もあり。忽うしなははやとおもふか。それもあまり情なし。所詮兩國にをかぬまてとおもひ。國本につきしかは。さきへ人をたて。御臺處と信田殿。いたはしくは存れとも。常陸下總兩國に安堵は叶へからす。遠き國の知ぬ里へ。とく落行玉へ。片時も國にまし〳〵て。我はしうらみ給ふなとをつたての使をたつる（クトキ）御臺此由を聞しめされ。偏に夢の心地し

てうつゝとさらに弁へ玉はす。小山殿か所存には天魔波旬かいりかはりたるか。いかなる事にて角云そと。くとき歎き給へ共。あらけなき使にて。哀をすてゝふるまへは浮嶋太夫か言のすゑいまさら思ひいたさるゝ。さて有へきにてあらされは。信田殿はかり御供にて。泪とともにいて給ふ。けふ出て又歸るへき道たにも。別といへは物うきに。今日出ての其後に。かへらん事もかたかるへし。ゆくもとまるも。をしなへてもろきはいまの泪哉。甲斐の國に聞へたるいたかきの。里といふ處に。たつぬへき人有て。彼里までは。落行玉へと尋る人もあとなくなる。なにはにつけてたよりなし。いまはいつくへゆくへきそ。名わいたかきと聞けれと。風もたまらぬ。あはらやに宿かりてこそ。おはしけれ めつらしからぬ申叉なれ共。たのもしきは弓取の郎等なり。信田の先祖の郎等に。さつしま兵衛豐田の太郎。此人々を先として。以上十一人か跡をしたひ申し。いたかきの里にまいり。君をみつけ奉り。嬉しといふも中々に申すにをよはさりけり。扨々いかゝ有へきと。内儀評定とり〳〵なり。其中にとつても。さつしま兵衛申けるは。我等か先祖のさつしま太夫。郎等主君のけいやくを申し。君も我等も三代なり。承平の合戰はしまつて。數度のたゝかいありしかとも。つねにふかくをかゝさりしに。君も若に御座有る。我等も若者なれは。小山殿にいやしまれ。むにの本領わうりやうして をひいたし申す無念さよ。いつまて角てこらふへき。仇は大勢なれ共ふせいてうかかふはかりこと。夜討にしくはよもあらし。もとより我等案内者。ひまをうかゝひしのひいり。三方よりも火をかけ。一方よりも切ていり。千騎万騎か中なりとも。おもふ仇は唯一人。小山とくまむす事共は。なんの子細の有へきとはや手にとるやうに

そたくみける。其中にとつても。豐田の太郎か是をきゝ。これこそよからぬせむきなれ。理を持なからのあらせむきは思もよらぬ事にて候さいさんつかふた沙汰にてなし。一問答二問答。三問三答つかひ。まけをはつたる沙汰をたにもをつそふかんと名付て。又とりたつるは沙汰の法。ましてや一度もせさらぬ沙汰を敵方さゝへぬそのさきに。むくうに申しなをして。給る所の安堵なり。あれはまさしきたしやう。是は相馬の御叉は。世にはかくれもましまさす。たとへは證文あなたにありと盜みとられしよけんをたて。なとかはとつてかへさゝらむと理非をすまひて云けれは。尤此義に同するとて御臺處と信田殿をあふくして都へのぼりけり つゝむとすれと此事を。小山の太郎傳へきゝ。恩をしらぬ者は唯木石のことし。憐みをなして助け置たれは。仇と成こそやすからね。のほせたてゝは叶ふましそ。道にてをつゝめうてやとて。究竟の兵を七十余人さしつかはす。かゝりける處に。小嶋の五郎進み出て申けるは。是はよからぬ御諚かな。討ては國にかくれ有まし。理かなけれはこそうつたれとて。本領をはめさるへし。所詮昔かいまに至まて。神佛に申事の。忽叶ふ習の候へは。鹿嶋へ使者をたて。神主をめしよせ。てうふくの法ををこなはせて御覽せよと申す。小山けにもとおもひ。急き鹿嶋へ使者をたて。神主をめしよせ。いつよりもきらめいてちうをつくしてもてなしけり。酒も三献と見えし時。沙金百兩。能馬に鞍をひてひつたてたり。神主悦きの色見えてそゝろきいさむ風情あり。いまと心やすくして。あたりの人をとを〳〵のけ。信田を。てうふくすへきよしを一圓に賴む。神主氣色かはつて。あらおもひよらさる御諚哉。我等は鹿嶋の社人とし。天長地久。御願圓滿。息災延命と祈るより外別に祕術わ候はす。こ

とさら人を調伏すへき支わ。中〳〵。みやうのちけんもをそろしう候。さんへきほとの高僧へ。仰付られ候へとてたつてにけんとする。小山此由見るよりも。扨はこへんは。敵方と一所の人や。一期ふちむの身の大事を。ありのまゝにかたらせて。たのまるましきとは何事そ。ちからをよはす汝をは。ゑこそはかへすましけれと。既に。うたんとしりけれは　せんはうつきてかんぬしもあうはやことうけをそしたりける。俄の。事にて有間吉日撰むまてもなし。いつしよをきよめたんをたてゝ本尊をあんちしたりけりてうふくのたむの次第は。をそろしくそ見えたりける。しめむのたんをかさつて。ほうひやうにほけの花。にうもくに山うつき。しやすいの水にゐもりのち。くゝにはひつちの飯をもつてせうかうつかう牛の骨。けまんにあせほの花をもり。あかにはくしやの水をたれ。既に燈明にはほそきの油をたてにけり。おんしき日々にかはつた。初一日の本尊。地藏薩埵南むき。二日は觀音西むき。三日は勢至東むき。四日は阿彌陀北むき。五日はくたりかうさんせ。六日は既に金剛夜叉。第七日に當る日は。中尊不動明王をせめにせめてそいのりける。されとも道理なきにより。そのしるし見えされは。行者面目うしなひて。二七日そかちしけるに。夫にも驗し見えされはいやおんころ〳〵せんたるしやな。まかるしやなとそ責にける。殊數の緒つかれきれけれは。こゝを以てひさをたゝきさんこをもつて。胸をたゝきとつこを以てかうへをうち。いたゝきをうちやふり。頂上より。あへける血をは不動のりけんにをしぬつて。是は調伏人の。身の血也と觀念して。天地をうこかしせめけれは。あまりにつよくせめられて。こたいそんは震動し。かうさむせは。とつこをふる。こむかうやしやはほこをつかうたいゝとくののりうしか。

角をふつてほへたりけり。中尊不動のけんのさきに。生血かつゐて見えしか。一法は成就したりとてたむをやふつて出たりけり（詞）あら痛はしや信田殿。是をは夢にもしろしめされす。母みたひの御供をめされ。明ぬ暮ぬとのほらせ玉ふ。日數漸々かさなり。尾張の國に聞へたる。黒田の宿につかせ玉ふ。調伏かきり有により。信田殿にはをはすして　母御臺にをひ玉ふ事の痛はしさよ。されとものほらて叶はぬ道なやみなからものほらせ玉ふ。日かすやう〳〵かさなり。近江の國に聞へたるはむはの宿につかせ玉ふ。したい日々にをとろへ。今は行歩も叶はねは四五日逗留し玉へり。信田殿を始申し。十一人の人々も。跡や枕に立寄て。いかゝはせんとなけゝとも。つゐには叶はぬ生死の道（詞）朝の露と。消玉ふあはれといふもあまりあり。信田殿の御歎き。たとへをとるにためしなし。誰とても無常はのかれかたけれと。かゝるあはれは稀なるへし。扨有へきにてあらされは。無縁の人を。かたらひて。煙となすそあはれなる。十一人の人々は。ひとつ心に申すやう。信田殿の御果報は。爰迄なりと覺たり。いつまてつきそひ奉り。京よ田舍と辛苦せん。又よの人をたのまはこそ弓箭のきすとも成へけれ。是を菩提の。ちしきとし世をのかれんとおもふとて。しのひしのひにもといきり。まとろみ玉へる信田殿の。まくらかみにとりをひて。いとまこひをも申たけれともさこそはしたはせ玉ふへき。しのひねなひていてゝゆく。さすかたねんの御なしみ。たのみし君にてましましせは。名殘のおしさは限りなし。されともおもひ。きりつゝ別〳〵に成にけり（詞）天明けれは信田殿。御目をさまさせ玉ひ。誰か有とめさるれと御返事申すものもなし。こはいかにと思しめし。かつはとをきさせ玉ひて。あたりを御覽有けれは。あら何共なや。十一

人の人々のたふさ計そのこりける。信田殿御覽して情なの者共や。とても浮世をいとはゝなともろともにつれゆかて。年にもたらぬ我一人を。すてゝはいつくへゆきけるそと。くとき歎き給へ共そのしるしもましまさす。腹をきらんとし玉ふ所へ。宿の亭主參り。ことのしさひをうかゝひ申すに。始め終りの夏共を委く語り玉ふ。亭主承り。やあかほとの道理をもちなから。なとや都へおのほり有て　御沙汰はなきそと申せとも。供人獨りもあらはこそ。うき世にありてせんもなし。不思儀に尋る者あらは。かくなりつるとかたれとて　念佛申。刀をぬきすてにしかひと見え玉ふ。亭主あまりの痛はしさに。御刀にすかりつき。都までの御伴をは。此男かに申すへし。自害をとゝめ玉へとよ。命をまたふもつ繩は蓬萊に。あふと傳へたり。つらき人のはてをも。いきてそ見はて玉ふへき。しゝてはなにのきよく有へきと。留め申したりけれは。御自害はとまりけり。あくれは亭主。御供して都へとてそのほりける。五條にやとをとりてをき。沙汰の法をは申をしへて。亭主はいとま。玉はりて馬場の宿に下りけり。信田殿唯一人。都にとゝまり玉へとも。はぬけのかもの水波に。うかれてたゝぬ風情し。片輪車の。中〳〵にやるかたもなき如くにて。都に日をはをくれとも。沙汰するむねもましまさす。田舍の緣をつたへねはなか在京も。叶はすしたよりもなふて。おはします。信田殿心におほしめす。叶はぬ事をあむするは。却而愚癡のいたりなり。我常陸の國に下り。姉こを賴みゐるならは。成人のゝち。小山を一刀うらみむ事。なんの子細の有へきと。おほしめされける間。めつらしからぬ信田へは又こそ下り玉ひけれ。時世にしたかふならひとて。姉聟殿をたのませ玉ひ。門のほとりにたゝすんて。もの申さんとありしかは。人

をいたしてたそととふ。くるしうもさふらはす信田にて候。萬事は賴み奉る。かうさんせんとありしかは。小山此由きくよりも。あふ尤かうこそ有へけれ。内へと申たけれとも。所存のうちを察し申たり。ひんひまをうかゝひ。一刀うらみんため。來り給へる心のうちをはかゝみにかけて覺へたり。をさへてうちたけれとも。かうにんのはうなれはたすけ申す。遠き國の知ぬさとへ。とく落行玉へ。片時も國にまし〳〵て。我はしうらみ玉ふなと　はる〳〵下る驗もなく。門より内へいれさるは。いとゝ無念そまさりける。あら痛はしや信田殿。たま〳〵ちかくめくりきて。父の御墓をいまならては。いつの世にかはおかむへきと。御墓にまいり玉ひ草木の花をつみたむけ。かほとに果報つたなき身を。ひとつはちすのうてなにむかへとらせ玉はて。浮世に殘し玉ふ事よと。くときなけきたまへとも。亡靈なれは土屈より御聲いつる事もなし。さく〳〵としたる風のをと。松に吟するはかりなり。茫々としたる草の露にすそも袂も。うちしほれつきせぬ。ものは涙なり。角て信田殿。御墓を下向有ける處に。あみかさふか〳〵とひつこふたる男の。あやしきさまにまいりあふ。誰成らんと御覽すれは。是は別て年久しき。浮嶋太夫なりけり。兼てはしらさるすみよしの。まつとしなれは悅を。ひきあはせぬる幸とて。くして河内へかへり。五人の子共をちかつけ。是〳〵拜み申せ。此程汝等かこひたてまつりしに。諸天のめくみの有により。不慮にまいりあふ叉は。いちかんの龜のたまさかに浮木にあへることし。定而十日はかりには包ともひろう有へし。此山里と申すは。昔よりのよき城塁なり。いかに仇か責るとも。輙く落へしと覺へす。汝等に軍をさせ。時々見てめさまひて。としををくりゐんするほとに。都へ此事もれ聞へ。國

のみたれは何事そと。うへの使たつならは。とりつつきをつそをたて。悦の沙汰をきはむへし。今こそいしのせいなりとも。終には國を納むへし。やあ俄にあはてゝ何かせん。谷々峯〳〵尾つゝきともを。人夫を揃てほりきらせよ。はしりとうつきいしゆみ。こゝかしこのつまり〳〵にはりかけさせよ。かゝりをたかせよかいたてをかき。うちとけゐるなと下知すれは　子共もなゝめに悦ふて。とても消へき露のみを君故しなんうれしやと悦ひいさむそたのもしき詞つゝむとすれと此亘を。小山の太郎つたへきゝ。扨は先祖の郎等に。浮嶋かたのまれけるか。はう〳〵ひきあひつのりては。ことの大事たるへし。いまたちからのなきさきにはやよせよと申す。承ると申て。小山かしつし。よこすか大將にて。爰をせんとゝたゝかひけれとも。大勢うたせてひつかへす。扨はしゝんむかはては叶ふへからすと。小山殿のむかはれける間。常陸下總兩國に。殘る兵は一人もなし。城にも爰をせんとゝたゝかひけれとも。けにはよせては國かひとつになつて。谷をも嶺をも。平路に道をつくらせ　あらてをいれかへ責けれは。さのみはいかて。こらうへきそや二三の城戸をも打破られ。つめの城にそ籠りける詞浮嶋太夫申けるは。夫人の命をたはう合戰はことによるそ。子共はなきか討死をせよ。心やすく太夫も。腹きらんと云儘に。れいの大弓取出し。大手の櫓にあかり。いかにや女房こなたへきて。さまひいてたへ。軍して見せんと有し時。女房生年五十六。うすきぬかつき櫓にあかり。何とて子共か軍は。こたれて今までをそひそと。頻りに力をつけられて　はや浮嶋太郎かけいつる。其日を最後と思へは。れうをぬうたる直垂に。おにかたすつたるさうのこて。ひやくたんみかきのすねあて。いとひをとしの鎧の。巳の時と輝を。くさすりな

かにさつくとき。ゆつて上帶ちやうとしめ。九寸五分の。鎧とをしをめてのわきにさひたりけり。一尺八寸のうち刀を。十文字にさすまゝに。三尺八寸さふらひし。しやくとうつくりの太刀はひて。おなしけのこまひ甲にしゝかたうつてゐくひにき。白綾の母衣をさつとかけぬりこめの弓の四人はり。さんのへたちのしらあしけ。きんふくりんの鞍をかせゆむつえにすかりゆらりとのり。堀のはゝたに駒をすゆる兄弟五人の者共。おもひ〳〵の具足をき。心々の馬にのり。五に手綱をとりちかへやあ　かけうかけしとしたりしを。仇味方か是をみてあつはれ武者のいきほひかなとほめぬ人こそなかりけれ詞浮嶋夫婦櫓の上にてつく〳〵見て。いつれもきりやうはをとらぬよなふ　あつたら子共を世にあらせて。所領の主ともなさすして。唯今ころさんおしさよな詞はやしね子共　さはいひなから今を限りの亘なれは。ま一度こなたへ顔みせよ。誰も名殘はおしひそと。さしもにかうなる。太夫殿はら〳〵とそ。なきにける　女房か是をきゝ。から〳〵とうちはらひ。わかれた今のなき事かなひても叶ふへき道かや。いかにや子共。軍はさすかに大事のもの。心のかうなるはかりにて。へいはうしらてかなはす。味方無勢に有なから。仇の陳へかゝるには。すきのさき。とかりやかた魚鱗鶴翼兩陳なり。魚鱗といへるかけあしは。魚のいろこをまなへり。鶴翼といへるは。鶴のはかひをへうしたり。駒の手綱をしらひては。仇かむくうにきられぬそ。向ふ仇切時は。けあけの鞭をちやうとうつておもてかへしの手綱をすくひ拜みきりにきりすてよ。弓手へまはる仇をは。すみの手綱きつとひきさうかうの鞭をうつてきれ。妻手へまはる仇をは。太刀のつかをかへして。さわらの鞭をうつてきれ。夫婦の者も是にて見るそさしきの前のはれ軍

そ。ふかくをかくなや子共とて。をかしき事はなけれとも。子共にちからをつけんかため。さまのいたをうちたゝきから〳〵とわらひけり。いとゝはやりたこともか父にも母にもいさめられ。おこゑをたいてかけいつる。前のかはらはあしひき。習ひ傳へし手綱のひし。教へをかれし鞭の曲。むくうに馬をのりつれて。かけてはさつとひいてみれはまへの河原の石よりも。おほきは死人なりけり。とつてかへしさつとはかけ。五六度まてたゝかうたり。女房御らんして。子共か軍の面白きに。後詰してとらせんとて。かつきたきぬをさつとおろせはしたは武者にてたつたり。紅の袴の下に。ひさよろひにすねあてし。もえきにほひの鎧き。たけなる髪をからはにあけ。太夫かこのみしつけのはうをしはしかせとてうちかたけ。大手の城戸をひらかせ。堀のはゝたに駒をすゑ。大音上てなのるやう。如何や小山の人々我をはたれとおもふそ。陽成院より三代津のらいくわうに五代なり。渡ｐ黨に大將軍。みたの源氏か娘に。彌陀夜叉女とは自なり。年は生年五十六。二つとなき命をは。信田の御料に奉るそ。我とおもはん人々。かけよてなみを見せんと甲をとつてうちきつゝ既にかけむとしたりけり

詞 浮嶋太夫櫓の上にてつく〳〵と見て。子共かこゝろのかうなるも道理。母か心か强なれは。かほとなるものともか。親子兄弟夫婦となつて。よりあひけるこそ不思儀なれ。如何や御料御出有て。女軍を御覽せよ。ためしまれなる事なりとて。信田殿を矢藏へしやうし申。委く見たてまつり（さしくとも）正門の御眼に。ひとみかふたつまし〳〵て。坂東八ケ國の王とならせ玉ひしか。君にも弓手の御眼に。ひとみかふたつましませは。王位まてこそをはせすとも。必坂東八ケ國の主とはならせ玉ふへし。たとひ我等討死仕るとも。君は命をまたふして。廿

五まてはおまち候へ。かならす廿五にて。御代にたゝせ玉ふへし（ぞし）我等も。それかおもはれて。子共か命もおしけれと。たうさのはちを。かゝしため皆討死をつかまつる。夫婦討死いたすならは。御身は仇にいけとられて。小山か舘に。年をへて悦の御代を。待玉へ 詞 追申て我君とて。櫓をゆらりととむており。一まひませのおほあらめ。袖をはとひてからとすて。筒はかりゆりかけたり。其日最期のうちものに。とうちかうつたる長刀の。四尺八寸ありけるか。柄をは三尺五寸にこしらへ。ひたえにかねをのへつけたり。まちつと此柄なかうして。かすやをとらんと。二尺はかりさしさけ。ふつゝとねちきりなけすて。手ころにまはひてふつてみて。あつはれかねやとうちうなつき。南無三寶あちきなや。いかほとのものかきられて。妻子に物をおもはせんなふ女房とかたる。夫婦ともに。駒の手綱をかいくつて。仇の中へかけている（ッ）面をあはするものはなし。棒をつかうへいはうに。しはなきいしつきはらひうち。木の葉かへしの水車。馬人きらはすうちふする。長刀つかう兵法に。なみのこしきり稻妻きり。車かへしやる刀。女房うちとほれは太夫あとより切りめくる。さきに子共かくれは。父母あとよりかけにけり。物に能々たとうれは。天竺州の戰に。歩兵かさきにかくれは。王行角行かけあはする金銀桂馬かゝる時。太子もかゝり玉ひけり。此戰の兵法を。將碁（マヽ）の盤につくれるもあふこれにはいかてまさるへき。浮嶋太夫か長刀を。こらへす三つにうちをれは。おほてをひろけかけあはせ。ねちくひつゝぬき人つむて。からたけわりにひつさいたり。昨日今日（マヽ）はおもへとも。二年三月の合戰なり。此戰は夜日七日。うたるゝものはかすしらす子共も五人と申せとも。爰やかしこにをしへたてひとりものこらすうたれたり。

太夫夫婦はかりなり。さのみにつみをつくつては。未來の業と成へきなり。かちもせさらぬものゆへ。いさうはこせと申て。たかひに刀をぬきもつてさしちかへてしんたるをおしまぬ者はなかりけり 詞 信田殿心におほしめす。浮嶋か遺言はさる叉なれ共。夫婦討死するうへ。何に命をたはうへきと。腹を切んとし玉ふ處へ。小山か郎等參り。まさなき君の御自害かなと。いけとり申ていつる。小山此由見るよりも。はくちうにかふへをはねん事は。天下のきこへもしかるへからす。夕去の夜半にうちうみにしつめむとて。相馬重代の家人ちはら太夫におほせつくる。彼ちはらと申すは。相馬殿の御内に。年比めしつかはれし者なれとも。時世にしたかふならひとて。小山殿につかへ申。信田殿預り奉り。大事のめしうと是なり。もしうしなひや申さんと おくふかにをしこめ申ふけゆく夜半を待たりしは。ひつしのあゆみのちかつくも。角やとおもひしられたり 詞 姉こ此由を聞しめされ。むさんやな信田は今を限りにて有けるそや。あさましや自。おつとの心とひとつにし。角なすよとやおほすらんに。最期を一目見んとて。人しつまりて夜半にちはらか方へ御出あり。信田殿につけたりしかす〳〵の縄を御覽して。あらうらめしの事共や。自にもつけすしてなと信田殿はかりに付けるそや。何とて物をは仰なきそ。恨の心にてましますか。日の本に。あらゆる神もしろしめせ。うしろくらき事はなしと。かきくときの玉へは。信田殿聞し召れて。うらむる所存は。なけれとも泪にくれてこと葉なし。とても我身は果報なく。今を限りの叉なれは。かやうにあくかれ出玉ひ。小山か方へもれきこゑ。かさねて浮目を見玉ふな。おかへりあれとありしかは。姉こ此由きこしめし。たとひ小山にもれきこへ。同し淵にしつむともうらみとは

さらにおもふまし。かやうにならせ玉ふ事。たゝ是故の事なれは。御寛せよと仰あり。たもとよりも巻物を。とり出してたひにけり。信田殿ひらひて。見玉ふに本領のちけんまるかし。是は家につたはるへき。重寶にて候へは。もちては何の。ゑきあらんとりておかへりましませや。あねこ此由聞しめし。夫はさる事なれとも。たとひ御身しゝたりと。炎魔の帳の出仕の時。くしやうしんの。御前にてさゝけ玉ふ物ならは。道理限り有により。なといつこうのつみとかの。うかみのかれて有へきそ。たゝもち玉へと。ありし時。とりてそもたせ玉ひける。さてしあられぬうき身にて名殘のたもと。ひきさけて姉こは。かへり玉ひけり 詞 夜更けれは小山より使をたて。信田をしはつめて有けるか。とくしつめよと有りしかは。ちはら力なふして。小船一艘こしらへ。信田殿をのせ申し。沖をさしてこきいて。爰にてやしつめむ。かしこにてやしつめ申さんと。さすかにしつめかねつゝうかれてしはしたゝよゑり あらあちきなや世の中に。すましきものはみやつかひ。我奉公のみならすは。かゝるうきめによもあはし。昔は相馬につかへ申。此君を主君と。あをきしその時は 月とも。日とも おもはすや。さんかくよりもたかきをん。しらんよりもかうはしく。つきそひまはり申せしか。いつそのほとに。引替て。うつれはかはるみのうさは。我手にかけてしつめなは草の陰にて。相馬殿さこそにくしと。おほすへき 縦ひ此叉もれきこへてあすは淵にしつむとも。いつたん此君を。おとさはやと思ひて唯今こそ御最期よ。念佛を進むれは。手を合せたからかに。高聲念佛を申さるゝ千原もともに申し。腰の刀をひんぬひて縄さん〳〵に切てすて。しつめの石はかりをは。たんふとうち入南無三寶いまか見はてとたかくいひしつめた躰に

もてなし。助てくかにもとりけり。これやしくわうの御時にゑんたんか古郷にかへりしも角やとおもひしられてあり 同 明ては人目繁しとて。夜の間にをくりたてまつり。曉かけてちはらは我家路へそ皈りける。天明けれは小山よりおつかひたつ。千原御前にかしこまる。汝は信田をはしつめて有けるか。中〳〵御尋まてもさふらはす。しつめ申て候。それほとしつめけるには。なとそのときのけんみをはこはぬそ。やかて心得たり。汝は相馬重代の家人。如何さま心替りをしておとしぬるとおほふるなり。たゝとはんにはよもおちし。あれかうもんしてとへ。承と申て。むさんや千原をとつてふせちゞにあけ。七拾余度のかうもんは目もあてられぬ次第なり 五躰しんふんきれそんしあまりくつうの有時は。しやおちはやと思ひしか。まてしはし我心 ちはらは入日のことくなり。信田殿をたとうれは。いつる日つほむ花なれや。よめいをいふとも限りあり。かはれや命とていかにとへともおちさりけり。水火の責をあてゝとふ。是にもさらにおちされは。枯木よりも繩をさけ。あくる時には。いきたえておろせはすこしよみかへる。七日七夜はひまもなく。あゐてをいれかへ責けれは。さのみはいかて。こらふへき朝の露ときえにけり 同 小山大きにいかつて。妻子はなきかめし出して重てとへ。承と申て。二人の若母もろともにひつすゆる。小山殿御覽して。をつとかいひし事をしらぬ事はよもあらし。ありの儘に申せ。詐る氣色の有ならは。やかてをつとかことくなすへしと大きに怒り玉へは。女房ちつともうれひたる氣色もなく。たとへはみちんになされ申とも。しらぬ事をは申すましひ。ありし夜の曉。唯今こそしつめ申にゆくとて。小船一艘拵へ。信田殿をのせ申。沖をさして漕出る。自あまり痛しさに。急き濱に下り。こ

との躰を聞侍ふに。信田とのゝ御聲にて。高聲念佛し玉へは。千原もともに申し。たんふと物のなつてよりそのゝちはをともせす とてもかやうにうしなはれ申す命を。なとや信田殿の御命にかはり申てひとまつおとし申さぬそや これ詐りとおほしめさは。あたりの浦人を召て御尋あれと申す。さらはめせとてあまたを召てたつねられけるに。その夜の沖の爲躰く。何曳有とはそんせね共。皆此躰と答ふる。扨はしつめて有ける物を。ふひんに千原をとひけりと。妻子をかへし玉ひけり。其後信田殿猶も都のこひしくて。明ぬ暮ぬとのほらせ玉ふ。日數やう〳〵かさなり。近江の國に聞へたる大津の浦につかせ玉ふ。門なみこそおほきに。人をかとへてうる。つしの藤田か本に。やとかりそめにおとまりある。藤太は信田殿をかとへてうらんため。終夜こしらへたり。おとしもいまた若に御座有人の。いつくよりいつかたへ御とほり有そと申せは。是は坂東方よりも。都へのほる者にて候。藤太承り。やあ歩行のおあるきの痛はしさよ。都迄の御伴をは。此男か申さんと。やせたる馬に鞍ををき。我身も伴にそ出立ける。信田殿心におほしめす。されは都ほとりは。人の志のふかゝりけると。をくられ京へのほらせ玉ふ。五條にゆきてはくらうさの。人あきひとのそうりやう。王三郎にいひかたり。駒一疋にかへとつて藤太は國に下る。夫よりも津の國の堺の濱へそうつたりける。四國西國をうりまはる。後には北六道ののなたをうられさせ給ふ。若狭の小濱。越前の敦賀。みくにのみなと。加賀の國に聞へたる宮のこしへそうりにける 物の哀はおほけれとも。宮のこしにて留めたり 同 折ふし春の事なるに。賤かしわさを教へて田をうてと責けれは 鍬といへる物をもち。をたの原へは出玉へとうつへきやうはましまさす 彼三皇の

古は。しんのう皇帝かたしけなく。自鋤を荷ひて。その一けいの田をかへし。五穀の種をまきしかは。しんのうかんのう。目出度し尺の穂長もなかゝりき。夫は賢王聖主にて。國をはとくむ道理あり。彼信田殿の農業は。泪の種をまくやらん。野にも山にも立田姫さほのはやしに。ひれふして鳴より。外の叉はなし　是を見る人々か。徒者と申て。隣のさとを隣國に。かはんといへるものはなし。もてあつかうて信田殿を。をひ出し奉る哀と余所にしら雲の立出ぬれはあまのはら。身は半天になるかみの。とゝろとゝろとあゆめと。とまりさためぬうかれとり。なくねに人の驚き。明ぬるかとをすきのした。道あるかたにまよひゆき。身はうへひとゝとなるまゝ。袂に物をこつしき。草葉にかゝる命をは。露の宿にやをきぬらんさたむるかたのなきまゝ。足にまかせてゆくほとに能登の國に聞へたる親のみなとにつかれけり　詞　折節おやのみなとへは。夜盗かよせ來るへしとて。もん〳〵かとをきりふさき。用心きひしかりけり。かゝるとしろしめされねは。世になし者のうかれたるに。慈悲ましませと有しかは。内よりもせう一人立出。信田殿を見まいらせ。盗のけこ見こそきたつたれ。あれよつてうちころせ若者共と下知をする。をりふしありあふわかものとも。信田殿をうちふせ申す。あら痛はしや助りかたく見へさせ玉ふ。かのうらのとねの女房は。情ありけるものにて。痛はしや此人は。世にすてらるゝ人の子の。親の行衛をたつねかね。かゝる遠國波濤まて。來りたると覺ふるなり。まつひら我にたへと有しかは。若き者共是をきゝ。つえをすてゝそのきにける。角て信田殿を我宿所にをき申。よきにいたはり奉る。遙奥外の濱に。塩あき人のありけるか。彼浦へ舟をのる。といはとねのもとなれは。信田殿を見まいらせ。是な

るわつはを我にたへと云儘に。おさへて塩にかへとり。舟にとつてのせ申し。十八日と申すに外の濱にそあかりける。此商人は情も更になき者にて。未一兩日も過さるに塩やき玉へ稀人と　しほきをこらせしほかまの。火をたかするこそ。ものうけれ　いとゝしほたれ衣きて。したもえくゆる。かまのひをたくこそはものうかりけれ。つらき中にもなくさむは。塩屋の煙ひとむすひ。末は霞にきえにほひて。ゆくゑのほともしら浪の。よる〳〵袖をしほらして。常陸の國の。こひしさはいとゝ日々にそまさりける　秋もなかはの事なるに。彼浦のりやうし。しほちの庄司といつし人。終夜月をなかめてあそはれしか。信田殿を御覽して。爰に塩焼わつはの。目のうちのかしこさよ。いかさまにも太夫は。世にある人をかとへてきたりたるとおほふるなり。我子にせんとの玉ひて押てはうてとり。ちやくそむとかうし。角て元服をさせ申し。塩路の小太郎殿と申て。かみからしもにいたるまてかつかうせぬはなかりけり。かゝりしときの折ふし。國司國に下り玉ひ。たかのこうにつかせ玉ふ。さいちやうこけにんはせあつまり。ひはんたうはむをつとむる。國司よりの御諚には。我常陸の國に有し時。相馬とないきかちむしにより。兩方たえて年ひさしゝ。夫も座敷のろむ。盃のけんはい定めなかりしにより。つて。せんなき事も有しそかし。國司在國の間に。坐敷のやうをもさためむとて。左はかつたの太夫。右は柴田の庄司。惣して座敷十三なかれ。人數彼是三百余人。くもりたる者をつけされははれかましさはかきりなし。其中に塩路の庄司殿。我身老躰成間。養子の信田殿を出し申す。ならひのさいちやう是を見て。叶ふましひとささふる。國司よりの御諚には。何とてしほちはしゝんまいらぬそ。かみをかろくするゆへか。其儀にて有な

らは。しほちか本領悉めしあくへきとの御諚也。信田殿聞し召れて。座敷をたゝんも無念なり。なのらはやと
おほしめし。系圖を取出して　國司の前に捧けらるゝ。國司此由御らむしなに〳〵葛原の親王よりも。六代の
後胤。正門の御孫。相馬の實子信田の小太郎なにかしと。うちふみけんしよなる間。五十四郡か其内には。是
にましたるそくしやうなしと國司のたいさゆるされ申なをり玉ふそ目出度き。既に御酒盛。七日と聞へけり。
さいちやうこけにん。いとまを申て屋形〳〵にかへらるゝ。其中に信田殿もいとまをこふてかへらるゝ。國司
御覽しあふ痛はしゝいたはしゝ。奥州の國司を。三年か間奉る。その間に國司は。都へのぼつて。あむとを申
て。まいらせんとて國司都へのぼらるゝ。去程に信田殿。きのふまては塩を燒うき身をこかし玉ひしか。けふ
はいつしか引替て五十四郡の主となり國をたもたせ玉ひけり（詞）さても常陸の國に候ひし。小山の太郎行重は。
榮花さかへてきはもなし。比は七月七日（ママ）とて。上下万民寶物を揃。七夕にかすならひ。小山殿もかすの寶を
そろへて。七夕にかされける中に。信田玉作のちけん卷物を。いかにたつぬれともなし。いや〳〵是はよの人
はしるへからす。御身のぬすみ取て。他の寶になしつると覺ふるなり。かゝるうしろくらき人を。たのみて何
のゑきあらん。はや〳〵御出候へと。痛はしや姫君を追出し奉る（クトキ）あら痛はしや姫君もとよりも。角有へき
とこしたれは。乳母計をひきくして小山か舘を出させ玉ふ。あさましや自。誰をたのみて今更いつくへとてか
まよふへき。信田殿か身をいねし。うち海にしつまんとて。濱路へ。下らせ玉ひけり（詞）ちはらかこけは參て申す。
なふいたふなおなけき侍ひそ。信田殿の御命には。夫のちはらかはり申て侍ふそ。かす〳〵の文共を。とゝ

めをかせ玉へとも。まいらせあくる事もなし。是々御覽侍へとて。ありし昔の文共を。あねこの御手へまいら
せあくる（クトキ）あねこ此由を御覽して。あら嬉しや信田殿はいまた浮世にありけるそや。叶はぬまでも沙汰の爲。
都へこそのぼりつらめ。いさや乳母是よりも。都へ上り尋ん。さりなから角て都へのぼるならは。よしなきあ
たなやたちなんと。たけとひとしき御くしをそりおとし玉ひけり。乳母もやかて。同し姿にさまをかへ（ママ）こき
墨染に。身をやつし都へのぼり玉ひけり。名所舊跡を。なかめこえさせ。玉ひつゝ。卅五日と申に。都につかせ
給ひけり西東の京を。たつぬれとそのゆきかたもなかりけり。清水に參りて。南無大悲觀世音。よろつの佛の
願よりも。千手の誓はたのもしや。今一度信田殿に。あはせてたはせ。玉へやときせいふかくそ申さるゝ。熊
野の道をたつねんと。南海道にさしかゝり。天王寺住吉。根來粉川をうち過て。熊野に參て三つの山心（中）靜に。
伏拜みたつね玉へと行方なし。四國九國をたつねんと。たうしや舟に。便船こうて四國に渡り淡路嶋も。心靜
に尋けり。つくし下りの道すから。長門の府。あかまかせ關。あし屋の山崎はかたの津。しかの嶋まて。たつぬ
れとその行方もなかりけり。なこやを出てせとをゆく。ひらとの大嶋。松浦みろくししつの里。くはんきこたう
しまいはらか嶋もちかくなる。ゆきのもとをりとをるにそ。きゆるはかりの我心。日向の國にとさのしま。き
の里にあはしま。豐後豐前をさし過て。肥後の國に聞へたる。をとりたうの。山をこえ。こひはしうしのみつし。
あそのたけをこえ過て筑前の國にいきの里。遠國波嶋にいたるまて。名所はつきぬ物なり信田の小太郎。なに
かしととへと。こたうる。者はなし（詞）つくしの内にくもりなし。いさや乳母これよりも。都へのぼり尋んと。

周防の國にさしかゝり。おうちのこほり朝倉や。極樂市と聞からに立留りてそたつねける　幡磨の國に入ぬれは赤松河原由比の宿。高田の渡りやのゝ宿　名所舊跡をなかめこえさせ玉ひて。堺の松に出させ玉ふ。さうたのもりからすさき。ひとまろか岡をたつぬれとその行方もなかりけり。須磨の浦はすの池と聞からに　同し蓮にのらはやな。兵庫につけは湊川。雀の松原打出の宿。こむやのいたみ手嶋のやと。おうたの町やあくた川。かうない山崎きつね河。舟にのらねと。久我なはて　月のやとるか桂川。浮世は車の輪のことくめくりきぬれは九重の。〳〵花の都につき玉ふ　九重の内にくもりなし。いさや乳母これよりも。本の道にさしかゝり。くたらんとの玉ひて　我をは誰かまつさかや逢坂の。關の清水にかけ見えて。いまやひくらんもちつきの。駒の足音聞なるゝ大津打出の濱よりも。志賀唐崎を見渡して。かた田のをきにひくあみのめことにもろき泪かな。瀨多のからはしはる〳〵と。たつぬる人の面影をうつしもやせん鏡山えちの川瀨のなみちりてすそは露。袖は泪の隙よりも。すりはり山をこえゆけは。あれてなか〳〵やさしきは不破の關屋の板間もる月見たるねの宿過てうへし小苗のくろたこそ秋はなるみと打なかめ　三河の國の八橋の。くもてに物やおもふらん。富士をいつくゝとをたうみ。こひをするかのみのゆくゑ。まつよひの月も雲間をいつの國。信田にはいつかあふしうまて。みとせ三月かそのあひた。信田の小太郎。なにかしととへと。こたうる者はなし　其年の文月半に。あふしうたかのこうにつかせ玉ふ。十四日うら盆とて。上下萬民慈悲を施す日成けり。信田殿も父母の孝養のために。辻〳〵に札をたて。せきやうをひかせ玉ひしか。比丘尼達を御覽して。あれ〳〵しやうし申せとて。持佛堂に

しやうし申よきにいたはりたてまつる　あら痛はしや姫君終夜御經あそはし。曉かたに成しかは廻向のかねうちならし。御聲たかく廻向ある　此御經のくりきに仍て。一切の衆生悉く。無上菩提とせうすへし。ことには父相馬殿母御臺信田殿成佛得脫成玉へ。其中に信田殿未浮世に有ならは。此御經の十羅刹女の功力により。祈禱とならせ玉ひ信田の　小太郎に。今一度あはせたひ玉へ。南無三寶〳〵と。衣の袖を。顏にあてもろきは今の泪なり。信田殿も父母の。孝養の其爲に。持佛堂に御坐有て終夜御經をあそはせし。廻向の聲を聞しめし。夢現とも弁へす。あひのしやうしをさつとあけ。委く見たてまつりしに。姉のなりゆく姿なり。する〳〵とはしりより。御袂にすかりつき。是こそ信田の。小太郎にて候へとて。きえいるやうに鳴玉ふ。姉も此事を。うつゝとさらに弁へす。さて如何に小太郎か。是こそ古の。千手の姫て侍ふなれ。うきときは道理かな。うれしき今の何とてか。さのみ泪のこほるらんと。むつましけなる。おむありさま余所の。袂も。ぬれぬへし　信田殿仰けるやうは。かほと目出度世中に。何をさしてかなけくへき。いさゝせ玉へ姉こせん。常陸の國へ打越。うらめしき小山かかうへをはね。父相馬殿のみはか處にかけをき。くわひけいをすゝき候はん。尤然へしとて。五十四群(ぐん)か其内に。究畢の兵を三千余騎揃へらるゝ。小山此由聞よりも。國にこらへかたうして。にけて京へそのほりける。然に國司はあむとを申玉はつて。國に下り玉ふ。小山道にてまいりあふ。急き駒よりとんており。此度の命を。まつひら助てたへと申す。やすき程の事とて。たはかりよつてからめとり。きやうつとゝ名付て信田殿にたひ玉ふ。信田殿なゝめならすに思召し。武藏國。つまこえか野邊にひきする　首打おとし玉ひ

けり。やかて信田殿。上洛まし〳〵て殿下の御目にかゝらるゝ御門ゑいらんまし〳〵て。坂東八ケ國を。信田殿にたひ玉ふ。其次而に。近江の國とかや大津の浦を申こひつしの藤田をからめとり十日にとをのつめをもき。廿日にはたちの。指をもいて首をひき首にし玉へり。唯人は情あれ情は人の爲になし。終には我身にむくうとにくまぬ者はなかりけり。馬場の宿へ。打越まし〳〵て。春草と小太郎か。もい出て候そうれしきをも。つらきをもなとかはかむせさるへきと小嶋の庄三百町馬場のていにたひにけり。やかて御身は。常陸の國へ。下向有て。信田の河内にて。討死したりし。浮嶋太夫か。子孫はなひかととひ玉ふ太夫か孫は三人。めし出しさふらひ。三千町をたひにけり。ちはらか後家。若もろともにまいれはなゝめならすにおほしめし。坂東八ケ國の。そうまんところを。若共にたひ玉ふ。やかて御身は。信田の群に。御所をたてゝ。御歳廿五にて。御代にたゝせ玉ひ。ひはんたうはんつとめさせ榮花に誇り玉ひけり。姉の比丘尼。大方殿と申て。いつきかしつき玉ひし。すゑ繁昌ときこへけり

于時元和四年五月吉日

桃井
幸若小八郎大夫
安信
（押花）

滿仲

（毛利家本）

夫竊に以るに。覆て外なきは天の道なり。載てすつる事なきは地の德なり。始清くしてすめるものは昇て天となり。おもくして濁るものは降て地と成る。中央は人たり。是よりして君臣の道行るゝものか。凡仁王五十六代の帝を。清和天皇と申たてまつるに。王子六人おはします。陽成院貞秀の親王貞元の親王。かの貞元の親王は琵琶彈にておはします。桂の里に住玉へは桂の親王とも申す。貞衡の親王貞義の親王。貞純の親王とて兄弟六人おはします中にも第六。貞純の親王の御子を六孫王と申す。六孫王の御子をは田多（マヽ）の滿仲とこそ申けれ。そのころ源の姓をたまはらせ玉ひ。上野守と申たてまつつて。弓箭をとつて天下にならふ人ましまさす。頗朝家の御守りとし。朝敵をほろほし。國をしたかへ給ふ事。ふる雨の國土を潤すにたり（詞）正理の薬をもつて訴訟の病ふをいやし。憲法の灯をかゝけ愁歎の闇を照す（詞）然間人敬支限りなし。爰に滿仲思しめしたち玉ふ事あり（さし）夫生死のならひ有爲轉變の理りわ。皆夢幻の世の中なり。此娑婆の定命思へは纔に六十年。下天の堯老少不定の夢なり。ゆくすゑとても夢ならさらんや。松樹。千年の緑も霜ののちの夢と終に。さむへし（詞）いかにいはんや槿花一日の榮も露の間のみ保ちかたし（さし）朝には紅顏有て世路に誇といへとも。暮には白骨と爲て郊原に

くちぬ。よひには樓月を。翫といへと曉は。別離の雲にかくれり。纔なる世中に。なにゝ。心をとゝめてか徒に。あかしくらしなむ（同）たとひわれ今生にてかく弓箭を取て。人に怖れらるゝといふとも。眞の道におもむかんときは。數千人の眷屬一人もつき隨ふへからす。唯無常の殺鬼にをつたてられ。阿防羅刹に呵責せられむ事のくちおしさよ。佛法にちかつき。三寶をうやまはむとおもへは。弓箭の道緩く成へしとは思しめされけれとも。思ひ立給ふその御心すてかたくて。あるたつとき聖人のまします。庵室に入てのたまひけるは。われらこときの衆生は。何として後生を賣り候へきとたつね申させ玉へは。上人聞し召れて。賢くも御尋候物哉。最も出家のしるしには。左樣の事をこそうけたまはりたく候へ。夫欽明天皇の御代より。佛法我朝にわたり。上宮太子守屋をうちしたかへ玉ひしより以來。佛法繁昌の今にをひて崇敬他に異なり。爰に法華經と申て。八軸の金文の候か。無二むさんのほうもむにて候。伊にちくうし。結緣し玉ふへしと仰けれは。滿仲聞しめされて。扨法華妙典の本釋を。佛はなにとか說玉ひて候らむと尋玉へは。上人聞し召れて。それ法花は。貪嗔癡の三毒より。われら衆生の佛性はまさに出生すと見えたり。濁水淤泥の中よりも。法の蓮を開出す。塵勞妄想は無作の覺体なり。これによつて一代（ちし）八万の花は。五時の春に開け。三諦卽是の月は。八敎の龜にあきらかなり。弓箭。刀杖に携り。殺人刀活人劍。みな一念のうちなり。生死卽涅槃。煩腦（ママ）卽菩提ととけり因も智も。みなこれ無常の妙行なり。淨土も穢土も本來。空寂なりとかや（同）譜も此御經は。釋尊四十余年の說敎の後。八ケ年に眞實の相をあらはし給ひて候なり。然者此御經に。現世安穩後生善處と說き。又は若有聞法者。无一不成佛と

宣たり。一偈聞法の力は。五波羅蜜の行にもすくれ。五逆の調達は。たうらい作佛の記莂をうけ。八歲の龍女も。南方無垢世界の成道をとけたり。いかにいはんや弓箭をとり玉ふ事も私ならす。王法佛法の外護。國家を守り民をはこくみ給はん爲なり。一殺多生の功德有へし。佛も惡魔降伏し玉ふ經あり。在俗の身にて御座有りとも。御心のむけやうにこそより候はんすれ（カヽル）彼天竺の淨名居士（ちし）我朝の聖德太子も。在家にまし〳〵なから佛法修行し玉ひぬ。十惡五逆の輩も。須臾の念によつて。無數劫の罪障を。消滅すへき事は。うたかひなく。候なり滿仲とこそ。仰けれ　滿仲聞しめされて。あら殊勝や候。さらは結緣の爲に。法華經を一部傳受申度候と仰けれは。上人聞し召れて。子細にをよはす授け申へし。此御經を。釋尊說玉ひし時は。草木國土悉皆成佛と見えたり。卽身成佛は。疑ひさらに候ましひと。程なく一部傳受し玉ひけるとかや。有時滿仲思しめされけるは。夫人の一大事は後生に過たる事そなき。所詮子を一人出家になし。後生をとはれはやとおほしめし。美女御前と申て。十二歲に成玉ふ若君をめして仰けるは。汝をふかくたのむへき子細ありそのゆへは。寺へ上て學問し出家になり。われらか後生を吊ひてたへと仰けれは。美女御前は聞しめし。あらなにともなや。弓馬の道にうまれては。左樣の事をこそ心に懸て思ひしに。今さらわか身にあたつて。承る事の無用さよとはおほし召れけれとも。ちからなくりやうしやうを申させ玉へは。やかて仲山といふ寺へのほせ給ふ。其時滿仲仰けるは。喃いかに美女御前。學問の最初に。法花經をよく讀覺てのち。萬の經をしるへしと。御約束ありけれは。やす〳〵と領掌を申て。寺へはのほらせ玉へとも。御經あそはさむ事は中々。おもひもよらす無量の（ワン）木の皮

をはきあつめ萬の蘊を以てくさり。鎧腹巻なんとゝいひ。木長刀木太刀を作り他坊の兒をかり催し。飛越はね、こえ。はやわさすまひちからわさ。かゝる武藝のまねならては。一向よるひるたゝ天狗のやとりのことくなり。師匠同宿教訓すれは結句却而打擲す。寺一番の悪行は此若君一人のいや張行なりとそ聞へける。滿仲はかゝる不用の御事をは夢にも思しめしよらす。今ははや美女御前。經をは能讀覺てそ有らむに。喚下しよませ聽聞せはやとおほしめし。藤原の中務。仲光と申す侍を御使にて喚下し玉ふ。兒おほしめす。あら何ともなや。此二三ケ年の間に。終に御經の一字をも習はす。里にくたる物ならは治定法花經よめと仰らるへし。いかゝはせんとおほしめすか。今さらならふにをよはすとて。多田の里にくたりたまふ。滿仲やかて御對面有り。ねんなう成人候者かな。扨も〳〵約束申せし御經を讀覺てそ有らむ。それ〳〵誦せ申せ聽聞せん。承と申て。紫檀のふつくゑに。八軸の金泥の御經を双て御前にこそをかれけれ。兼て申定し亥は是なり。あそはせちやうもんせんと仰けれとも兎角返亥もし玉はす。滿仲御らんして。喃何とて經をはあそはさぬそ。是非一字も誦損して。某恨み玉ふなと。膝の上に太刀ぬきかけて。はや〳〵よめとそ仰ける。痛はしや美女御前は。終に一字も。習はぬ經の事なれは。繙とくまてもましまさす。赤面してこそおはしけれ。滿仲御らむして。憑驗のなきやつを。角祚計ふへけれと拔打にちやうとうち玉へは。此程寺にてならはせ給ひたる。早態のしるしに。机の上なる。御經一卷をつとつていや張良か。一卷の書と名付。疾外と合せ居なからうしろへひらりと飛。電天火蜉蝣蜻蛉鄭飛鳥なんとのことくにはやちらりとうせて見え玉はす。滿仲大に忿せ玉ひ。仲光を召れ。汝此太刀にて。美女

か首を討てまいらせよとて。やかて御重代の御帶刀をいたさせたまふ。仲光はあまりの御事にて候ひし間。兎角御返事にをよはすかうへを地につけ赤面す。滿仲御らんして。いかさま汝は異儀に及か。是非討てまいらせすは。今生後生。不忠の者にて有へしと大に忿り玉へは。重て辭退を申しあしかりなんと存。畏て候とて。御帶刀を玉はり。我宿所にまかり歸る。あゝら痛はしや美女御前は。仲光か門の内に御坐あり。世に面目なけなる風情にて。イみ玉ふ所へまかりかへる。直垂の袖にすかりつき給ひ。兼てより御内におほき侍の中に。取分て汝をこそ憑母敷おもひつれとて。覺々と涕玉へは。正に御討手につかはされけれとも。あまりの痛はしさに。何とてそれに御坐候そ。こなたへ御入候へとて。いそき内へいれ奉て仲光申す。退も〳〵御内におほき侍の中に。誰にも仰つけられすして。なにかしに御討手を玉はつて候事は。偏に御命の助り玉ふへき故也。たとひわか首をはうたれ申共。御命にをひてはたすけ申へく候と申所へ。滿仲の御方より重て御使たち。何とて美女か首はをそなはりたるそ。東はあくるつかるのはて。西は櫓械のとゝかんするほと。天下のそのうちを。撑し求て討へし。利く討てまいらせよとて重々の御使たつ。仲光承り。荒なにともなや。扨は御命に替り申て某腹を切たりとも。若君の御命の助り玉ふ事あらし。さあらん時は何もむやく成へし。さてなにとすへきそや。正にうてと仰らるゝは三代相恩の主君。又助よと仰らるゝも。主君にておはします。とやせん角や。あらましと。書集たる藻塩草。身體爰に。窮て是非をもさらにわきまへす。所詮おもひいたしたる事あり。此若君と御同年にまいりあふ子一人あり。名をは幸壽丸といふ。九つのとし寺へのほせ。學問させ候か。ことし十五にまか

りなる。此者を喚下し。御命にかへはやとこそおもはれけれ。然るに彼幸壽の心たて。世に柔軟にして神妙なりけれは。師匠同宿もおほくある兒の中には一大事とそおもはれける。大かた姿尋常にし。楊柳よりも娥かなり。膚は白雪のことし。恰十五夜の月のことく。一たひ咲は百の媚あり。學問世にすくれ。ならひなき兒學匠の名を得たり。殊には詩歌綺絃の道にちやうし。しゆえむゆうけう人にすくれ然間一寺のそうきやう或は。心を高根の。月にかけおもひを志賀の。浦浪によせさりけるはなかりけり。一樹の花を見ては。みな我家のひかりを。あらそふことく也。凡心さしは。さむかくのことく。儀は黄金よりもなをかたし。半夜の鐘のこゑ。曉の別をうらむ。一旦の芳眞は彼も是もたゝおなし。いつも心に詩を作り。哥を詠して。閑居に。日月を送り玉ひけり詞かゝるゆうなる兒のかたへ迎をのほせ。ちつと申し談すへき子細の候。急き下られ候へといへは。幸壽丸此六七年のあひた。父母に向顔も申さす。内々こひしくおもふ所に。迎ののほりたりけれは嬉しさたくひなふして。師匠同宿にいとまをこふて。やかて里に下る。父仲元は門に立てまつる。兒父を見付。うれしけにて馬よりおり。あよみよりける質こつから禮儀したる風情をとなしやかなりけり。父つく〳〵と是を見て。あらむさんやか程まて。そたてをきたるしるしもなく。唯今我手にかけん事のふひむさよと。おもへはしのひの泪せきあへす詞角てもつゝむへき事ならねは。汝を唯今喚くたす事別の子細ならす其故は。主君美女御前の。滿仲の御意にそむかせ玉ふに依て。なにかしに御討手をたまはつて候所に。若君のたのふて御入候へは。何として情なくうちたてまつるへきそ。いかにもして御命をたすけ申さはやと存る。それ儀を重くして命

を輕くす。さかへにのそむて。かはねを土中にすつる事は君臣のはうなり。君は臣を仕に恩を以てし。臣は君に叉へるに。儀を守て身をおしまさるは忠信の法なり。恩にそくするしんかつゐに一度は。主君の御命に替るへきものなり。親に孝ある子は。身を捨て菩提を吊へといふ事あり。汝此間寺にての學問の驗に。定て此むねをは存しつらむ。面目もなき申事なれとも。あはれ御命に替り申てたへかしとおもひて喚くたしたるそといへは。幸壽丸聞あへすにつことはらひ。嬉しくも承り候ものかな。弓取の御子と生れ候よりも。主君の御命にかはるへき事をはおもひまふけて候。一には御命に替り申。又は親のこめいに。したかはんする事こそ幸にて候へ。はや〳〵首をめされ。美女御前をたすけまいらさせ玉へ。身の命にをひては露塵ほともおしみ申ましひ夫鶯鶯のふすまをかさねても。身躰のやふれさるあひたなり。鴛鴦の契りをいたすも。露の命の消さるほといつくの里人か。ひとりとして。のこり留り候へきたゝとくしやうを。かへむこそ身のよろこひにて候へ詞さりなから少の御いとまをたひ候へ。母にて候人に。さいこの對面申たく候といへは。仲光聞て泪をなかし。あら不便の申事や。いそきたちこえ對面あれ。かまへて此事を。母にしらせてたふなといへは。其時幸壽腹をたて。扨はみれんしこくの者とおほしめし御限り候か。そこの程をは御心安おほしめせと。さもけなけに申なし。母の御前にまいり。母をみたてまつつて軈而泪をなかす。はゝ此よしを御らむして。あら珍し〻幸壽丸や。この六七年のあひた寺に居。たま〳〵くたり。さこそよろこふへき身か。我を見て啼事よと仰けれは。幸壽丸おつる泪ををさへてとりあへす申。さん候かのもろこしの漢王。ここくをせめさせ玉ひし時。かうせい將軍を太將

軍とし。百万騎をそつし。ここくへつかはされたりけるに。合對(マヽ)既に十二ケ年經て。終に軍にうちかつて。古郷へ引て歸るとき。とくしやうの都をはよ所に見て。母のまします所へゆき。母を見たてまつつ(マヽ)軈而泪をなかす。母此由を御らんして。是ほと軍にうちかつて。喜ひにてのほる人の。何のうれい有てなき給ふそととひ給へは。さん候ここくへまかりむかひし時は。白き御くしも見えさせ玉はさりしか。今幾程かなき間に。御くし漸々白妙に見えさせ給ひ候ほとに。それをなき候と申されなけれは(クトキ)將軍のはゝきこしめされ。身につもる年月をぬしたにも思はぬに(詞)親のよはひのかたふき老の浪をよせ。末のちかく成を見てなく夏よと。哀にも嬉しくもおもはれけると(クトキ)あるふみに見えて候を今さらおもひ出されて候。寺へ罷上りし時はくろくわたらせ給ひし御くしの。漸々白妙に見えさせ玉ひ候ほとに。今幾ほとか見まいらせんとかなしくて。ふかくの泪をなかすなり。僞り申たりけれは母は誠とおほしめし。不便の者の申事やけに子にてなくは何者か。母か髪の。しろくなるをはかなしむへき。ましてなからん後の世を。とはれん事のうれしやと。たゝいまさきにたて玉はん。事をはしろしめされすし。よにたのもしく。おもはれける母の心そ。いたはしき(詞)其後幸壽申けるは。いましはらく候ひて。御物語申度は候へとも。誠やらん主君美女御前の。滿仲の御意にそむかせ玉ひて。是に御座のよしを承る。卒度參御目にかゝり。軈而罷歸り。此年月離れ申し。戀しくおもひ申つる。御物語申さんと。さあらぬ躰にもてなし。母の御前を罷立つ。是を最後とおもはれける幸壽の心そあはれなる(クトキ)其後兒はひとる(マヽ)所に立いり。御經よみ念佛申一首のうたにかくはかり。君かため。命に替る後の世の。闇をはてらせ山の端の

月。か様にかき留め。師匠同宿居士の坊へ。かす〳〵の形見の文をまいらせたくは候らへとも。それさへかなふへからすと。たゝ文一通に詐りかうそかゝれたる(詞)扨も〳〵このたひ罷下る支別の子細ならす其故は。主君美女御前の。滿仲の御意にそむかせ給ふに依て。自身御手にかけ玉ふを。吊ひ申せとて喚下して候程に(クトキ)若君の御最後の躰を見るに心も心ならす。あまりの痛しさに御骨をとり首にかけ。高野の峯とやらんにおもひたつて候。三とせか間の春秋を送りむかへ。必まいり御目にかゝり候へき。師匠同宿居士の坊へ。幸壽丸とかき留め。ひむの髪をすこしぬひて。文のおくに(ヲシ)まきこめてこそをかれけれ。わかふみなから。一入に名殘のおしさ。限りなし(詞)其後父の御まへにまいり。母こにこそ最後の對面心靜に申て候へ。ひとま所に文の一通候をは。此年月すみなれし。寺へ送りてたひ玉へと。つほのうちにわれとしきかはをしき。たけなる髪をたかくまきあけ。にしにむかつて手をあはせ(イロ)南無西方極樂世界の阿彌陀佛。殊には我たのみをかけたてまつる大慈大悲の觀世音。願くは本願をすてす(詞)我を導き玉へと誠心すゝしく見えけるに。父太刀ぬきもつて立寄けるに。目もくれ。心も消はてゝ。太刀のうちとも見もわかす(ヲシ)悲き哉や。春三月の花も。無常の風の。吹さるほと三五の夜の月も。雲の覆はさるほとなり。無常の劔をぬき。一度身にふれたは。一氣の位を轉して。即得脫すへきなり。いつれの人か親となり。何物か子と產れためしなき事をもらすへき。命葉おちやすし。秋一時の。電光の影のうちに。劔をふると。見えしかは首は前へそ。おちにける(詞)兼てよりおもひまふけたる事なれは。始てさはくに及すとて。若君の御直垂を申おろして首をつゝみ。滿仲の御前に參り。御意背きかたきに依て。御首を

こそ給はつて候へ。今は御本望をとけさせ給ふうへ御腹ゐさせ玉へ。あら御情なの御所存やと申もあへす。首を御前にをき。ひたゝれの袖を顔にをしあてけれは。滿仲御覽しあへす。いしうつかまつつたり。今こそ氣はさんして候へ。さりなから首をは汝にとらするそ。よきに敎養し。跡をはとふて得させよとて御内にいらせ玉ひけれは　其後首をとり我宿所に歸り。女房をよひいたしくはしき事をかたり。幸壽か首をみせけれは。母は幸壽か首をみてやかて消入物いはす。夫容窕たる紅の顏せ。花に猜まれし質も。夕Pの風にさそはれ。嬋娟たる翠の黛月にねたまれし形も。曉の雲に隱れ。會者定離は人間の蝶。生死。無常の理りは　さま〳〵おほしと申せとも。とりわきあはれ。成けるは幸壽か事に留めたり　良有て母御前はおつる涙のひまよりも。されはこそ幸壽寺より下り。さこそ悅へき身か。我をみてなきし程にふしんをたてゝ侍らへは。異國の事をかたり出し。自か心をなくさめしを。夢にも身つからしらぬなり。たとへは御主の命に代るへき事をみつからいかて留むへき。角としらする物ならは。ともに介妁して　最後の體を。見るならは。かほとに物はおもふまし。情の仲光やと。首にいたきつき伏沈てそ。なきにける　折節美女御前は。物こしちかく御座有けるか。幸壽か最後のよしを聞しめし。際の障子をさつとあけ。立出させ玉ひて。何と申すそ夫婦の者。幸壽を切程ならは。何として美女か首をはうたぬそ。幸壽を切せ我うき世になからへ。誰に面を合すへきと。おもひ切せたまふ御色をみて。夫婦の者か參り。御守り刀を奪取り。今日よりも不用の御心中を留め。學問よきにめされ。幸壽か菩提を吊ひて御とらせ候へ。さらは御急き候らへとて。人目をつゝむ事なれは。夜にまきれ多田の里をいて都につく。爰

は人目も繁しとて。天台山の麓。十禪師の御前に御伴申。此神慮の御計らひとして。いかならん碩學の人にも御つき有て學問召れ候へ。いかに若君聞しめせ。夫天竺に獅子と申すは獸の中の王也。彼獅子年に三宛の子をうむ。產れて三日と申に。一万丈の巖石をおとして見るに。そんせす破れさるをは子とし。むなしく成をはそのまゝなり　かゝる獸までも子をはためす狎あり。若君を御勘當候事を。恨とはし思し召れ候な。御いとま申て若君。美女御前は聞しめし。はや歸るか中務　浮世は車の輪のことく。命のうちに。いま一度廻りあふへきよしもかな。名殘おしやとのたまひて。はる〳〵見送りイみ玉へはゆく道更に見もわかす。たま〳〵戛とふものとては。みねに小渡る猿の聲も我身のうへとあはれなり。ふり歸り。〳〵見送りて。跡に心は。とゝまりて多田の里にそ。著にける　女房を呼出し。唯今こそ罷歸りて候へ。あら面目もなや女房。なんほう人の命はすてかたきものそ。幸壽か最後の時。とにもいかにもならはやと。ちたひもゝたひおもひつれとも。若君をひとまつおとし申さはやと存るに依て。つれなく命存らへたり。今は今生におもひをく事候らはす。いとま申て女房とて。腰の刀をひんぬひて。弓手の脇につきたてんとせしとき。女房刀に捫付。靜りたまへ。仲光よ　誰もおもひはおとらぬそ。先自を。害しつゝ其後腹を切給へ。實まことわすれたり。我々なからんそのあとに。幸壽丸か最後の躰。君の御耳にいるならは。痛はしや若君の。隱れ忍て御座すを。さかし出させ玉ふならは草のかけにて。幸壽丸歎かん事もむさむなり。然るへくは中務。自害をおもひ留りて。我々夫婦一筋に。念佛申幸壽か菩提を吊ひてとらせなは。なとかはとくたつならさらん。かやうに申せは身つからか。命を惜に似たる

へし。とも角もよきやうに。はからひ給へといひけれは。おもひきりぬる道なれとも。至極の道理に。中務自害をとまりけるとかや（詞）是は多田の里の叟。扨も美女御前は。十禪師の御前に。誠に東西をも弁させ給はす。誰に屬て學問し。何と成玉ふへき方もなく。唯茫々として御坐有けるか。誠に十禪師の御引合かとおほしくて。山よりも惠信の僧都參社ましましけるか。美女御前を御覽して。荒いつくしの少人や。當山にてはいまた見まいらせたりとも覺へす。國はいつくのくに。御里はいかやうの人にてましますそとたつね申させ給へは。美女御前は聞しめし。是はようせうにて親にをくれ。賤き孤身にて候と語り給へは。それはいかやうの人にてもおはせよ。それ〳〵御供申せとて。同宿達に御手をひかせ。我坊にをきたてまつり。角て年月積りゆけは。螢雪の窓の前には臂を拐き。天台止觀の文に心を照し。鑽仰の室内には。圓頓實相の觀念に底を極め。御歳十九と申す時。正法念誦經をよみ玉ひけるか。傍にうちむかひ。洒々と泣たまふ。僧都御覽有て。あら輕忽や見わ何を泣給ふそととひ玉へは。さん候此御經を見候に。親に不孝の子は。阿鼻地獄を出すと候程に。夫をなき候と仰けれは。僧都聞し召れて。不思義の事をのたまふ物哉。御身は幼少にて親にをくれ。賤き孤身にて候と正く語り玉ひしか。今更不孝と仰らるゝこそ心得かたふ候へ。あふいまは何をかつゝみ候へき。學問もせす。あまり不用に候ひしに依て。親の不孝をかうふりたる身にて候。扨親はいかやうの人にて御坐そ。攝津國多田の里に。滿仲と申す人の子にて候とかたり玉へは。あふされはこそ兼てより。唯人ならす御質を。見まいらせて候ひしか。扨は音に承る（ウワ）多田の滿仲の御若君にて御坐有けるを今まて存申さぬこそ。愚僧か不覺て候へ。是に

付ても學問をいかにも召れ候へ。御勘當の御事をは。源信參て。乞許し申さんとて。十九の年御髪おろし。惠心院の圓覺（中）と祚申けれされは止觀の窓の前には。一實。中道の月をすまし又。忍辱の衣の袖に。四曼相應の。花をつゝみて。終に天台圓宗の奥相を究玉ひて。御とし廿五と申すに。師匠惠心の御供して。多田の里へそ下れける（ぶし）昔の買臣は。錦の袴をきて祚古郷の人に。見えぬると承りて候か。今の美女御前は。錦にまさる墨染の。衣をめされて古郷に。歸り玉ひけり（詞）先中務か所へ立よらせ玉ひて。案内を仰けれは。中光急き罷出。若君の御質をつく〳〵と見まいらせ。あまりの事の嬉しさにしはしは物を申さす（さしくちき）良有て中務流るゝ泪ををし留め。あらめてたの若君の御質や候。是につけても幸壽か事を祚思ひ出されて候へ（詞）兼てよりも御法躰の御姿を。御望にて候ひし間。軈而御對面候へし。御機嫌をうかゝひ申さんとて。滿仲の御前に參り。若君の御事をは何共申出さすし。此北嶺に聞へ給ふ。惠心の僧都。御對面の其爲。只今御來臨と申す。滿仲聞し召れて。あらおもひよらすや。急きこなたへ申せとて。僧都を請し奉り。軈而御對面あり。初對面にか様の事を尋申せは。何とやらん憚り多く候へとも。我等こときの大悪逆の俗は。何として後生をたすかり。極樂に往生すへく候やと尋申させ給へは。僧都聞し召れて。夫法花の名文に。大通知勝佛。十劫坐道場佛法不現前。不得成佛道と說れたり。佛も未出世し玉わさる時は。成佛と（マヽ）云咎もなし。一念未生以前には。無生無死にして成佛の直道にあらす。人の訓によらすたゝ我と思しめすへきなり。一偈聞法の功德は。俱胝劫の善根たり。凡他生曠輪成へし。尤佛道の便あり。殊更弓箭をとり玉ふとも。合戰の道まて。是を思しめさは。一念生害の源に立歸て。聚罪は霜露

の如く。消て卽身成佛たるへしと。源宋と云物に見えて候とのへ玉へは。滿仲喜悅の眉を開き。扨は弓箭を取候とも。一心の向樣に依て。極樂に往生すへく候やと御悅は限りもなし。時しも比は九月十三夜の明月阿もなかりしに。山ありとしらする鹿の遠聲も心すこく聞なして。千種に集く虫のね迄も。我あり顏に物あはれなる折からに。圓覺貴き御聲にて。寂寞无人聲。讀誦此經典。我尒時爲現。淸淨光明身と。たからかにあそはせは。誠に人倫の住所なりと云とも。寂寞にして。人の聲もなし。四明の洞にはあらねとも。讀誦の御聲は。梵天忉利天の。雲の上にもきこゆらん貴しと申もあまりあり。心の有も。あらさるも袖をしほらぬ。人そなき滿仲はまこと殊勝に思しめし。僧都をしはし留め申させ玉へは。是は日をさして勤行の子細の候。亦祚參り候らはめ。明日歸山有へしと仰けれは。さらは御弟子の御僧を。一七日留め申たく候と仰けれは。僧都聞しめし。幼少よりも身をはなさぬ弟子にて候へ共。御經御聽聞の爲ならは。一七日は留めをかるへく候。御用過なは本山へ。送りてたへと曰ひて。御勘當の御叉をは何とも仰出されすし。翌日僧都は御登山ある圓覺獨り留て七日御經あそはす滿仲仰られけるは。さもあれ貴方はいかやうの人にてましますそ。某も御としの程の子をもつて候ひしか。學問もせす。あまり不用に候ひし間。侍に申付。首を討て候へは。今更後悔仕れとも其しるしも候らはす。是に候女は。其子か母にて別を悲み。御覽せられ候へ。兩眼を泣つふして候何とやらん御質を見奉るに。其子に似させ給ひて候事よなふいかに御臺聞しめせ。此程御經あそはされ候御僧祚。ありし美女にすこし似させ給ひて候らへと仰けれは。御臺聞しめされてなつかしやさふらふ。今より後は

させる御用さふらふはすとも。つねにはたちよらせ給ひ御經あそはし。身つからなくさめて給はり侍らへ圓覺聞しめしさては我か不用に依て。母の盲目とならせ玉ふ事よ。さこそ佛神三寶も。吾をにくしとおほすらむ。罪障の程祚口惜けれと沸露涕泣まし〳〵て。祈念申されける事こそ殊勝なれ南無。靈山世界の釋迦。善逝。法華守護三十番神。本山護擁。山王十禪師佛法の威力。靈驗地に落玉はすは。母の盲眼を。忽開かしめ給へ。我見燈明佛。本光瑞如此と。此文を唱へ肝膽を碎き祈られけれは誠に佛神も不便に思しめさるゝか。本尊の御前よりも。金色のひかりの。たゝせ給ひて候と。仰有けれは。北の御方聞しめしそれはいつくに候と御覽しけれは有難や。盲てひさしき兩眼。忽はつとひらきけり奇特成共中々申計もなかりけり滿仲夫婦御手を合せ。あら修勝や。誠に生佛にて御坐有けりと恭敬禮拜し給へは。圓覺坐をさつて恐れをなし玉ふ。滿仲御覽有て。なふ忝や。何しに御坐をさらせ玉ふそ。圓覺聞し召れて。さん候釋尊御說法の砌ん。父淨飯大王の。御聽聞に出させ玉ひし時。佛たにも蓮華座をさり玉ふ。ましてや我等は賤き僧。いかて恐をなさゝらむ。滿仲聞し召れて。あらをろかの仰や。それはおやこの禮儀。是は他人の事なれは。なにかはくるしく候へき圓覺聞しめされて今は何をかつゝみ候へき。我こそ美女にて候へ。中務か情により。我子の幸壽をきり。我をは助て候そや。かの僧都につき奉り。不思義にかゝる身と罷成て候と。語り給へは滿仲夫婦圓覺の。衣の袖にすかりつき。是は夢かやゆめならは。さめてののちをいかゝせん。まことはうつゝ。なりけれはうれしさ。たくひましまさす

されは祚よき郎徒には。別して恩をあたへ。召仕と申傳へて候か。中務か情をは。生々世々にわするましひと曰ひて。いそき夫婦を召れ（ダトキ）やあ是々見よや夫婦のもの。今よりのちに美女御前を。なむちら夫婦かためには幸壽丸とおもふへし。後生の事をはたのもしくおもへとて。滿仲も北の方も（モシ）中務夫婦の者圓覺に。いたきつき玉ひ。うれしきいまの。なみたにはひとしほ。ぬるゝたもと哉 凡九万八千町の御領を半分わけ。仲光に宛行はせ玉ふ。幸壽丸か菩提をとはむため。少童寺と云寺をたて。本尊には兒文殊を作て獅子にのせたふ。（ヲヽ）法華と曰は彌陀會上法万德の位。三世の諸佛出世の本懷は。衆生成佛の直道なり。經にあらはす時は。妙法蓮華の五字につゝめ。名にとく時は南無阿彌陀佛の六字にせつす。あるひは五劫思維の遺思の經を。六字の名につゝめて。十劫正覺の果得。一念稱念の衆生に施と見えたり。思維と曰は坐禪の異名。天台には止觀と說き。眞言には自相教相と宣たり。法相三論には。空有の二有の二相に抱はる。恭敬虛要の銘前も。みなこれ一實無相の皆現にしかす。唯。止々不須說我法妙難思と觀すへし。妙樂大師の御釋にいはく。諸敎諸讃多在彌陀故以西方而爲一順。唯心の彌陀已身の淨土なれは。本來无東西何處有南北ときく時は。いかにもして聲に出て。念佛を申へし（ツヽ）阿彌陀は本來の面目なり。十万億土も隔てす。我等が方寸のうち歷々として分明也。本より方角なし。佗念清淨たり。豈色相にあつからんや本より法花と念佛は。一具の法門なり。されは古佛の傳に曰く釋在靈山名法華。今在西方名彌陀。濁世末代名觀音。三世利益同一躰。離取捨と云云。いかにとして法華と念佛。各別にこゝろふへき。たゝ生死は春の夜の夢のことし眞如の月は。本より明白たり。佗人の壽命をかつて。

自身の命をつく迷の前の是非は。せひともに非なり。悟の前の是非は。是非共に是なり。自佗一如たり。分明成哉や先に死する幸壽。後に死する美女御前。今ははや名のみ計そのこりける。されは空也上人の一首の歌にかく計。世の中にひとり留まる者あらは。もし我かはと。身をやたのまんと詠し玉ひけるとかや東方朔の九千歲。宇筒等の。八万歲も名のみはかりそのこりける。非相八万劫。運洞かねふりもたゝ夢の世のうちなり。滿仲の御心。法の爲にくはたて罪障のなかれをくみ菩提の道あきらかにしゝそん〳〵も繁昌し天下をたもち玉ふ事。千秋万歲のみなもとをあらはし玉ふ物なり。將又か樣に。儀をおもんし。命をかろくし名を後の世に殘しをく。幸壽丸か心中。上古も今も末代も。こやためしなかるらむ（ヤト）人々申あひにけり。

于時元和四年五月吉日

桃井
幸若小八郎大夫
安信
（花押）

鎌田

源氏左馬の頭義朝は。待賢門の夜軍にかけまけさせたまひ。東國さして落給ふ。爰にせんぞくかかけにて。横川法師の大將。おほやのちうきがはなす矢を。進朝長の弓手の膝口にうけとめさせ給ひ。其御手大事にて。美濃國青墓の長者に着せ給ふ。長者急き立出。義朝の御目にかゝり。扨朝長は御供かきかまほしやと有しかは。義朝聞し召れて。大事の手負最後のきはといふならは。長者の歎きふかゝるへしとおほしめし。さん候朝長をは。惡源太と打つれ。鎌倉へつかはして候。明年の夏の比。必くして參るへしと。深くつゝませたまひ。其後鎌田を召れ。如何に正清。朝長か躰を見よ。尾張をさして一まつ。落へきにても有やらん委くとへ。鎌田承り。中宮大夫進朝長に參り。明日は都より。討手の參り候へし。夜半に紛て一先。おつへきにてもましまさは。御伴召れ候へと申す（クトキ）朝長聞しめし御供申度は候へ共。痛手薄手に七ケ所の手負。五躰安からねは御供申難し。さあらは平家の者共に。かき頸なんとにせられては。骸の上の恥辱たるへし。たゝ〳〵腹をきりなんと御返事を申させ給ひ。頓て鎌田召れ。如何に正清。弓箭に携り箕裘の家といひなから。自害をいまたしらぬなり。如何樣にする物そ委く申せ。鎌田承り。さん候夫自害と申は。十方淨土（ヤウド）は申せとも。先最後の時は。西にむかつて手を合せ。高聲に念佛申し。腰の刀をするりとぬき。弓手の腋にかはとたて。妻手へきりゝと引廻し。かへす刀を取なをし。心もとにさしたてゝ。袴の着きはへをしをろし。臓（かゝる）をつかんてくり出し。寸（ヤシ）〳〵にきりて。捨たるを清きしかいと申なり。朝長聞しめし。やかて意得給ひて。をし手をしおきなをり。腰の刀をするりとぬき。弓手の脇にかはとたて。妻手へ漸々引まはし。返す刀を取なをし。心もとにさしたてゝ。きらん〳〵し（ヤウ）給へとも。痛手うすてに腕こはり。御身合期ならされは。自害を半に。しかけ給ひ鎌田はなきか首をとれ。正清此由見まいらせ。涙とともに參りつゝ御頸をとらんとしけれ共。三代相恩の主君に。いつくに刀をたつへきと。泣より外の事はなし。朝長は御覽して。不覺なり正清。はやとく〳〵とのたまへは。いたはしや御首を。水もたまらすかきおとし。義朝に參りつゝ御自害のよしを。申せは御落涙はひまもなし（同）其後義朝鎌田を召れ。是より尾張へは何として着へきそ。鎌田承り。さん候長者の弟に。鷲の栖の玄光を御頼あれと申す。頓てわしのをたのませ給へは。安き程の御事とて。柴舟下すにことよせ。人々を舟にのせ申し。かせをたかくゆひあけ。上に柴をつみかけ。府津の七郎か七百余騎にてさゝへたる關所の前を。兎角諫してをしとをし。内海の浦へ船をよせ。鎌田兵衞を御使にて長田をたのませ給ふ。長田難なく頼まれ申し。新造に御所をたて。君をいれ申しいつきかしつき奉る。此支都に隱れなし。六原にさしあつまつて内義評諚とり〳〵なし（ヤウ）。時刻移して叶ふましと。彌平兵衞宗清に三百余騎をくたしたふ。小松の内府の御諚には。をろかなる御はからひかな。彼東國と申は。源氏に心有かたなり。討手下ると風聞せは。東に殘る源氏か。雲霞の如くはせあつまり如何樣

（毛利家本）

大支も出來なん。所詮たはかり狀をこしらへ長田をたのませ給ひ。過分の國所領を一旦あたへ味方にめされ。義朝をたはかり。安〳〵と討て後。長田も討罰有へきになんのしさい候へき。此儀にしくはあらしとて。頓而たはかり狀をこしらへ。長田か館へ着給ふ。長田なんなくたのまれ申。御教書頂き。披ひて拜見申其御書に曰く（ヨミ聞カシ）下狀源氏左馬頭義朝は。親の首を斬のみならす。したしむへき兄弟をほろほし。六親不和にして三寶の加護なし。父母不孝にして天罰を蒙る。其いはれあひたかはす（同書）去年の罪近年にかんし平治の。戰にかけま け帝都をさつて遠嶋遠鄙に迷ふ纔に露命を。石草にかけ芭蕉の四大を。亂風に任す。粗賴み少き事は槿花。一日の影を。待かことし草風春の雨を待に似たり。とても自滅すへき物をや。此味方にくみせん事は唯深淵に望んて。薄氷を踏に。似たるへしはや義朝かかふへを斬て天下に捧け。申へしけしやうには。美濃尾張三河。三ケ國を宛行ふ。同じく受領は望みたるへし。仍狀如件。平治二年正月一日長田か館へと書れたり（言）長田御教書を頂き。夜半に人をまはし。五人の子共を近付。是〳〵拜み申せ。綸旨のむね至極の道理爰にあり。實も義朝は親の首を斬給ふ。五逆罪の人成を。主に賴みて何かせん。いさ此君を討申し。美濃尾張三河。三ケ國をたまはり。うへ見ぬ鷲と思ふはいかゝはからふ。子共承りこはゆゝしき御大支にて御座候。此人々三人をうたんには。尾張の國か動きても。輙くうたれ給ふまし御思案あれと申す。長田聞て。不覺なり汝等。勢を揃へてうたはこそ。たはかつて討へきに何の子細の有へきそと申す。かゝつし處に三男先生と申す者。烏帽子（ヤウシ）のさきを地につけ。俚の如く此君は親の首を斬給ふ五逆罪の人。扨亦一代ならす二代ならす。三代相恩の主の頸をきり

たまはゝ。五逆をは扨置ぬ八逆罪をいかゝせん。永〳〵敷は候へとも。爰に喩への候を語つてきかせ申へし。昔天竺せつせんの傍に。めいみやうてうといふ鳥あり。彼鳥筒一つにて蠅二つ。一つの蠅か餌を求て服せんとせし時。一つの蠅賢くて此餌をちうにてはふて喰。一つの蠅思ふやう。如何なれはよの鳥は。とうも一つはしも一つ。我等如何成因果にや筒一つにて蠅二つ。たま〳〵求る餌食をも。うはゝる事の口惜さよ。所詮一方を退治せはやとおもひ。毒の虫を求て。服するまねをせし時。常のことく心得此餌をちうにてはふてくふ（ハヽル）蠅は二つと申せとも。筒か一つて（ヤシ）有間。其毒筒におさまりて。身躰か破れつゝ。筒躰か損して。をのれさへに。死ゝたると承りて候そ。我も人も自然は。もつてはひとしかるへし。此君と申は。政道かしこくおはします。鎌田兵衛正清は。双ひもなき强の者。童に澁屋の金王は。弓箭を取て。名人と名をえたる程の者なり。是三人をうたむには。尾張八郡。動きても輙くうたれ給ふまし（ツヽ）我〳〵か心中には。とても捨る。命ならは君にたのまれ奉り。內海に城をこしらへ。敵むかふと見るなちは。軍兵共をさしつかはしてめさまし軍せさせ。軍兵盡は腹切て。死出の山の御供こそ。弓矢を取ての面目なれ。昔か今に至るまて。聟と主とを討取ていや世（ハヽ）に出たるはうや有然るへくは此事をたゝ思ひとゝまり給へとよ（言）長田聞て。殊の外に腹をたて。何と申そあの冠者め。夫天地開け始てより以來。天は父地は母。親の恩を蒙り。庄司か申事を直に背くは奇怪なり。惣してあの先生めを見れは中〳〵腹もたつ。まかり立と云まゝに。ゐたる處をつんとたち。簾中深くいつたるはとかふ申にをよはれす（クトヤ）荒むさんや先生は父にしかられ。常の所に立入つく〳〵あんしけるやうは。親のめいをそむ

かしとて主に弓矢をひくならは。八逆罪の咎。主と一所に成申し父に弓箭を攣ならは五逆罪の咎たるへし。しかしたゝ髻をきつてさまをかへ。浮世をいとはゝやと思ひ（かゝるふし）年十七と申には。みとりの。たふさををしきりて。刀とともに西へなけ。つたのふち笈肩にかけ。心と衣を墨に染。遁世修行に出たりし。彼先生を。見し人のほめぬ人こそなかりけれ（言）其後長田殘る子共をちかつけ。實先生めは遁世したるとな。扨汝等は先生にとうすへきか。父か義にしたかふへきか早々返事を申せ。子共承り。とも角も御はからひの惡くはよもさふらはしと申す。長田聞て打笑ひ。かやうに申も汝等を。世にあらせんか爲そかし。先聟の鎌田をは。先生か出居へしやうし。山海の珍物をとりかへ〳〵酒をしひよ。醉たらん所を見て。酌にたつたる者か。もつたる酒をなけかけ。ひらまん所を無手とくめ。一間所に能兵をかくしをき折あふて討へし。童の金王をは。內海の沖に大網ををろし。網の奉行にことよせ內海にて討へし。主の義朝をは此庄司めに任せよ。先金王を議てこそといふまゝに。蔀戸の本の塵とらせ。若き女を使にて金王をしやうする。澁屋さふなく來る。長田急き立出。三獻盃過てのち。如何に澁屋殿を。万事賴み申へき事の候か。但憑まれ給はんならは申へし。金王聞て。何亥を仰せ候へき。長田の大亥たるへくは一命を成共しんすへし。長田聞て打笑ひ。夫まてもさふらはす。我君の是までの御下向を。一期の面目優曇花と存し。蓬萊をからくみ。君を祝ひ申さんため。蓬萊の下くみには。魚と鹿かいる事にて候程に。五人の子共をは。三河の國あすけの山へ鹿狩にこしさふらひぬ。又內海の沖に大網ををろして候か。奉行にはたとことをかひて候。若き時のあそひに。獵漁りと申して。くるしからぬ事なれは。奉行にた

つてたへかしとうちとけ顏にそ議りける。金王聞敢す。やかて腹こそたつたりけれ。長なる髮を。からわにきつとわけたるか。ふる〳〵とほとひておほはらはにそなつたりける。髮に喩へあり樊會いさみをなせは。髮甲のはちをゝひぬく。是にはいかてまさるへき。いつもはなさすもちたりし四尺三寸の角鍔のうち物（ツ）つはもと二三寸くつろけ。長田をはつたとにらんて。何とさふ長田。君を大事に。おもひ申さはこふん成共出ましきか。さなくはりんたん隣郷に。傍輩共もありこそするらめなとよひよせていたさぬそ。陽明待賢郁芳門。とまり〳〵關〳〵にて。合戰にほねおり。物具にかたひかせ。下つて三日も過さるに。網の奉行にたてとさふや。鴉の子か白くなつて駒に角のおいんほと。待候へよ庄司。定て上へ申さるへし。太刀取繩取さたまつて。汀て切て捨らるゝとも全く金王いつましひ。見れは中〳〵腹もたつ罷り立といふまゝに。銚子土器けちらかし。そとの出居まてをとり出し。彼金王かいきほひは如何成天魔疫神も面をむくへきやうそなき（詞）去間長田は。金王にをとされ。ふるひ〳〵座敷をたち。頭殿の御前に參り。何と物をは申さすしてたゝさめ〳〵となく。義朝御覽有て。あれは如何に長田は何事を歎くそ。さん候別の子細にてさふらはす。我君の是迄の御下郷を。一期の面目優曇花と存し。當生はやる蓬萊をからくみ。君を祝ひ申さんため。蓬萊の下くみには。魚と鹿かいる事にて候程に。五人の子共をは。家の子郎等さしそへ。三河の國あすけの山へ鹿狩にこしさふらひぬ。又內海の沖に大網ををろして候か。奉行にはたと事を闕て候程に。御內の澁屋をたのふて候へは。奉行にこそはたゝさらめ（クトキ）剩へ年寄たる庄司めをさん〳〵に惡口せられ申。强面命存へ。是まて參りて候とてはら〳〵と泣（言）義朝聞

しめされて。實〳〵夫はさそ有らん。地躰あの金王は。物狂しき者にて。我云事をさへ五度に三度はそむく。ましてこふんか申さん事を。いかて承引すへきそ。よし〳〵庄司腹ゐて歸れ。奉行にはいたさふするにて有そとて。長田をかへさせ給ひて後金王をめさるゝ。澁屋承り。あは庄司か訟訴申した。こさめゆゝしき大事と心得。御前に畏る。義朝御覽有て。あらけなくはのたまはて。やあ何とて汝はちかふたるそ。都より此國まて。長田を憑み下る身か。山ならは須彌山。海ならは滄海よりもなをたのもしう候に。一旦違ふ事有ともなと承引をせさるへき。其上獵漁りとやらんは。若き時のあそひにて。くるしからぬ事そとよ。奉行に立て魚をとり庄司か心を慰めよ。金王承り。謹而言しけるは。さん候某全く奉行に出ましきにてもさふらはぬか。長田か今の振舞を見候に。君に心代りを申し。五人の子共をは。かりくらに事よせ。催促廻し勢揃へ。我君を討申さんする。たくみをめくらすと見て候を。御存しなくてかやうに君は仰られ候よなふ。義朝聞し召れて。よし夫とても力なし。長田か心かはるならは。一所に有てもなにかせん。若もちうしんたるへくは。後のうらみを如何ゝせん。たゝ出て魚をとり庄司か心を慰めよ。金王承りあかぬは君の御諚とて。おうけを申して御前をまかりたつか。君も聞しめせと高らかに。人は運命竭ぬれは。智惠の鏡も。かきくもり才覺の花もちりはつる。郎等か。たはかるを御そんしなきそ口惜き。かやうにかきくとき一間所へつゝといり。はたには唐紅ゐひつちかへ。重目結の直垂の。上下四つのくゝりをゆる〳〵とよせさせ。黑糸綴の大鎧。草摺長にさつくとき。惣して刀は三腰さす。四尺三寸の角鍔の打物。三尺五寸の太刀をかさねはきにはひて。四尺八寸の長刀をひき杖について。

頭殿の御前に參り。東岱の前後の夕煙り昨日ものほりけふもたつ。北邙朝露の幻しは後れ前立世のならひ。若内海にてうたれすは。參りて御目に。かゝらんと涙とともに立出る。義朝は御覽して。いまはしゝ金王。首途いわへとの給ひて。自酒をそくたされける。御いとま申て金王は。内海の沖へ出にけり。契りはあれと。山鳥の尾をへたつるかことくなり。扨も内海には。組手の人數を定るに。先一番に岸岡十郎。野組小栗を先として。宗旨大力三十六人。大船八艘催し。上にあゆみの板を渡し。金王をのせ。沖をさして漕出し。爰にも魚はなきそ。かしこにも魚はなきかと。かなたこなたと目を見合せ金王をうたんとする。澁屋本より存しの事。ちつともさはく氣色もなく。もつたる長刀にて。舟底をとう〳〵とつきならし。何とて面々は。夕日西に傾き給ふに。綱手をはとらすして。良ともすれは某に目をかくるこそ不審なれ。あふやかて心えたり。汝等か主の長田。君に心替りを申し。某を此沖にてうたんする。其工をめくらすと覺へたり。思ひ内にあれは色外にあらはるゝ。天しる地しる。我しる人しる。まちかくよつて叶ふまし。先長刀の切手には。こむてなくてひらくて。八方さひしき長刀の。手をつかふ物ならはあふさんをみたしてうたるへし。長刀おれくたけは。二ふりの太刀をもつて。さん〳〵にきるへし。太刀の柄をれくたけは。三腰の刀を。ぬきかへ〳〵。取てひきよせさしころして。底のみくつとなすへきなり。運命竭果て。太刀も刀もをれくたけは。汝等たふさをとつて。五人も十人も。左右の脇にかひこふて。海底につゝといり。五日も十日も。底にて日を送るならは汝等か命はとゝまるへし。まちかくよつて叶ふましひと艫舳をかけりまはれは。内海を出し時には。金王ならは我くまん。誰くまんとはい

さみしかと。此いきほひにをそれつゝ。舟底せかいにひれふしてふるひわなゝきゐたりけるはことおかしうこそ見えにけれ 是は内海の物かたり。爰に物の哀れをとゝめしは鎌田兵衛正清なり。宵迄は御前に伺公申し。みや使ひまいらせ。小夜更方に御暇給り。廊の屋に立歸り。彌陀石みた若とて二人の若の有けるを。弓手妻手の膝にをき 後れの髪をかきなて涙をなかし申けるは。正清都にて度〳〵の合戰に。すそろに命のおしかりつるも唯汝等か有ゆへなり。いつか汝等成人し。父か供を仕り。はちある矢をも一筋いる。其折柄を見るなら は。いかゝは嬉しかるへきと 明暮是を願ひしに。思ひの外に引替て。君落人と成給へは。御供申て正清も。うたれん事は治定なり。さあらん時に汝等は。三河の眞福寺の。院主の御坊にふかく契約申すなり。院主の御坊にまいりつゝ。小經の一巻をも。よきに學して正清か。なからん跡をとへやとて。つゝむにあまる。其涙よ所の袂もぬれぬへし らうのおかたは御覽して。是はいまた正月三日も過さるに。御身はの給ふそと。いひもあへぬに舅の長田。組手餘多用意し。鎌田殿やまします物申さんと有しかは。正清舅の聲ときゝ。是に候と て太刀をつとり出んとする。萬の御方は御覽して。袂を取てひつとゝめ。あはてたり鎌田殿さはひて見えさせ給ふ物かな。けふ此比のならひにて。親は子をたはかれは。子はおやにたてをつく。しかも御身は落人にて。萬に心を置へき身か 明ましき夜にてもなし。今夜をあかし給ひて 夜明ておいて。ましませや鎌田殿とそとゝめける。正清聞ていつよりも。むつましけなる風情にて。立歸りうち笑ひなふさのみにとゝめ給ひそよ。めさるゝは御身の父正清かために舅なり。居なから返事を申さんは。不覺のいたりと存する也。やかて歸らんさらはとて。名殘の袂。ひきさけて長田とつれてそ出にける。かりそめなから。別とは後にそ思ひしられたる

其後先生かてゐへしやうし。山海の珍物國土の菓子をとゝのへ。色をかへては三度もり。風情をかへては五度七度。盃の數もかさなれは。さしもに剛成正清も次第〳〵にひらめひたり。長田是を見て。あは時分はよひそとおもひ。帳臺へつつといり。かいを一つ取出し。微塵さつとうちはらひにつこと笑つて申やう。如何になふ鎌田殿。此間の御つかれ思ひやられていたしうさふ。子共あまた候ひぬ。庄司も角て候へは。何かはくるしく候へきたゝうちとけておあそひあれ。かいのみにとつては。山田郷と申て。三百町の處の候を。鎌田殿に奉る庄司も三度たまはるなり 御身も三度まいれとて聟の鎌田におもひさす。去間正清舅の呑ふたる盃に。所領を添てえさするうへ。いつくに心のをかるへき。さしうけ〳〵呑ほとに。微塵積て山となり。砂長して岩となる盃の數もかさなれは。弓手の座敷か妻手へまはり。妻手の座敷か弓手へまはつて。てんしやうの大ゆかゝ。ひらりくるりとまひけれは。うしろの障子によりそひてとろり〳〵と眠りけり。酌にたつたるともやなき。もつたる酒をなけかけ。をしならへて無手とくむ。鎌田もとより剛の者。さつしたりといふまゝに。友柳かたふさを取て。膝の下にひつしひたり。長田是を見て。居たる所をつむとたつて。鎌田かたふさを取て後へえひとおりつくる。鎌田是を見て。情なし長田。さやうにはせらるましひと。長田をかひつかんて。取て引寄たりけれ共。いかゝはもつてのかすへき。隱しをき兵かす。すきをあらせすおりあひて一刀つゝとおもへとも。十三刀さゝれて樊噲といさむ正清もよは〳〵と成てかつはとふす。荒むさんや正清最後の言そ哀れなる。されは弓取のも

つましきものは國をへたつる妻女なり。親のおこす謀反をなとかはしらて有へきそ。たとひ緣こそつくるとも。二人の若か有なれはなとさいこをはしらせぬそや。なゝの子はなすとも女に心ゆるすなと。申傳へて候。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。けにもおもへは仇なり。子は三界のくひかせとは今こそ思ひしられたれ。三界のくひかせと煩惱の繫にひかれつゝ。不覺の死をするものかな。南無阿彌陀佛(ホトケ)みたふつと。是を最後のことはにて。朝の露ときえにけり。正清の。最後の躰をしはからて(マヽ)哀れなり。言さすかに長田もふひんにおもひ。夜明て頸をとらんとて。むなしき死骸に衣引おほひ各々なりをそしつめける。あゝらいたはしや廊のおかた。是をは夢にもしらす。小夜更人もしつまり。兄弟の人々も皆々歸らせ給ふか。不思義やつまの正清は。何とてかをそく見えさせたまふらんと。うすきぬ取て髪にかけ。とうらうまはり。まこひさしをとをる時。人に忍ふたる聲にて。鎌田殿やまします。正清とよひけれと。宵にうたれたる事なれは夜更て喚に音もせす。四間の出居を見てあれは。灯少かきたて。あたりに人一人衣引かつき臥てあり。うたれたるとはおもひもよらす。醉伏たるそとおもひ。するゝとよつて。なふ御身は鎌田殿にてましますか。さやうに酒に醉給ひては。しせん我君のこせんに。何としてたゝせ給ふへき。おきさせ給へといふまゝに。衣引のけて見てあれは(クトキ)くれなゐに身をそ染にける。あまりの事のかなしさに死骸(シカハ)にかはと。うちかゝりしはしきえ入給ひけり。少し心を取なをし。さこそ最後にみつからを。うらみさせ給ひつらん。夢にも自しらぬなり。我をは誰にあつけをき。捨てはいつくへ行やらん。我をもつれてゆけやとて。さいこにぬかぬ。刀をぬき既に自害と見えけるか。まてしはし我

心。明日にも成ならは。むさんや二人の若ともは父母か行衛をしらすして。父よ母よとよふならは。しやけんの祖父伯父にて。鵜鷹の餌を。うつやうにうたせたまはんむさんさよ。同し道にと思ひきり。又廊の屋に立歸り。二人の若を見給へは。兄か手をは。弟にかけ。弟か手をは。兄にかけ余念もなふて臥にけり。らうのおかたは御らんして。二人の若をかきいたき。父正清のふしたりし。前後にとうとをろしをき。如何に二人の若共よ。祖父伯父このしわさを見よ。情なの事やとて。泣涕こかれなき給へは。二人の若も。もろともにふし沈みてそ泣にける。扨有へきにてあらされは。如何にきくか兄弟よ。角うらめしき浮世に。存へてあらんより。父もろともにうちつれて。炎魔の廳にて。母をまてよと語りつゝ。兄彌陀石を引寄て。弓手の肱の。かゝりを二刀害してをしふする。をと〳〵か是を見て。あらおそろしの母うへや。我をは許し給へとて。ゐたる所をつんとたち。さらはよ所へも。ゆかすしてころすへき母にすかりつく。いとゝ心はきゆれ共。眼をふさきおもひきり。心もとを一刀。あつとはかりを最後にて。兄弟の若ともを。三刀に害しつゝ。我身ははたの守りより。しゆへんの珠數を取出し。西にむかつて手を合せ。いとゝたに。女は五障三從にえらまれて。罪の深ひと承る弓箭にかゝる自を。たすけ給へや神佛。南無阿彌陀佛を最後にて。刀を口にくはへつゝ。鎌田の死骸にうちかゝり。朝の露ときえにけり。廊のおかたの。最後の躰哀れといふもあまりあり。言荒いたはしや母うへ。是をは夢にもしろしめされす。鎌田うたれぬると聞しめし。さこそらうのおかたか歎くらん。吊らはゝやとおほしめし。らうの屋に立よりよへとこたふる者もなし。扨は鎌田うたれぬる所に有そとおほしめし。四間の出ゐを見給へ

は。らうのおかた二人の若。皆〳〵あけにそみ同し枕にふしてあり。母此由を御覽して。なふ是は夢かや現かや（クトキ）さりなから道理なり理りや。何に命のおしからん。子よりも孫はいとふしきに。花のやうなる若共を先にたて。齢ひかたふく自か。一人跡に殘りなは。太山かくれの遲櫻（ヲシ）梢の花はちりはてゝ下枝に一ふさ。殘りて嵐を待に似たるへし。我をもつれて行やとて。母も自害をとけ給ふ。平治貳年正月の。二日の夜の事なるに。鎌田をはしめ。父子五人水の泡とそきえにける（言）天明けれは長田。鎌田か首をとらんとて。四間の出居を見てあれは。我女房を先として。皆々あけにそみ同し枕にふしてあり。さしも情なき長田とは申せとも心よはり。遁世するか腹をきるか。いかゝはせんと思ふか。いや〳〵身より出せる罪なれは。誰をさしてかうらみんと。心に内に存すれは。あゝら果報なの者共か成たる有様や。長田か世に出るならは。果報の妻女はいかほとも有へきに。南無三寶阿彌陀佛と。へんしゆの念佛を申し。鎌田か首をとつたるはとかふ申にをよはれす。其後義朝の御前に參り。今日は三ケ日の御嘉例。八幡宮へ御社參有へく候。たかみの湯殿と申て。子細なき所の候へは。御出有て御行水と申す。義朝聞し召れて。先祖の郎等ならすは誰かかやうふるまふへき。かまへて長田弓箭の冥加。七代迄安穩なれやとの給ひて。御重代御劍御腰物。長田に預け給ふは御運の盡る處なり。角て義朝湯殿の内へ入給ふ。宵より定めし事なれは。都合二百余騎にて。湯殿を二重三重にをつとりまひてときをとつと上る。義朝聞しめされて。心替りか長田。さん候都より。討手のまいりて候に御自害あれと申。義朝聞しめされて。長田か事は兼てよりおもひまふけつる事。情けなし鎌田。たとひ舅と一所になり。我にかはるとも。三

代相恩の主になと最後をはしらせぬそや。如何にえひ長田。刀まいらせよ自害せん。承ると申て。刀に鎌田か首をそへ。湯殿の内へまいらせ上る。義朝鎌田か首を。御膝のうへにかきのせ給ひて。あゝらはかなの只今のうらみ事や。我より先に立けるそや。死出の山にて待よへひ三途の川てをひつかん。腰の刀をするりとぬき。弓手の脇にかはとたて。妻手へきりゝと引廻し。返す刃を取なをし。心もとにさしたてゝ。袴の着きはへをしをろし。臓をつかんてくり出し。四方の壁になけつけ。ゆふねにて御手をすゝき西にむかつて手を合せ。何とて義朝しなれぬそ。さる事ありや父爲義。天台山月輪の御坊に。ふかく忍ひておはせしをたはかり出し申て。御首をきり申す其因果忽むくふて。死なれぬ事は口惜し。如何にへひ長田。急き參りて頸をとれ。長田さふなくまいりへす。長刀にてさしまいらせ。をつ〳〵御首たまはり。知多の郡てうたれ給ふ唯人間の。因果はめくるにはやき物てあり（言）角て長田は。義朝の御首をも安〳〵と給はりぬ。今は金王か首をゝそしと待る。扨も金王は。内海の沖に有けるか。れいたらすむなさはき頻り成は。何支か君にましますらんと。心もとなく存すれは舟をよせよと下知をする。力及はぬ次第とて。さふなふ舟をさしよする。金王ゆらりととんてをり。暇申て面々とて。五十町の所成をもみにもふてそ走りける。爰に鎌田かめしつかひし下女一人走り向ひ。なふ御身はいつくへ行てましますそ。鎌田殿は夕部うたれ給ひぬ。君は只今。たかみの湯殿にて御腹めされさふらひぬ。今は御身の頸を遲しと待させ給ふに。いつくへも一先しのはせ玉へと申す。金王聞あへす。泪をはら〳〵となかし。さはかり某か申つる事を御承引なくして。うたれさせ玉ひて候や。扨は鎌田は。御心替りをは申さゝりけるや。

あふ尤かふこそ有へけれ。定而長田は。我舘にはよもあらし。君の御最後所。田上の湯にそ有らん。某かうたれん事を一定と心得。うちとけたらん所へつゝと行。長田か首を打落し。御敎養に報せんと。心の内に存すれは田上の心かけてゆらり〳〵あかりけり。長田是を見て。すはや金王か。内海にて討もらされ。是まてきたつたるは。あますなもらすなとて。眞中に取籠る。金王是を見て。面白し長田。そなたは猛勢なり。我は只一人。まいりさふと云儘に大勢の中へわつて入。ざん〳〵に切たりけり。去間長田。叶ふへきやうあらされは。我舘をさひて。もみにもふて北にけり。金王是を見て。いつくまてといふ儘に長田を目にかけて走けり。去間長田。我舘へつゝといり。堀の橋をひゝて四方の城戸をちやうとうつ。金王是を見て。あら物〳〵しけらのたけりといふまゝに。三重の堀をは。ひらり〳〵とはねこして。八尺築地の有けるに。手をかくるこそをそかりけれかけすゆらりとはねこえ。中門めんらう遠侍ひ。長田ををふて走りしは。あら鷹か。とやをくゝつて。雉子ををふかことくなり。去間長田。妻戸よりもつつとぬけ。行方しらす成にけり。金王是を見て。力をよはぬ次第とて。又取てかへして。大勢の中へわつて入。西東。北南くもてかくなは十文字。八はなかたといふ物に。散〳〵にきつたりけり。手元にすゝむ兵を五十三騎きりふせ。大勢手を負せ東西へはつとをつちらしうみの渡りをさふなくし都をさひて上りける。金王か心中をは。貴賤上下をしなへ。かんせぬ人はなかりけり。

元和第四暦戊午孟秋吉日

いふき

（大頭左兵衛本）

ことハ義朝に三なむ。わらはなはもむじゆど。元服めされそのゝち。兵衛佐頼朝いまだにやくにておはせしが。たいけむ門の夜いくさにかけまけさせ給ひ。東國さして落給ふ。西坂本までは父の御供めされしが。くらさはくらし雪はふる。さがりまつのあたりより。御父義朝におひおくれさせ給ひ。夜のぼの〳〵とあくるまで。ふゞきにふかれてみちもなき。雪の山にそまよはれける。御年は十二さい。いつしかみやこにおはせし時は。こし車まれにも馬にめすをたに。世にもふしきにおぼせしにかちはだしなる雪のみち。これかはじめの事なれはさこそ。物うくおはすらん。うぶぎぬと申よろいをば。小原のさとにあつけをき。ひけきりの御はかせを。杖についてそおちられける。されともゆみやのめいしやうとて。かゝるふゞきの物うきに。ひげ切ばかり。すてもせて命とともにもたれたり。すでに其夜も明ければ。今はおひてやかゝるらん。行衛もしらぬ雑兵の。そのてにかゝり中〳〵に。源氏のなをくたさむよりも。きよき自害をせむとて。雪の上に。柴おりしき。御はだのまほりより。法花經一くわむとりいだし。心しつかにあそはして。おひてかゝらはじむじやうに。きよきじかいと。おぼしめしはらくいきをつぎ給ふことハかゝりける所に。みのかさきたるおとこ。二人つれてとをり

しを。頼朝此よし御覽して。此ものともをたのみ。いづくへもひとまづ。おちはやなむとおぼしめし。なふいかにたび人と。御ことばをかけ給ふ。何事にやと申て。御そばちかくまいりければ（下クトキ）頼朝此よし御覽して。われは人目をつゝむもの。しかるべくは御ほうしに。たすけてたべとの給へは。庄司此よし承り（上ヲシ）これはまぢかき北あふみ。いふきのすそに。住居するくさのゝ。庄司とはわか事なり。子にて候藤九良。きみの御とも仕り。まかり出て候ひしが。たいけむ門の夜いくさに。みかたかけまけ給ひて。ゆきかたしらすと承ればそのゆくゑをもきかむため。片田のへむにありつるか。みやこへのぼり候そや。かゝるさしあひなかりせば。やすきほどの事なれども。人をたすけまいらせて。わか子はなにと。なるへきとすけなくそこをとをりけり。頼朝此よし御らむじて。さてはうむめいつきぬるや。しはしとゝまりねかはくは。しがいをなりともかくしてゆけ。腹をきるとの給ひて。おしはだぬがせ給へば。しやうじ心よはくして。御刀にすかりつき。年の程を見申せは。またうらわかき。みどり子の。まつも久しきすゑまても。けにたのもしき年のほと。わが子もいきてあるならは此きみにいかほど年まさむ。このきみ御しかひましまさは。ちゝはゝつたえきこしめし。さこそしやうしを。うとましくきちくのやうにおほすべき。このきみをひとまつ。おとさはやとおもひ。みのにおしまきたてまつり。十もむしにゆひからげ。とものに男にかきおほせ。上にふるみのうちかけて。都へは上らすし。かた田をさして。下しはなさけ。いちとぞきこえける（上ヲシ）いく程なくてあとよりも。よかはぼうしの大將に。おほやのちうきさきとして。五十余人たてをつき。あやしゝや旅人よとまれ〳〵とおつかくる。しやうじ荷も

ちをさきにたて。わかみはあとにふみとまつてこれはたしよよりきたらす。御領内の百姓。小原のさとにすまゐする。二郎太夫と申もの。ぐわむざむのくわしのためにところをもたせてさかもとへ。まいるものにて候也。落人は此さきへ。そのかすあまたおとをりあるとうしておはしたまへやと雪ふみのけてやりすこす（コトハ）かくて義朝はかた田より御ふねにめされ。むかひの地へときこえければ。ちから及ばすおひてのものともみなさかもとにかへる。そのゝちしつかにあゆみ。かた田へ入まいらせ。しる人をたのみ一ようのふねにさほゝさし。あさづまのはまにあがり。さのみみのにはいかにとして。御みをつゝみ申さむと（上ザシ）それより御てをかたにかけくさのゝさとに。入申。わか宿所にていたはりて。あらたまの月を。おくりしはめてたかりけるしたひかな（上ヲシ）ある時しやうじ申けるは。さもあれ御みは。義朝の御内にては。名もなきものにて御座候ぞ。御名字を御なのり候へ。頼朝きこしめされて。義朝の御内にては。名もなきものにて候と。ふかくつゝませ給ふ。庄司承り。それはいかやうの人にても御座あれ。是までたすけ申までの事。さてこれよりいづくをさしてゆくへきかたもなし。いかに庄司承れ。御いそぎそ。御心ざしの所までおくりとゝけ申すへし（下クトキ）頼朝きこしめされてさしてゆくへきかたもなし。いづくのさとなりとも。あはれといふ人のあらは。住はてなむとそ仰ける。しやうじ承り。わが子の九郎まだ見えず。おりふしきたり給へば。九郎か生れきたれるか。しうとも子ともおもふへし。これにまし〳〵候へとてふかくいたはりたてまつる（コトハ）かくて日かずをふるほどに。國内つうげの事なれは。御ちゝ義朝は尾張の國のまのうつみにておさたにうたれさせ給ひ。御くびのぼり極門にかゝれるよしをきこしめし（上クトキ）いかに庄司承れ。

我をはたれとかおもふらん。義朝に三なむ。わらはなはもむじゆご。げむぶくして頼朝なり。さりともとおもひし。ちゝはうたれ給ひぬ。いまはいのちいきたりともたれかあはれととふべきぞ。都へのぼりいまいちど。ちゝの御くび一目見。もしもいのちのながらへは さまをもかへて。ひたすらになき人々を。とふらふべし。いとま申てさらはとて。たち出させ給へは。しやうじをはじめ女房も。御たもとにすかりつき。さてはわが子の九郎めが。しゆくむにてましますや。わか子にこそはなれむめ。きみさへはなれまいらせて。われらはなにと。なるへきとたもとにすかりなきゐたり。頼朝此よし聞しめし。げに〳〵申もことわりなり。ひげ切をとめをく。これにをきてはあしかりなむ。みのゝ國。大はかのちやうしやかもとへおくりつゝ。いかならむ世までも。うしなはてをけと申へし。これにかたなひとつあり。八幡とのゝ。御かたな名を岩きりと申なり。うきよの中のかたみに。しやうし殿にとらするぞ。ふしきのよにも出たらは。此かたなをしるべにて。たつねきたり給へやと。わかみは脇指ばかりにて。あみかさにやつれはて。都へのぼり。給ひける心さしこそあはれなれ 去程に六原殿には。人々にけじやうおこなはせ給ふ。彌平兵衛むねきよには。みのの國たるゐを給りまかり下候ひしが。いまし川原をとをる時。頼朝にまいりあひ。あみがさの内。人にしのばせ給ふ躰。あやしくおもひ申とて。かさ引おとして見申せは。頼朝にておはします。天のあたふる所とて。やかていけどり奉り。みのゝ國へは下らずし。いそぎ都へのぼり。六原にて此よしかくと申ければ。清盛きこしめされて。さればこそとよこゝざうよ。おむは天のなす所。くわほうはくわこのしゆくしう。よしともはうたれぬ。悪源太ともな

がははらきりぬ。頼朝はいけとりぬ。今はたれかのこりゐて。平家にてきをなすべきそ。やかて頼朝きるべけれども。こぎやうぶきやうたゞもりの。ふつじおりふしさしあひなり。ぶつじすぎてきるべし。それまては宗清にあづくるそ 宗清頼朝をあつかり申。いくほとならぬしやうがいを。見るこそ中〳〵あはれなれ。あらいたはしや頼朝。いく程ならぬこしやうがいとて。心ましますお僧たちをしやうじ申。ごせのくわうせむくらき闇の。まよひをたのみたてまつり。いまたようちにましませと。ちきやうじやにてましませは。日夜に御きやうおこたらす。あかつきがたのゐかうには。此御きやうのくりきによつて。ちゝあに〳〵さきたつ人。ひとつ。はちすに生れたまへと一心にゐかうし給へは。宗清も女房も。此よしを承り たゞ人の。たからには子にすきたるはましまさず。あれ程なげきの御中に。ねむふつ申きやうをよみ。ゐかうの心ざしをは。十方のかみほとけさこそうれしくおほすらむ。くやしくもまた。宗清が。いけとり參せ候ひて。うき目を見るかなしさよと。ふうふともに。いひかたりふかき。おもひとなりにけり さ夜うちふけてことさら。心ほそげにまします所に。宗清ふうふまいり。しゆをすゝめ申せども。さらに見入給はず。わかき人にてましませば。御心をもなぐさめはやとおもひ。いかに頼朝きこしめされ候へ。まことや承れば。こぎやうぶきやうたゞもりの。ぶつじおりふしさしあひなり。そのほかしざいの人々も。みなくびをつぐと承る。ことさら御みをば。よかはの僧都めいしゆむ。三井のそうじやうゆふはむ。仁和寺のけいうむ。おりしきり申さるゝ御そせうのまへなれは。たとひるざひはなさるゝとも。しざひはさらに候まし。御心やすくおぼしめせと。僞すかし申せば 頼朝

きこしめされあらおろかなりむねきよ。いのちをおしみ頼朝がなけくみにてはなきそとよ。むかしは源平りやうかとて。鳥の二つのはがひ。車のりやうわのことくにて。おとりまさりはなくし。天下のまほりとありつるか。ぜむせいかなる事ありて此時ほろひ。はつるらむ。ちゝあに〳〵さきたつ人。ひとつはちすにむまれむと。此事ならてたしもなし。今夜は此さけのむへきなりおの〳〵もまいり。給へやとなけく。けしきもましまさす

頼朝仰けるやうは。此ほとはくわむげむすさめつる。あまりおもへば心なし。ふへやあると仰ければ。むねきよ承り。かむちくのやうでうを。とりいたしてまいらせあぐる。比は春のなかばなれば。そうでうにねをとつて。じゆむこむらくをあそばす。うきみの上のなけきには。くわひこむらくをあそはす。むねきよも女房も。かむるひおさへがたふして。ひわ一めむこと一ちやうとりいたし。女房にことをおしあづけ。わがみはひわのおゝあはせはちをと。けたかく引けれは女房なみたもろともに。十二のけむをゑりたて。ねのをにてをかけにけり。これふつけうのうつはもの。うさもつらさもうちわすれ。これになぐさみ給ひけり。夜もほの〳〵と明がたに。門をたゝくものあり。人を出してとはすれは。頼朝を今日きるへしと申使なりびはことをとりひそめ。よりともにいたきつき申なくより外の事はなし頼朝おとなしやかに仰けるやうは。さだめてそれがしかくびはおほちをわたさるへし。かみけづりてたび給へ。むねきよも女房も。なこりのためとおもひければ。三十三まひの。くしとはらいをとりいたし。きのふまでは一すちを。ちすぢ百すぢ。千秋万歳ときはひしくろかみを。いつその程にひきかへ。けふはまた六條かはらの。よもきかもとのちりとなさむ事こそか

なしけれと。おつるなみたに。目かくれてくしの。たてとも見えわかす。さてあるへきにてあらされは。ふうふともにわけけつり。ぎやうすひせさせまいらせて。すゝしのひとへ。はだにめさせ。ねりぬきに大くちかさね。うかりけるかなはうなりとてたかてのなはをかけ申。むねきよも女房も。たかてのなはにとりついて。それ人は一しゆのかけ。一がの水をくむ事も。たしやうのきえむと承るか。こむしやうならぬごきえむに。まいりあひ候て。いまさらうき目を見る事よ。ごもちいもあるならば。我〳〵ふうふかくひをめされ。頼朝の御いのちをたすけ。給へやかなしやとりうてひこかれなきければ。げにこゝろなき。かたまてもあはれとはぬ人そなき頼朝ぎやくしゆのために。そとばを三本さざませたまふ。一本はちゝのため。一本はあに〳〵。いま一本はわかためと。上にあじをあそばし中にはきやうのもむ。下にはしいしのゑかうのむねをあそばし。ねむがう日付。みなもとの頼朝とあそばし。宗清をめされ。このへむに駒のひづめもかよはず。車におされぬ所やある。たててまいれ。宗清承つて。三本の卒都婆を給はり。さいしよをたづねありきしに。いづく〳〵と申とも。駒のひづめもかよはず車におされぬ所は。いけどのゝ三ぞう。中じまなりと申し。西八條にもちてゆき。中じまにわたり。三本の卒都婆をたつる。かのいけ殿と申は。こぎやうぶきやうたゝもりのごけにておはします。きよもりの御ためには。御まゝはゝ。じひだい一の人なり。おりふしゑむぎやうして御座ありしが。此よしをごらむじ。たかそとばそととひ給ふ。只今きられさせ給ふへき。頼朝のそとばと申。いくつになるぞととひ給ふ。十三と申。めしよせて御覽じて。人してかゝせ給ひけるか。いやじひつなりと申。年の程よりはるか

に手はおとなしくありけるぞ。ようもむともおほけれとも。ことにしゆせうなるめいもむなり。なに〳〵。がしゆむしゆかうらひ。しゆくしゆしよだいぜむごむ。一ぶむふるかしむ。せよ十方しゆじやう。此もむの心は。われむしこうよりこのかた。つみあつむるもろ〳〵の大ぜむごむ。いちふむもわかみにとゝめず。十方のしゆじやうに。ほとこしあたふ。これひけ經のもむ也。このことはりをきく時は。たすけていかゞあるべき。車やりだせうしかい。いそきともせよ宗清と。とる物もとりあへず。六條川原に出させ給ふ。去間頼朝をは。おつたてのくわむぐむ。七八十人か中にして。源五うまのぜうなはとり也。かいしやく人はなむはせのを。五條の橋より六條がはらへひきいだす。頼朝はやくしきかはに御なをりありけれは。かいしやく人はまいり。西の方へおしむけ。御念佛とすゝむれは。手を合たからかに。かうしやう念佛申さるゝ。いけ殿の御車を。はむぢやう計やりよするに。御念佛の其こゑが。車の内へ聞えければ。いけ殿きこしめされ。尼がゆくとおもはゝ。やかてくびをきらふず。人にしらせで此車を。はやめよやれむねきよ。むちをうてや牛飼よ。只一所におとるは。わさと頼朝きらせむとや。頼朝。きらする物ならは。尼は御所へはかへるまじい。やかてみをなけしなふそ。いかにやとの宗清。いたきおろしてたび給へたゞ一とびにはしらふに。物見の簾をざつと打上。車のしゝへ只今。ころびおちむとし給ふ。けむみにたつた五藤内。車のとふを見付。いかさま四かの大寺より。大僧正かそうづの。めしうとこはむ車ぞ。とくきれやつとゆびをさす。太刀取うしろにまはつて。なけかけんとせし時。八幡のちかひかや。かはらの石にふみくじけ。うつぶしにかつはとまろひ。たちをかはらへなげかけ。おき

あがつて太刀を。とらむ〳〵とするまに。車をさつとやりよせ。いまたとゝめもせさりしに。いけ殿ころびおち給ひ。頼朝をひつたて。おなじ車に打のせ。もとめた殿かくびかな。今はよもきられじ。心やすくおもへとてはら〳〵となき給ふ。頼朝もいけ殿の。御たもとにすがり付。はら〳〵となき給ふ。物によく〳〵たとふれば。つみふかき罪人。くしやう人の手にわたり。むつけむ大じやうの。そこにおとさるへかりしを。六道のうけのちさうの。しやくでうを。からりとうちふつてかゝんかひさんまいとよばわりかけすくひあげ。たすけむとし給ふも。これ程そありつらん。八條殿にかへらるゝ。けむみぶぎやうもきりても。六原殿にかへつて。清盛にかくと申ければ。とくきらぬこそふかくよと御こうくわひは計なしやがてしめの判官もり國をめされ。なむぢ八條殿にまいり。あれにて申べき事は。力をよばす頼朝をば。いけ殿に參らせをき候ひぬ。けむじにつたはるてうほうに。鎧にはかむだかうぶぎぬ。七りう八りうとてあり。太刀にはひけ切とて候を。今度義朝たいけむ門を出し時。ちやくし悪源太にもゆづらず。二男ともながにもゆつらず。三男頼朝にゆつりぬるよしきいて候。おそれながらいけ殿の御こうじうにより。尋出て給はらば。平家のたからたるへしと。御使をこそ立られけれ。池殿きこしめされて。頼朝に此由かくと仰けれは。頼朝きこしめされ。あらなにともなの事共や。命をおしみいかにとして。家につたはる重寶を。かたきの手にわたすへきと。おほしめされける間。とかく物をも。の給はすおもひ入てそおはしける。池殿仰ける様は。あらおろかなり頼朝。命だにあるならば。寶は又ももとめてもつへし。たゞみづからに御まかせ候て。ありのまゝに仰られよ。頼朝げにもと思

召。うぶきぬをば山しなのじやう心かもと。太刀をはみのゝ國大はかの長者が本に。あつけをき候ぬと。ありのまゝに仰ければ。池殿聞しめされて。六原にて此由かくと仰ければ。やがて六原より使者をたて。めし出させ給ふ。かくて二つの寶平家に納らるへきにてありしか共。小松殿の仰には。是はよからぬ御諚かな。源氏にもちてこそ。寶とは成べけれ。平家の方に持ならは。しやうげをはなすとも。寶と成事候まし。只〳〵返し給へと。本のけむじへかへされたり。そのぎにて有ならば。頼朝をばいかなる遠嶋へもなかしをけとの御諚也。一番の度には。いせの國ござの嶋ときこゆる。池殿きこしめされて。御座の嶋とやらんは。いせへいじかおゝくして。叶まじとそ仰ける。二番のたびには。いづの國北條ひるが小嶋。是も心元なくし。御みまぢかき侍に。くわうげつの源五。もりやすかちやくし。盛長と申て。十六歳に罷成を。まぢかき様にめされ（上サシ）いかに盛長よ。頼朝か供をして。（下）いつの國に下り。朝夕みやつき申へし。いさゝかの事もあるならば。いそぎあまにしらせよ。俄の事にてあるならは。盛長さきに覆をきれ。（下フシ）跡をはとふて。えさすへし。いかに頼朝生すとも。尼をはおやとおもふへし。御みを子ともおもはうぞ。なむやげむじの。うぢ神。正八幡大ほさつ。頼朝の御領（下）をあむおむに守り給へやと。うしろすかたを。おかみ給ふ。頼朝も立かへり。ふしおかませ給ひけり。生れ合たる。親子そと御悦は限なし（下カタツ）去程に頼朝。盛長をともなひ。いづの國に下つて。北條ひるが小嶋にて。廿一年の。（下）春秋を。おくらせ給ひけるとかや。終に源氏一圓の。御代となり給ひて。せめし所はどこ〳〵ぞ。一谷ひよとりごえ。さぬきに八しま。なかとにたむの浦。はやともかおきまでも三年三月にせめなびけ。天下

をおさめ給ふ事。八幡大。ほさつの。御ちかひとぞ聞えける

伏見常槃

（毛利家本）

抑常葉御前の先祖を委く尋るに。父は梅津の源左衞門。母は桂の宰相とて院につかはれ奉る。一年天下に母（ママ）くらへの有し時。眉目能女を千人揃へ。千人か中よりも三人撰み出さるゝ。一人はあやめのまへ。一人はまこものまへ。今一人はとつこのまへ。彼あやめまこもと申は。みめいつくしくかさりたて常に衣裳をめしかゆる。とつこのまへと申は。只いつもの姿にて。更にけしやうはなけれ共。世に勝れたる女なれは。さらは常葉と付よとて。とつこのまへを引替て常葉の前とそ召れける。其比義朝天下の守護とましませは。肩を双る人もなし。折〳〵参内有て。奏し申されけるやうは。弓矢を取ての面目に。哀れ常葉をたまはらてと。時々のそみ申されけれとも。御門御用ひなかりしに。有時義朝。紫震殿（ママ）のしもくちにて變化の者をきりとむる。御門御感におほしめし。官も司も何ならす。本より望みの事なれは。さらは常葉をとらせんとて。忝も帝は。常葉のまへの袂に御手をかけさせ給ひ。二三きたはしたんつの石。雨落のきはにて給りけり。其比常葉は十七歳。義朝は三十一。かりそめふりになれそめて。今三人の。子をまふけかゝるおもひにふし沈む言いつくへもひとまつおちゆかはやとおほしめすか。まてしはし我心。四條の防門（ママ）堀川の。乳母か宿所にをき申す母こはさていかゝせ

ん。又三人の若共か齢ひを物にたとふれは。出る日つほむ花なれや。如何に放逸邪慳の。武士と申共。八しゆ（ママ）に餘りおはします母こに目をはよもかけし。其義ならは若共を。しのはせはやとおほしめし。兄今若殿には。はたにはねりぬきひつちかへ。あき地白の直垂めす。次乙若の裝束。紅の二つきぬ。ひきまはしの帶はかり。御身は十二一重に。紅のもはかまの。そはたからにさしはさみ。二歳に成し牛若殿を。御懐にいたきつゝ。とうのうらなしさしはひて。御室の御所を御出あり。五條あたりの黒土を。はしめてふむそ（ママ）哀れなる。比はいつその比そとよ。永暦元年正月。十七日の夜の事なり。清水参りと申て。諸人數をもしらさりし。上下の道者に打紛れ。清水におまいりあり。左り隔子に通夜申し。十のれんけをもみ合せ八分のかふへを地に付て。抑御山は。田村丸の御建立。大同二年にたてられし。山より瀧か落れは。水上清き御寺とて。扨こそ額にも清水寺とはうたれたれ。自か十七より。今迄参りの利生には。三人の若共か。行衞守りてたひ給へ。南無大悲觀世音と。鰐口ちやうとうちならし。泪にむせひ玉ひけり。誠に御本尊も御納受やまし〳〵けん。翠簾も几帳もさゝめひて。ほうしやもゆるくかとおもへはいとゝ殊勝なり詞天明けれは常葉御前。御堂を下向まし〳〵て。とゝろきの御坊に移らせ給ふ。聖り涙をなかし。それきうちやうは松に離れて色見えす。三界の女人かしこしといへと。一人のつまにはなれ便りなしと。能こそ是は傳へたれ。いたはしや義朝の。此世に御座の御時は。さこそゆゝしくおはせしに。かちはたしなる御有さま見るも中〳〵いたはしゝ。是にもしはしとゝめ申度候へ共。六波羅近き所なれは。いつくへもふかく落行給へと申さるゝ。常葉聞しめされて。さん侍ふ自も。大和の方に

知人の侍へは。おちふするにてさふらふ。いとま申てさらはとて。とゝろきの御坊を御出あり。透る所はとこ〳〵そ。三十三間今能野。一二の橋法性寺明れは正月今日ははや。十八日の夏なるに。宇治は春雨。降けれと小播の山は雪そふる。いつ君か邂逅に。あゆみもならはせ給ねと。降白雪を御手にて。うちはらひ〳〵。足に任せて。常葉御前迷はせ給ひけるとかや。小幡の山に限らすし。いつくも山の。ならひにて峯高けれは谷深し。漸々峯におあかりあり。人はなきかと問ひ給へは。谷に山ひこ答へけり。又谷におくたりあり仙人や有ととひ玉へは。嶺に木玉そひゝきける。峯よ谷よとし給へは。小幡の山に。日は暮ぬ哀れ成ける次第かな去間常葉御前は。とある松の木陰に立よらせ給ひ。降白雪をいとはれしか。むかひの谷を見給へは。灯かほの〳〵と見ゆる。人すむ處なれはこそ。火は見えて有らめと。はる〳〵下りて見給へは賤か庵りそさふらひける。折戸をほと〳〵と音つれ。是は都の者成か。此雪道にふみまよひ。これまて來りて侍ふそ。一夜の宿をかし玉へとさも高聲にの玉へは。内よりもあるしの祖母か立出。織戸をほそめにあけ。常葉を見奉り。急き立歸り。祖父にむかつて云やうは。なふ如何に祖父。門の邊りに女のこゑにて宿かせと申程に。立出て見てさふらへは。あたりほとりもかゝやくほとの女房の。おさなき者をあまたつれ。宿かせと申は。此山に住なる。狐狼野干のもの共か。祖父やうはを食物にせんとて來りたるか。さらすはけふは。雪けしからすふりつみたれは。若雪女といふ物か荒おそろしやおほち。祖父聞て。いや〳〵夫は狐狼野干にて有まし。おほちはあら〳〵すいして候か。義朝方の落人にてあらふす。祖母御前はよもしらし。いて〳〵語てきかせ申さん。二年主上上皇の。位あ

らそひの御時。六條の判官爲義。上皇方の味方を申し。既に合戰にかけまけ天台山月輪の御坊に。ふかく忍ひておはせしを。眼前の御子。義朝討手をたまはつて。天台山よりさかし出し七條朱赤こんけたう。おかとゝ申す處にて。御頸をきり給ふ其因果忽むくふて。待堅門の夜軍に。かけまけぬるは道理。是によつて六原より。義朝方の落人をは。岩をもはり。胎内までも。搜といふ事なれは。若も義朝方の落人にてか有らんに假初に宿をまいらせて。祖父は何と成へきそ。其女房に宿かさすは。今夜一夜の恨み成へしうらみはすゑもとほるまし ひ。こなたへこよや祖母こせとて。柴の織戸をはたとたて小幡の里の。叉なれは皆くちなしとをともせすあらいたはしや常繁御前。先へと行は道見えす。跡へ歸るも山路なり。あたりに人のすまはこそかなたこなたとかりもせめ。扨有へきにてあらされは祖父か屋陰に立寄せ給ひ。あたりの雪をはらひのけ。御小袖をぬひてさつとしき若君達をすへならへ人の親の。子をおもふ道程に。哀れなる事よもあらし。一めかさをそはたてゝ風吹かたの。かきとなし寒風をふせき給ひけり夜半計に常葉御前。諸法の有爲轉變の理りをおほしめしつゝけ。如何に若共物をきけ。されは法花一乘の功力はたつとし。一の巻の方便品に。十方佛土中。唯有一乘法。無二亦無三除佛方便說。此文の心は。十方佛土の中には。唯一乘の法のみ有て。二もなくまた三もなし。佛の方便の說をのそく。除くといつは一一則妙なり。されは妙とかける文字は。扁には女作りには少しとかけり此理りを聞時は只若共と自は。妙の一字にあらすや。さあらん時は十方の諸佛も。なとか憐みなかるへきうらめしの浮世やな。南無阿彌陀佛みたふつと。十返唱へ給ひつゝ。又若達に。うちかゝり泣涕こかれ

玉ひけり（言）内にて祖父念佛のこゑを承り。やあ如何に祖母こせ。門のほりに女の聲にて念佛の聞ふるは。宵に宿かり玉ひし上臈の。いまた此あたりに御座有けなそ。人間にてましませはこそかゝる尊き事をは仰候へ。たとへは人をそこなへる。狐狼野干のたくひなりとも。正しく女と變するうへ。たかきもひきゝも女は同し事にてはなきか。あら情なのうはこせやとしかる。うは此由を聞よりも。何をの玉ふそ祖父。爰に嚮への侍ふそ。谷の枯木は高けれと。峯の小松に陰さゝす。宵に祖父この。若義朝方の落人にてか有らんと。堅くせいふんし給ひし。其一言のおそろしさに扨こそこなたへとは申さね。おほちの義なしとのたまはゝうはもいやにてありましひ。いさ〳〵こなたへと申さんと。夫婦立出門をひらき。なふあれは宵の上臈か。御身一人にてもなく。幼き人をあまたつれ。いつくよりいつかたへ御透り有そと申せは（クトキ）常葉聞しめしうち恨みたる御聲にて。されはこそ仙人よ（そし）風にはもろき露の身の。きえぬは人の命にていまた存へて侍ふそや（言）いたはしの御事やとて。今若殿をは祖父かたき。乙若殿をはうはかもり。常葉を出居へしやうし申し。あたゝめ申にしたかつてすそのつらゝもとくる。良有て祖父。あひの障子のひまよりも常葉を見奉り。やあ如何に祖母御前。出居にまします上臈は。只常の人にては御座なけなそ。夫を如何にと申に。昔眉目の能人は。漢の李夫人。楊貴妃衣通姫。小野の小町の若さかり。毘沙門の妹に。吉祥天女とやらんは。もろこしてんの佛にて。我等たうの衆生等有とは聞て目には見す。當時みめの能人は。菖蒲の前眞薦の前。義朝の御臺處の。雲の上の常葉御前と申とも是にはいかてまさるへき。うはのの給ふことく變化の者か。さらすは祖父かしやすいのことく。義朝方の落人か。あ

まり不審に候に。一首の哥をかけまいらせ。御心の内をもうけたまはらはやなふ。祖母此よしを聞よりも。世にありかほなり祖父。夫はわらはか若さかり。都に有し時にこそ。月見花見なんとゝて。哥連歌をもたしなみ侍へ。三十六年の間。此伏見の里に住なれ。うはゝ哥道をはつたと忘れはてゝ侍ふそ。祖父昔をわすれすはとも かくもと申す。（イロ）祖父斜によろこふて。あひのしやうしをほと〳〵と音つれ。一首はかふそ聞えける　小はた山をろす嵐のはけしさにやとりかねたる夜半の月かな（言）常葉聞し召れて。あら面白や。姿こそしまの夷に似たれとも。心は花の都なりけれ（イロ）わらはもこしをれうた成共。よまはやとおほしめし返哥に角そあそはしたる　小幡山。すそのゝ嵐けはしくて。臥見ときけと。ねられさりけり（言）祖父や祖母は承り。されはこそうたかふ處もなき。義朝方の落人なれ。てゐは人目のしけゝれは（ツメ）やあこなたへ請し申せとて。持佛堂をこしらへ。常葉をしやうし奉り。哥をよみ詩を作り。けふは雪かふり候そ今日もけはしく候そ。天晴て上臈の。おほしめされん處まて。祖父やうはか送り申さんけふも〳〵ととゝむれは。あるしの情にほたされて。ふし見の里に常盤御前は。新玉の年をこし衣更著に成まておはします（言）彼祖父のあたりに。人にめしつかはるゝ下女共の有けるか。一つ處にさしあつまつて申けるは。むかひの谷のおほちこの本にこそ。みめいつくしき上臈の。正月の中比より。御宿を召れ。いまた歸りかねてましますよしをうけたまはれとも。我も人も人にかゝりまいらせ。隙なき身にて侍へは。參りておかむ事もなし。今日は天よく日もよく侍らへは。主〳〵にいとまを申し。まいりておかみ申さふす。さりなからたゝまいりては曲もなきに。何をかなもちてまいらふ。比は二月一日二日。時にし

たかふ興なれはとて。めん〳〵に濁酒をもちつれ。都合女は五人。祖父か本へさつとかゝる。祖父やうはゝ御覽して。やさしくもわこせたちは。上萬を拜み中に來りたるか。夫へまいりておかみ申せ。承ると申て。おほちかてゐへさつとあかり。酒の入たる物ともを。とう〳〵とならへをき。常葉の御かほを。つつくとまほりとれてそゐたりける。常葉御覽して。あらおそろしとまほるや。あのやうに人にめしつかはるゝけすは。必口のさたうなるに。みつから僞りをかたらはやとおほしめし。如何にや女房達。わらは慰めんために。きたり玉へる嬉しきに。面目なくは侍へとも。みつからか古郷をかたつてきかせ申さん。本國は大和の國。ふる里は宇多の郡の山里の者なり。わらは十七の春の比。親にしかられまいらせ。心ならすに都に上り。五條あたりに小宿をとり。明し暮すとせしほとに。心にまかせぬ女のならひ。三條室町より。やかてとのこをまふけ。是〳〵御覽さふらへ三人の若をまふけて侍ふ。かやうにわりなしとは申せとも。あらたのみなのをつとの心や。一條紫野のあたりに。はしめて妻をかたらひ。三年かよふと申せともみつから更にねたます。夫も思ひ合する事の侍ふ。伊勢物かたりに傳へたり。男は大和の國の者。ならひ河内の國たかやすといふ處に。始てつまをかたらひ。これも三年かよへとも。跡に殘れる古きつまねたむ事こそなかりけれ。をつと是をみて。あゝら不思義や。我ならすよ所へも心のあれはこそ。我をはねたまさるらめとかへつて女をねたみ。有夕くれに此男。女房にいとまをこひ。我は河内へこえさふそ。やかて歸らんさらはとて。太刀をつとり脇はさみ。河内へは行すして。南おもての花苑に。如何にもふかく忍ひゐて。妻女の躰をあひ見るに。荒むさんや此女。是をは夢にもしらすし

て。持佛堂に參り佛前にむかひ。香をもり花をつみ。夜すから琴を。彈そはめうらみなひてそゐたりける。夜半計に此女。白きひさけに水をいれ。胸の間に。をきけれは必湯にそ成にける。捨ては水をかへ。夜すからむねをひやしけり。是は三年か其間。ねたしとおもふ心さし。色にはいたさ。ゝりけるかほむらと成てにえにけり。既に曉の。鐘聞比にも成しかは。くるしけなる息をつき。是より河内の高安へは。龍田越と。申て惡所の有ときく物を。いつの日の何時か。此山にて我つまの。死せんす事のかなしやと。おもひつらねて此女。一首の哥をそ詠しける。風吹はおきつしらなみたつた山。夜半にや君か。獨りこゆらんと。かやうに詠したりけれは。をつと此よし聞よりも。賢臣次君につかへす。貞女兩夫に。まみえすと今こそおもひしられたれ。姿かゝりの。まさる女は有とても。心のまさる女房の。有つへしとは覺へすとて。河内かよひを。おもひきり古きつまにそ契りける。是をたそと。尋るにさいこ中將成とかやか樣の事におもひなそらへ。自更にねたまぬを。あたりなる友たち女かあつまり。我を訪ひいふやうは。いたはしやおかたはしろしめされぬか。一條の上萬を。此屋の內へしやうし申し。御身をは大和の宇多へをくらんとの。ふかくたくみにて侍ふそ。御身にそはん事共も。今幾程か有へきと。袂にすかり泣ほとに。ねたまし物とはおもへとも其時みつから腹かたち。うらめしや天にすまは比翼の鳥。地にあらは連理のえた。神ならはむすふの神。佛ならは愛染王。五道輪廻のあなたなる。釋迦大悲の弓手にさふらふ涅槃の岸はかはるとも。我等かいもせはかはらしと。ふかく賴をかけつるに。をつとの心と。川の瀨は一夜にかはると。傳へしも今こそおもひしられたれ。たとへは自にこそ緣つきはてゝ

送る共。あの三人の若共を。先にたてゝ出るならは。子供にめかくれ。よひかへさぬ事よもあらしと。夫に頼みをかけ。そらに出て侍へは。情もしらぬ子共の親にてよひかへす事更になし。しかも是は新玉月にて。一度出つるをつとの本へ。二度歸らんはつかしさに。又おやをたのみ。大和の宇多へ下り侍ふか。此雪道にふみまよひ。此ほと是に有つるそ。やあわこせたちも若けれは。少〳〵ねたき事有とも。をつとの本を楚忽に出て後悔。すなとの玉ひて。あまりの事の。かなしさに忍ひ〳〵のなみたなり。祖父承り。上萬の御行衛を。唯今こそねんころにうけたまはつて候へ。扨も五人の女共は。やさしくも御酒をは持て參りたるか。肴かなくて曲もなきに。うたをもうたひ舞をもまひ。時の興を申て。上萬をなくさめ申せ。女共承り。都の人こそ心か花や月に似て。うたをもまひをもまひ玉へ。わらはともと申は。子に臥刁にをき。きんう東にかゝやけは。長夜のねふりはやさめ。やもめ鴉のうかれこゑかふそとなひて告渡る。とりもろともに閨ををき。朝夕の世路をいとなみ。御主の御意にちかはしと。夫をのみこそたしなみ侍へ。うたをもまひをもしらぬなり。さりなからわらはともか。えたる事の侍ふ。さつきになれは田へをり。たふとをとこにはやされ。てに早苗をつとつて。田うたといふ事を。すこしつゝ覺へて侍ふか。夫を成共うたはふすかなふ。祖父聞て。あふさる事あり牛をは桃林の野にはなし。馬を花山のやうかへす。鴨寒して水にいる。鷄さむふして木に上る。諸法實相と。聞時は峯の嵐も法のこゑ。夫をなりとも一つゝ申せ〳〵と申しけり扨も五人の女共は。同し國の者にて同し田うたをうたふへきかと思ひてあれは。思ひの外に引かへて國の者なり。一人は出雲。一人は幡磨。一人は丹後一人は

和泉。今一人は遠江の國の者なり。祖父この仰にて侍ふに。おぬしうたへ。いやそなたからうたひはしめてこそ。こなたにもうたふへけれ。夫うたへ誰うたへとはたひしとあらそふ。其中に取ても出雲の國の女房。少し歳おとなしく見ゆるか。いや〳〵問答は無益。年寄したいに自うたひはしめて。其次〳〵をうたはせんと。いふよりはやくつんとたち時ならぬ田うたをはつたとあけてうたふたり。田うへよや。たうへよ五月男女。皐月の濃をはやむるはかんのうの鳥。時鳥山からこから四十雀。此鳥たにもさわたれは皐月の濃はさかりなり〳〵しとろもとろに。うたひなし。舞を一手舞おさめ一せいをこそあけにけれ。目出度や。有かたや天照大神。熊野の權現。鹿嶋香取諏方熱田住吉賀茂の下上。祇園精舍に梅の宮八幡大菩薩惣して神の御數は。九万八千七社とそ聞へける。たかまかはらに。神そましまし神の父神の母。伊弉諾。伊弉冊の御事なり童か古郷出雲の國にたち給ふ。素盞鳥尊。されは神の御ために惣政所此度。あゆみをはこふ輩。誰か。利生をうけさらん此利生をうけ取て。唯今の御座敷の。上萬にまいらせんあらめてたやとうたふたり。其次を見てあれは幡磨の國の女房。つんと立てうたふた。はりまなる。高砂や〳〵尾上の松はたかゝらて下にすむは何やらん。富と幸と。さつとうけ取て。唯今の上萬に是を添てまいらせんあらめてたやと申て。盃ををつ取てやかておしやくにまいりけり。其次を見てあれは丹後の國の女房。かふこそうたふたれ。丹後の國には。久しき人を尋るに。浦嶋の明神七百歳をたもち給ふ。ほつかうなりあひ。あまのはしたて久世戸の文殊の。智惠と才覺を。さつとうけとつて。只今の上萬の若君様に參らせんあらめてたやとうたふたり。其次を見てあれは和泉の國の女房。年

を申せは。十八歳にまかりたる。顔に紅葉を散して。うたひかねつゝうちうつふひてゐたりけり。うたふたる女共。此よしを見るよりも。わこせは人に。うたをうたはせて。我は何しに。うたふましきと申そやあうたへ〳〵と云儘に袂を取てひつたつる。夫まてもさふらはす。うたはんといふまゝに居たる處をつんとたつて。長柄の銚子を。きつとかさひて。柄酌取てうちかたけ。座敷を二三度。まはりさふらひてはつたとあけてうたふた。目出度やなわらはか古郷。和泉の國の者なれは。其名によそへていつみかわひて侍ふそ。殘りの女共。ひやうしをうちそろへ。やこせわこせ。そこつなる事な申しそ。いつくのほとにわひたるなふ爰のほとにわひてさふ。長柄の銚子。銀の柄酌にて酌とも。取ともよも盡しかゝる目出度いつみをは。誰にかまいらせん。たれにか參らせんなふそよまことわすれたり。唯今の御座敷の。上萬にまいらせんあら目出度やとうたふたり。其次を見てあれは遠江の國なる濱名の橋のつめの者。名所の者なれは。如何におもしろく。うたはんすらんと。心をすまし。目をすます處に。此女か居たる處をつんとたつて。舞をはまはすして下おちさひてはしりいる。うたふたる女共。此由を見るよりも。わこせはうたを。うたはすしいつくをさひて北るそやあいてよ〳〵と責けれはさはなくして此女。きる物のつまを。たか〳〵とさしはさみ。袂よりも。たすき取いてさつとかけふりたる笠のところ〳〵やふれたるを。きつとひつそはめ。つつと出て曲にかゝつてうたふた。遠江なる〳〵はまなのはしの下成は。鯉か鮒か鰆の子か。いかに汝等か。りりうめくとも。かりうめくともあふしやとつてうちあけて。唯今の御座敷の。御肴にまいらせんあらめてたやと申て。曲にかゝつて狂ひけり若君様の繁昌。申は

かりもなかりけり

于時元和第四暦戊午八月吉日

築島

（大頭左兵衛本）

コトハ中昔の事かとよ。其比平家の大將をば。あきのかみ清盛と申奉る。御出家あつて淨戒とこそ申けれ。有時一門連坐のざしきにての給ひけるは。夫人の世にあるしるしには。大願をおこし。或は國をあらためりさむくわうやを名所となし。たみすなをなるまつりことを末代のかたみとする也。天下のしきししきやうを。わがまゝふるまふといへと。平安城のこうりうは淨戒がわざならす。然にかの平の京は。さしやうりうびやつこ。せむしゆしやくどげむむ。しゞん相應の地をしめし。北にはたゝすあむはじ。きぶねのおくよりながれ出る水のゆくゑを白川や。東山に三井寺。しゝの谷のみねつゞき。きもむにひゑい山。傳教大師のさう〳〵たり。南に男山岩清水と名付。和光のかけ曇なくはくわうほうそをしゆごし給ふ。西山のふもとに。松尾と法輪寺。龜山のおくよりながれ出る清瀧を。大井川と名付。末をばかつら川といふ。仁わ寺おむろ廣龍寺。佛法ごしの此京にてたえする事あるまじい。つら〳〵物をあむずるに。なむばの四天王寺とならの京もたえせず。たとへば九條にたらずとも。末代のかたみに色カムル新京をたてゝ見ばやとて遠キフシ國の。さしづまてくわしく見るに。地ぎやうなしコトハさてのみやまむ無念さに。兵庫の浦をわつて見るに。わづか五條の所也。これならて然るべ

き地形もさらにあらされば。所詮これを福原の新京と名付。さと大りをざうしんせん。此京はむじやうするならば。淨戒かなき跡のかたみと人もおもへかし。あきのいつく嶋をも此儀をもつてざうしんす。人々とこそ仰けれ。御一門の人々。此儀尤然へう候とて。皆〳〵兵庫にくだり。里だいりをたて。福原の新京と名付。かくて爰にすませ給ふ。時の御しうと平大納言時忠。すゝみ出て申さるゝ。あはれおなじう候はゝ。あのじうかいをうめさせ。舟のとまりになすならば。本朝にか程の名所あらじと申されたり。淨戒聞しめされて。それこそ何よりもきかまほしき事ざうよ。四國西國の舟どもか着ならば。いよ〳〵ふつきたるべし。すまいたやどはとをあさ。一の谷はあらいそにて。和田のみさきへよるふねの。いそまて着事なき間。江嶋がいそよりふくかせに。はつそむずるとてかなしめは。此京たてても曲もなし。とても一期の大願に。和田のみさきをすぢかひに。たつみむきに海上を。三町ばかりうめさせ其嶋の上に在家をたて。ふねのとまりとなすならばすせむそうのふねつくとも。風の難にはあふまじい。但はるかの深淵を。うめむずる事どもこそ。計かたふは候へども民をはこくむまつり事。龍神も佛神もなとかあはれみなかるへきコトハ五條の大納言國綱のきやうはおはせぬか。御み奉行して嶋つかせられ候へ。國綱のきやう承り。かやうに申せば仰の旨をそむき申に候へども。去ためしの候。せうへいにまさかどは。坂東八ケ國をたいらけ。しもおさの國さうまの郡に京をたて。まつりことをなし給へど。こよみのはかせかなくして。年の堺をしらされば。五節のいはひもさためえず。程なく運命つきはてぬカムル是は末代までも。めてたかるへき御願なれは。はかせをめされ候て。くわしき事の子細をもツメおたつね

あれと申されたり。淨戒聞しめし。去事ありとの給ひて。せいめいがなかれ。あべのやすちかやすのりに三代のけうい。やすうぢと申て。天下のきつけう世をはかるはかせをいそきめされけり。やすうちやかてまいらるゝ。淨戒御覽して。今にはしめぬやすうちかうらかたに不審はよもさうし。和田のみさきをすちかひに。たつみむきに海上を。三町はかりうめさせて其嶋の上に在家をたて。ふねのとまりにせさせむと近日におもひたちぬるか。成就すべきかいかゝさう。うらかたかむがへ吉日とつて。嶋成就のきせいを。めうのかこに任せてたへ。やすうちとこそ仰けれ。やすうち承てもとよりうらは上手。うち聞所の四かむきやく。五きやうさうそくのうおむたう。しゆくやう十二たう。六みやうたいゆうさむじゆつまてわうさうをきはめてかむかふるに。あやまる所はたけれとも。うらにひとつの不審が候嶋をつかせて御覽せよ。一度に此嶋成就せし。事の躰にりをうけ。うらなひ申候はん吉日は三月十八日。吉時はたつの一天と。うらなひ定申。淨戒聞しめし。さらば國綱奉行をせよ。承ると申て。大和山城伊賀伊勢はりまつの國たむは。七ケ國の人夫をもつて。むこ山しうち山の。岩かむせきをくわつ〳〵とひつくつして。和田のみさきへはこはせけり。あしたうめける大物は。みつ塩はやくてさしのくる。岩をかさね人夫をまし。よひにうめける大物は。あかつき引しほはやくして。おきへはつとひいてはいて。うむれはさつとゆりくつす。大もつ大石がすしらすろうきかいさこのたうには。おもはゝたよりもありぬへし。五万人の人夫をもつて十日はかりはうめけれとも。少もしるしの見えさるは龍神なうしうなきやらんさていかゝはせむとの御諚也（コトハ）淨戒大きに御腹をたてさせ給ひ。やすうちをめされ。なむちはなに

とうらなひけるそ。さらに此嶋成就せす。すひれむを入て見せてあれは。うむへき所に石もなく。よしなきかたにちりゐ。さすが底になみもなく。しつかなるよしを申すか。いかやうの子細にかやうにはあるらん。さてのみやまむ無念さよ。いかゝはせむとの御諚なり。やすうち承てさうなく不審をひらきえす。しはらくあつて申けるは（クトキ）けに世にすむならひは大事にて候。うらのまゝ申せはわかみのあた。申さねはてむしのいをくたす。りやうやうちうくわのみたるへし。それ人間にかぎらす。生を請ぬるたぐゐの命に過たるたからはなし。されば佛のいましめに。五百戒の其中に（フシ）せつしやうかいを。第一にたもてとけうけし給へり（コトハ）此大願にとか御座有へし。これはひとへに安氏が。どうとなりなん事こそ何よりもつてくちおしう候へ。それをいかにと申に。人柱を御たてなくしては此嶋成就有まじいと。うらの面に見えて候。ゆゝしきさいどうこれなるべし。一人ならす二人ならす。三拾人の人柱がたつへきなりと申。淨戒聞しめされて。もたせ給へる御扇にてたゝみの面をちやうとうつて。此事ひろうあるべからす。何としても此嶋の。成就すべき事さいはいなれ。だうたうをたつるにも。一旦國のゆるぎ。たみの心をなやませば。ぜむもあくをさきとせり。それ善悪の二法といつは。裏と面のごとし。今此嶋の人柱に。たちなむ者もかならず。くわこのしゆくえむなくしては。いつかにおもふとよもとられし。さりなから人柱を。一度にとらばあらはれて。路次をとゝめてあしかりなむ。時〳〵とれとの御諚にて。いくたこやのゝあたりに。いかにも人をかくしをき（カヽル）京よりも下る人はじめて京へのぼるもの〳〵ちうにてとつてをし籠て〳〵磔ばしたつなと〳〵いましめて（フシ）こくぢやうするそむさんなる。さこそ舊里の戀しさを。

おもひやるこそ哀なれ。とられぬる者ともか。かくあるへしと期したらは。老たる親に暇乞。なこりおしきさいしにも。かたみをとらせて行末の。過はつへき事のはをなとかはかたりをかざらん。たゝかりそめの事なればゝ。けふよあすよと待くらし。風のそよとふかむにも。すはやとおもはん心さし。いつをたのみにまつかね山。むなしく月日ををくら山。ゆくゑをしらねばよもたつねじ。わがみのきえん命より。まつよひむなしきふるさとを。おもひやるこそあはれなれと。籠のとほそにとりついて。かなしみあへる。あり様を見るになみたもせきあへす。一人二人の事ならす。廿余人取ぬれは。いく田こやのゝ邊にこそ。へむげのものが住やらん。みちゆき人を中にてとつてゆき方しらずと風聞すれ。おやをとらるゝものもあり。一人もちたる子をとられ。きえむとかなしむものもあり。但波はりまいかいせ。近國他國の者ともか。いく田のあたりにみち〳〵て。たとひまえんのものかきて。わかちゝわか子をとりたりとも。せめてしかいを見せてたへ。いつ比か此野邊に。旅人うせて候と。たつねかねたるありさまはのがひのうしの。暮ことに子をたつぬるかことく也（コトハ）かくする程にかへにみゝ。岩のものいふ世のならひ。兵庫の浦の人柱にこと〳〵くめされぬるとそきこえける。とられぬるものともの。さいししたしきもの共か。さと内裏にまいり庭上にひれふし。これは但波のわたのもの〳〵これははりまのあかしのもの〳〵これはきむやかたのゝもの〳〵あるひはいかいせ〳〵都のもの（フシ）たすけ給へと聲〳〵に。かなしみあへるありさまはめいとにおもむくさい人の。ゑむまほうわうくしやう人。みやうくわむたちの。しやはにてのつみを。かゝみにうつされこくそつの手にわたる時。六道のうけの地藏尊。たすけ給へと聲〳〵に。

かなしみ給ふもかくやらん。生死無常の憂世の中。げむせもめいどに。たがはすと余所の。たもともぬれぬへし（コトハ）御一門の人々。此よしを御覽じて。たとへば此嶋なくとても（マヽ）。何にふそくの御座あるべき。しづむものこるもをしなへて。一かたならぬしうたむども。未來のごうとならせ給ふべし。今はさてのみ御座あれかしと。各申されたりければ。淨戒聞しめされて。何とざう一門の人々。たま〳〵淨戒かおもひたちぬる大願を。さまたげむとのせむぎざうや。淨戒もさほどのみちにまよぶべきに候はす。夫まかた國のあじやせ王は。ぶつしやう國の將軍にうたれさせ給ふ。かいにち大王は。八万四千のきさきをころす。一しやうたいしは（カミルツメ）りうじゆほさつの命をとる神通第一のもくれむは。ちくぢやうげだうにうたれ給ふ。むじやうの國。のほり給へるしやくそむだにも。だいばだつたに。みあしをうたれ給ふこれおむぞうゑくの法也。いはむや末世の人間におひておや。善悪ふたつのきなくして。成就する事あるべからす國綱のきやうはおはせぬか庭上にひれふすやつばらを。門よりそとへおひ出し。ぢやうをつよくさいてをけ。左右なく人を入るなと内心に腹はたゝねども。あるゝけしきを見せむがため。御ざしきをおたちあり。板あららかにふみならし。此嶋むやくとおぼさむずる。御内とざまの人々。御出仕はかなふまじ。淨戒けうくむせむものは。あめか下におぼえずと。あひのしやうじをはたとたて。簾中ふかく入給へば。御一門の人々。此よしを御覽じて。やくじむてむまがきたつても。此人なだむる事あらじ。三十人の人柱を。中〳〵いそぎそろへよとて。しのび〳〵にとらすれば。廿九人ぞとつたりける。今一人とらんずる。國とも平安ならざれば。みちゆき人もとゝまつて邊路遠路の旅までも。おぢおの

ゝいてとをらす。一人となつて日を送るあつはれ國土の煩やあふさながらたみのなげきなり（コトハ）爰に諸國をめぐる修行者一人。兵庫の浦をとをりけり。とりての人數これを見て。こゝをとをるは修行者の身なれども。人待かぬるおりふし。とをりあふこそさいわいなれ。かれを人數にせむとて。くびにかけたるかさもぎ捨やがて人數とそなしにける。かくて三十人の人柱の。おもひはいづれもおとらねとも。とり分この修行者の。ゆらひをくはしくたづぬるに。たとへば津の國。なには入江のみつまつに。刑P左衞門國はると申せし人にて候が。四十のゐんに入まて子のなき事をかなしみ。くらまのたもむにまいり申子をこそし給ひけれ。國春卅二妻女廿八と申八月に。ゆうなる姫をまふくる。時しも十五夜のくまなき月のさよなかに。生れぬる姫なればとて名月女と名付。かむか本朝にもためしなふこそかしづきけれ（色）其心中はくわう女にてゐむてんたりしさうかは。遠山の月に相同し。霞の內の。山さくら（下サシ）匂（フシ）ひあくまてみにあまり。人にまみゆる其すがた。池のはちすのあさ露にかたふくふぜひもかくやらむ。姫のすかたを見聞人。をよぶもをよばさりけるも。のぞみはおほくありけれと。ませの內の八重ぎくの。つゝめど色のます風情。りやうしやうするかた。あらずして十三のくれまてひとりすむ（コトハ）十四と申花の春。父にも母にもしのび。めのとの女房ばかり引ぐして。あしやの野邊にたちいてちぐさの花をながめてあそぶ。爰にひとつの物語あり。丹波の國をがわの庄のせと申所はおむろの御領なりけり。かの所のあづかせをば。仁和寺の藏人かねうぢとこそ申けれ。其人の子に藤兵衞家包とて。其比十九に成けるが。詩哥管絃の道にちやうじ。情も人にすぐれたりしが。河內の國きむやに所領あるによつて。十日

計きむやにありしが。これもつれ〳〵さのまゝ。あしやの野邊にたち出て鶉がりをぞしたりける。家包何となく姫のすかたを見付。うつろひやすき紫の。色ぞめぬるこそよしなけれ。聲たつほどにおもへども。おもひの外にあらはれてはあしかりなむとおもひ。供の者をばはる〳〵としのばせ。わがみは一村すゝきの候ひけるにやすらひ立て。姫のすがたを心しづかに見奉るに。夕日西にかたふき給へば（色）姫は家ぢにかへらんとて。駒つなぎの一ふさもえ出たるをとりもちて（上野）春はまづ。駒つなぎにそわかばさす。ふるはの色も。見えわかはこそ（コトハ）くさむらにしのふ家かぬが（色）しのふ心のつゝみかねて（下野）春の野に。主も見えざるはなれ駒。くものゐにてもつなきとめはや（コトハ）かやうに詠してあらはれ出る。名月は御覽じて。あらはづかしや此野邊に。人あるべしともしらずして。くちずさみけむかなしやと。おぼしめされける間。おもひの色も青柳の。いとはつかしげなる御ありさまは。露にしほるゝ花かとよ。めのともさそはてふり捨て。鬧げにてかへるさは。嵐にたぐふ落花の。ふけゆく風情もかくやらん。家かぬいとゞ心あこかれて。ふうふ和合の情はわたくしならぬ事。四十のうちのあいしやうも。いづもぢの神のむすびなり。虎ふすのへをふみならし。くさむらにきえむも此みち也。いせ物語けむじにも。かやうの事をこそつたえて候へ。たとへばそつじの儀なりとも。風の便になびけてたべ。御供の人といひ捨て。いそきおつつき候ひて。らうぜきながら御供を。申へきにて候とて。とつて馬にうちのせ申。めのともともに引ぐしてたむばののせにぞかへりける（上クトキ）あらいたはしや二人の人々は。ふるさとしのぶは中〳〵に朝夕隙なくおもへども。めのとはおそれて音信せず。名月はちゝはゝのふけうをいたく憚て。明

ぬ暮ぬとせしほどに三とせになるは程もなし。國春ふうふのなげきは申計もなかりけり。人の子の其中に。あしきわが子をばなをしふひむにおもふならひ。いはむやこれは佛神に。きせい申て唯一人。持たる姫にてあるあひた世にたぐひなふかしづきしを（フシ）ゆき方しらす。うしなひてなげくおもひはいかはかり。いたはしや母どせむは。三年と中秋の霜おもひにきえぞはてにける。刑P（ぎょう）のぜう國春は。一かたならぬ。おもひどもに妻女のかたみをとりあつめ。高野のみねに上りつゝ。おくのゐむにてもとひきり。妻女のかたみをこめをきて。姫がゆくゑをたづねむとて。高野の嶺を。下向して先三熊野にまいらるゝ。三のお山をふしおがみ。たづね給へとゆきかたなし。だうしやふねにびむぜんし。四國にわたりてたづぬれとも。其ゆきがたのあらざれば。又ふねに便船し。はりまのむろにあかりつゝ。都の方のゆかしさに。明ぬくれぬとのぼるとて。兵庫の浦をとをりけるが。とりての人數にゆきあひて。をさへてとられて籠者となるとにもかくにも。國春のうむのきはとぞ聞えける（コトハ）。かくて此嶋は。三月十八日のたつの一天とさだまりけれども。人柱のわづらひによつて。卯月も過て雨月になる。卯月さつきはよき日もなしとて。六月廿三日の午刻にぞさだまりける。とられぬるものどもが。とてもたすかるべき命にてもあらず。はやしてうみにいれられて。みくずとなつてきえばやと思ひ切こそ哀なれ（クトキ）。中にも國春の思ひぞいとゝ哀成。角有べしと期たらば。高野のみねにて露とも霜ともきゆべき物を。憂世にもしもなからへば。姫が行衛やきくとおもひ。かゝる修行におもひたつて今更うき目を見る事よ。（フシ）かほとにうすき緣ならば。何しに生れ來りけむ。うらめしのちきりやとて。おや子のちぎりをば今更うらみ給ひけ

り（コトハ）か様に恨給ひけむ。おもひの念やつうじけむ。又神のめぐみにてや候ひけむ。丹波ののせにおはします。名月女の御方へふしぎのたよりぞ候ひける。其故いかにとたづぬるに。たとへば津の國。わたなへちかきかむざきに。くづわのしやうじ長清と申人の子に。こむどうじ重友とて候ひけるが。これも國春の姫のすがたを見付。より〳〵心をつくせしに。おもひの外にかの姫のうせぬるよしをつたえ聞。世をあぢきなくおもひ切てやがて遁世し。諸國を修行仕るとて。丹波ののせにつく。名月女のましますとは夢にもおもひよらず。家かぬが門ぐわひにたゝずむて。袖の上の時れうを所望してやすらふが。さもあれ國春禪門が。兵庫のうらの人柱にとられぬるよとあさましくて。何となく一首の哥をぞ詠しける（下句）憂世ぞとおもひ捨ても一筋に。人の上にもうき事ぞきく（コトハ）かやうに詠じて休らひけり。折節名月は物ごしちかく御坐ありけるか。今の哥を聞からに。何とやらん胸うちさはぎ。人を出して修行者は。いつくの人ぞととはすれば。修行者承はり。かくあさましきみにて。世にありがほにふるさとを申べきにて候はねども。又つゝみてもなにかせむ。是はつの國かむざきのものにて候と申。めのとも名月もかむざきのものと聞からに。ふきくる風もなつかしくて。しやうじの隙より見出せば。年にもたらぬ修行者なり。なふ修行者。いぜむのあらましに憂世ぞとおもひ捨ても一すぢに。人の上にもうき事ぞきくと。くちすさみ給ふは。さて世には何事さふらふぞ。修行者承り。人の上と申も此ほつしむの由來也。なにをかつゝみ申べき。たとへばつの國なには入江のみつまつに。刑P左衛門國春と申せし人の候ひしが。一人の姫を持。たまのすがたをみにまとひ。情のふかき心ざしは。やうきひりふじんにもあひおとら

じと聞えしが。住吉まふでの有し時。そつと見しより。しづ心なき戀となつてより〳〵心をつくせしに。おもひの外にかの姫の。うせぬるよしをつたえきゝ。世をあぢきなくおもひ切てやがて遁世し。諸國を修行仕るが。此四五日さきに。あき人のたよりにふるさとの事をたづねて候へば。名月女の母は去年の秋むなしくならせ給ひぬ。父國春は高野の嶺にて遁世し。諸國を修行仕るとて。兵庫の浦の人柱にとられ。六月廿三日にしづめらるべきよしをつたえきゝ。ゆかりし人のゆくゑさへ。かく成行よとあさましくて。何となくこしおれをつらねぬると申。名月は聞召。夢かとおもへばうつゝ。うつゝかとおもへば誠しからす。重ていかにとたづねさせ給へば。なふさのみにとはせ給ひそとよ。憂身のかやうになる事も。その姫ゆへの事なれば。何はにつけて恨のかず。なみたならてはともゝなし。余所の見る目も。はつかしやとたもとをかほにをしあつる。名月は聞しめし。去事のありしぞや。住吉まふでのありし時。こしのさきにたまつさを引むすびておとせしを。供の下女がひろひとつてみづからに見よといふ。何なるらんと見てあれば。おもひもよらぬ花を見て。露ときえなかなしさよ。もし此風のたよりを不便におぼしめされ。御返事ましまさば。かむさきに聞えたるしやかだうの鐘のをに。むすひてたべとかきとゝめ。おくに一首の哥をかく。しらせても。しるしなくては杉の門。明ぬ暮ぬといかで待なむと。書とめたりし水ぐきを。たゝ大方におもひなし捨たりし事のありしそや。われをしのふの戀ころもいまきて見るそよしなき。われゆへかやうになる人ならすは。唯今もたち出て。ちゝはゝの御事を。とはまほしくはおもへとも。われゆへか様になるといへば。さすがかふともいはしろのまつことのはもかきく

れて。おつるなみたのひまよりも。めのとはなきか修行者に。時れうたてまつれやとて。簾中ふかく入給ひ絹引かつき。たをれふしりうていこかれ給ひ給ひけり。其比丹波の國へは。都より本家の一族下向あつて。三日のかりくらあり。國にありあふ弓取たちみなかりくらにいてらるゝ。家かぬもおなしくまかり出る。かゝる他行の隊なりしに。父の御事聞召。あるにあられぬ御ありさま中〳〵申計なし。めのとの女房をちかづけ。此人かへらせ給ひては。いかにおもふとかなふまし。すこしもいそきゆき。父のいのちにかはるへしと。めのとの女房ばかり引具し。人目をつゝむ事なれば。夜半にまぎれてたゝ二人。丹波ののせをたち出て。あしにまかせてたどりゆく。かのみくさ山と申は。木こりのかよふ道おほし。かたたこなたとふみまよひ。とある木かけに。たち寄て一夜を明し給ひけり。うくてもはてぬ夜半なれば。月西山にかたふき。ほの〳〵とあかしがたなる早天に。やう〳〵木陰をたち出る。末の松山戀の森。心ばかりはいそげとも。ゆくみちさらに見もわかず。日輪出させ給ふをこそひかしとはかりはわきまゆれ。西北にまよへと。何とてか南へみちのなかるらん。かくて二人の人々は。其主しらぬ玉づさのふみまよひゆく折節。おのまさかり持たりし山人壹人ゆきあふたり。此山人が見まいらせ。あらふしきや。あき待かぬる萩の花。ききやうかるかやをみなへし。露おもけにてくねるかや。時雨にそむるもみちばと。ませの内の八重ぎくにあひまがひぬる女房の。やかむのおそれもはゞからて。袖しほりたるたちすかた。人倫まれなる深山に。なにをしるへのたよりにか。かやうにたち出給ふらんと。あやしめ申てたつ程に。とがめもとひもせられすして。たかひにやすらふばかりなりいや。こらうのへ

むけかあやしと山人の。おもふも理なり（コトハ）めのとの女房是を見て。心ありげなる山人なれば。少僞兵庫へのみちの案内をもとはばやとおもひ。いかに是成山人にたづね申べき事のさふらふ。わらはと申は當國はつかの郡のものにて候が。これなる上らふ樣のちゝごは。兵庫の浦のつきじまの。ぶぎやうにたゝせ給ひて。さらに隙なくおはします。はゝごは繼母にてましませは。事の外にくませ給ひ。父子歸らせ給はぬ先に。あらざる事を申付。うしなふべしとのたくみのさふらふ程に。みづから餘のいたはしさに。夜半にまぎれて御供し。是までまよひさふらへとも（カヽル）ゆくゑをしらて。たゝすむなり（フシ）野にも山にもしるべぐさ。兵庫の浦へ。案内ををしへ給へや山人よ（コトハ）此山人が承り。さらばとくにも此道を。かくとは仰もなくて。こなたへ御出候へとて。谷川を渡りそはをゆく。めのとも名月も。たがいにたもとをとりかはし。くさば〳〵をわけてゆき。たかき所へあがつて。是はいにしへ兵庫へのおひ分と申候を。近年人待がたうげと申ならはす由來の候を。かたつてきかせ申たくは候へども。すこしもさきへといそがせ給ふ上らふたちにてましませば。懇には申さぬ也。あれ〳〵御覽候へ。西へみちの候はあれはむろたかさごへ下るみち。かまへてそなたへゆかせ給ふな。たつみへすこしゆき。一段たかき所よりひがしの方を御覽せられ候へ（サシ）みなと川さいたが下かむとり　雀の松原みかけのもり　雲ゐにさらすぬのひきや。渡邊神崎天皇寺住吉のはまも見えぬへし。西はあかしたかさご。大倉谷といふかた也。南にかすめるなぎさこそ。兵庫の浦にて候へ東西へわかつみちのべの。いかに多く候と。左右へあやぶみましまさて。兵庫の浦を。目にかけてすぐにゆかせ給ふべし。名殘おしほの夕日影。これよりお暇申と

て山人はみねにとまりけり。めのともしうももろともに。此おそろしき山の内。みちしるへせしうれしさよ。いかさま是は。山人にてよもあらじ。多年たのみをかけ申。くらまの大悲たもむの。山人とげむじ給ふかや。ありかたさよと語つゝ。さしもに物うきみちなれども。此物語になぐさみて。やう〳〵ゆけば。つの國の兵庫につかせ給ひけり（コトハ）有浦人にゆきあはせ給ひ。人柱のゆくゑをたづねさせ給へば。此浦人が承り。惣じて人柱のゆくゑとて。尋來らんものに。案内をしらせ音信をいはせたらんものを。やがてとつて人柱にたつべしとさだめさせ給ふ上。いかに上らふたちをいたはしくおもひ申せはとて。わがみにかへて申べきか。中〳〵おもひもよらぬ事なりと。語りすてゝぞとをりける。さすがにだうりなりければ。重てたづぬるまでもなく。とある所に宿をとつでむなしく日數をおくられけり。さても丹波の家かぬは。三日のかりくら過。わが宿所にまかりかへる。御内の者はしりむかつて。なふ上さまこそ過し夜。めのとの女房ばかり引ぐして。ゆき方しらずうせさせ給ひて候を。いつかにたづね申せとも。御ゆき方もましまさす。いかゝはせむと申。家包これを聞。ふしぎの事を申者哉と（サシ）簾中にたち入見れば。げに〳〵うせて見え給はす。こはいかにとあさましくて。つねに住給ひし所を見れば。くはしき事を書をき給ふ。なに〳〵今生ならざる花のえむ。かやうにちりかはるべしとは。ゆめ〳〵おもはさりしに。ちゝはゝきゞの御ゆくゑを。風のたよりに聞ぬれば。みのとがごうもおそろしく。御みのとがもうらめしや。いたはしやはゝごぜむは。こぞのあきむなしくならせ給ひぬ。ちゝ國春は一かたならぬおもひゆへ。諸國を修行めさるとて。兵庫の浦の人柱にとられ。けふともあすとも御最後のさためぬ

よしと承る。情のえむがつきばこそ。御みのうらみもおはせんめ。すこしもいそぎゆき。ちゝのいのちにかはるべし。みづからなからんその跡に。いかなる花になれ給ふとも。おほしめしわすれすは（フシ）ぼだいをとふて。たひ給へかへす。〳〵と書とゞむ（コトハ）家かぬこれを見て。こはいかに兵庫の浦の人柱をば。たゞ大かたにおもひなし。余所のなげきとおもひしに。みの上かゝるわがたもとの。なみたの雨となる事よ。だうりなり理や。去ながらかねては。ひよくれむりとちぎりしに。なと夢計しらせてたばせ給はぬそと。取物を取あへず。駒をはやめてうつほとに。兵庫ひろしと申せとも（カヽル）けにやつきせぬちきりにや（フシ）女房の宿にたづねあひ。うれしといふも。中〳〵に申計はなかりけり（コトハ）さてちゝごの御事は。いかにととへば。中〳〵音信たにも申さぬなりとこそなげかれたれ。家かぬ是を聞。御心安くおぼしめせ。此嶋と申は。五條の大納言國つなのきやうの。一圓御あづかりと承る。國綱のきやうによき内縁をもち申て候。やがて参りて申さむとて。國綱の卿に参り。此よしかくと申ければ。國綱のきやうは聞しめし。めむ〳〵様の御訴訟を。自余の事にて候はゝ。なにかはそむき申べき。此嶋と申は。わたくしならぬ大願にて。國綱がはからひにては。中〳〵おもひもよらす去なから。明明日はかならす。嶋つかるべき内談あるべし。里内裏に御参あつて。庭中あらば國綱も。心のをよびは申べし。御一門の御ざしきを。うかゞひ給へと仰ければ。家かぬなのめならず悦。わが宿所に罷歸り。夜もすがら出仕の出立引つくろひ。明ければ出仕つかまつるとて。女房に語けるは。此事申かなえずは。庭上にて腹切て。めいどゑむまのちやうにて待申さむとかたり捨て。さと内裏にまいり。事の子細をうかゞひ申に。淨戒かねて

の御諚に。三十人の人柱が（カヽルウメ）十八人は男にて今十二人は女と聞。おとこ十八人を。おきにしづめ。女十二人は。いそのかたにしづめよ。とり〳〵のなげきを。わきて見むずる事ともも。中〳〵おもふも不便なるべし一度にばつとしづむべしと。仰出されたりければおもひ切ぬる家かぬもきもたましゐも。みにそはず（クトキ）今申さではいつの世にか申へきと。（コトハ）ふるへる聲をさしあげ。一人ならぬなげきをわきてごむじやうせしむる事。世にもおそれ入たる申條にて候へとも。卅人の人柱のまむずる時めしをかれたる修行じやは。たとへばつの國。なには入江のみつまつに。刑ㅁ左衛門國春と。申者にて候が。去年の秋妻女にはなれ。さやうの心中にてや候ひけむ。高野のみねにて遁世し。諸國を修行仕るとて。御願の人數にめしをかれ。嶋の柱とたちさうべき。かの修行者がむすめは。かう申家かぬめが妻女にて候が。ちゝがわかれをかなしみ。いのちにかはらんと申て。是までまいりて候へども。さすが女のみにて候程に。おそれをなし庭中申上る事なふて。餘になげき候程に。（クトキ）此家かぬめが参り。庭中申上る事のかたじけなき（マヽ）よと申。おそれおのゝくありさまは（フシ）水にしたがふ。柳のふししつめるがごとく也。（コトハ）淨戒御覽じてやあ。あれは何といへる訴訟ぞや。そうじて人柱のゆくゑとてたつね來らんする者に。あむないをもしらせ音信をいわせたらんものを。やがてとつて人柱にたつべしとさためをきて候に。たがはからひにて是までは参りたるぞ。なんぢもおもふても見よ。三十人の人柱を。壹人あはれみとりかへなば。自余の恨をいかゞせむ。中〳〵おもひもよらぬ事なれども。餘になむぢがしやうがいにかへて申所もふびんなるに。明々日を相待よ。卒度見参さすべしとて。御内にいらせ給へば。いへかぬ時の面目ほ

とこし。我宿所に罷歸。あらめでたや明々日は。かならず國春を給はるべきとの御諚の候と　とにかくになく
さむれども名月は。ちゝにもあはで此まゝ。さてのみはてむかなしさよ。父よ〳〵といひけるを　物によく
〳〵たとふれば。きらう國の。はくとうが山路に捨しちゝをこひ。らうぶ〳〵と三度よび。きえ入つらん。あ
りさまもかくやとおもひしられたり　かくて人柱の吉日吉時にはやなりぬ。卅人のかごをつくらせ。卅人の
人柱を。ろうの内よりかごにいれ。舟一そうに一人づゝとぞ定ける。とられぬるものどもの。妻子したしきも
のどもが。近國他國より來つて。あれはわが子かわかちゝか。あるひは兄弟なむどゝて。たもとにすがりかなし
むを。はういち邪見のものゝふるも。心よはくてかなはじと。しもつをあてておひのくる。今を最後の事なれ
ば。いひたき事のかず〳〵。さこそとおもひやらるれど。せめてちかづく事なければ。かさをあげたもとをあ
け。あるにあられぬあり樣は。目もあてられぬふぜひなり。中にも國春禪門は。自余の人柱にまじはらせず。
其故いかにとたづぬるに。家包も去弓取なれば。迚最後の道とおもひ。いかなる所存かたくむべきに。軍兵あ
またそへよとて。ろうよりもかごにいれさせ。中にになひて出る。めのとの女房これを見て。只今とをらせ給
ふこそ。父國春に　ましませと。申もあへず名月は。かさをかしこにぬぎ捨。諸人の中をわけ入。此かごにす
がりつき。なふ名月こそ是まで參て候へ。我もろともにしづまむと。いはむとすればものゝふども。しもつを
當ておひのくる。家包其身をはゞからで。や情なしとよものゝふたち。其人一人ばかりをば。御免あるぞとい
ひければ。時の奉行のかづさのかみ。あらくな申そ其人は。條々そせうのあるかた也。すこしかごをかきすへ。

名殘おしませ申せ。承ると申て。かごをかしこにかきすゆる　つゐの別とはおもへとも。つかのまの對面。さ
こそとおもひやられて。中〳〵によろこひのなみたは淵となつて。くかにてしつむ計也　やゝあつて父國春
はおつるなみたのひまよりも。げに心ざしのましませばこそ。これまでは尋ねきたり給ふらめ。何とてか人の
子の。おやのおもふ心中に相違して有や覽。わこせがおもひふかうして。母は終に死してあり。國春も同じみ
ちへと。千度百度おもひつれども。憂世にもしもながらへば。わごせがゆくゑやきくとおもひ。かゝる修行に
おもひ立て。今さら憂目を見る事も。ひとへにわごせゆへそとよ。子はたからかかたきかと。善惡ふたつをあ
むするに　人の子は。たからにてわごせはおやのかたきなり。かくはいふてあれども。ふかき恨はのこらぬぞ。
此年月佛神に。きせい申せしりしやうには。いのちの内に見つるこそ。何よりもつてうれしけれ。かやうに小
車のめぐり。あふへき道ならば。母もろともにながらへて。見るとだにもおもひなば。いかゝはうれしかるへ
きぞ。但うれしき中にも。かくあさましき最後の躰を。あのまれ人に見えぬるこそ。何よりもつてはづかしけ
れ。よし〳〵それも事の緣。姫をおもひ捨たまはすは。見しものと。おほしめし菩提をとふてたび給へ。情な
のめのとや。か程にちかきあたりに。住ながらへてあるものが。今まで音信せぬ事の。うらめしさよとありし
かば。姫はなみだのひまよりも。御道理にておはします。ゆるさせ給ひさふらへや。みづからともにしづみつ
ゝ。御手をひかへて三津の川。じでの山路をこえ過て。ゑむまのじやうの御供を。申べきにてさふらふぞや。
みづからをも此かごに。そへさせ給へ人々とてもたえこがれかなしめは。ちゝもかごの内にして。ないてはく

どきうらみてなく。うとうがながす。ちのなみた今こそおもひしられたり。人のなげきもわがおもひも。憂世にすめばおほけれと。かゝるあはれはたぐゐなしと。上下万民。をしなへてあはれととはぬ人そなき（コトハ）かづさのかみは御覽じて。時刻うつればなけきあり。とつくかゝせよと仰ければ。又ちうにになひていつる。去間淨戒は。和田のみさきの觀音だうにて。御見物あるべしとて。御一門三百余人ざゝめきわたつて見えさせ給ふ。扨もはかせのやすうちは。なぎさにかなしむ有樣をみて。是はひとへにやすうちが。どうとなりなむ事こそ何よりもつて口惜さよとおもひ。觀音堂に參り庭上にかしこまり。あれ〳〵御覽候へ。諸人のなげきは偏に。あひ大しやうのさい人の。ねつてつのほのほにむせぶ覽もかくやとおもひしられて候。さればけうしゆ尺尊の。なむぎやうくぎやう實相とゝかせ給ひて候を。御思案あるべく候。しやくそむ一代のせつけうの中に。法花經を經王とす。一万部の法花經を書寫させられ。三十人の人柱の。名字なのりを書しるし。しづめの石には年號日付。龍神なうじうましませとて。海底にしづむる物ならば。五十てむ〳〵のすいきのくとくには。八十おつこうの生死のつみをめつし。かならず嶋は成就候べし。いかゞと申されたりければ。淨戒聞しめされて。とかく御返事もなく御まなこのけしきかはりければ。御一門の人々も。はかせのやすうちもみなせきめむしてこそおはしけれ。さてもたむばの家かぬは。そのおほそれをもはゞからで。女房めのとを引ぐし。觀音堂にまいり。庭上にかしこまり。あらお情なや候。たゝおたすけあれと申さむにこそ。（クトヤ）にくしとも思しめすべけれ。二人が中に一人。とりかへさせ給はんに。なにゝふそくの御座あるべきそ。然るべくも候はゝ。われ〳〵ふう

ふに國春を。とりかへさせ給へやとて。天にあふぎ地にふし。りうていこがれかなしみけり（コトハ）淨戒御覽じて。ぶびむとやおぼしけむ。ぎわうをめして仰けるは。人の上にふくかせの。わがみにあたらぬ事やある。いかに心づよくとも。あの女に情をとふてえさせよと仰ければ。ぎわうなのめによろこふて。名月女のそばにゆき。御身のなげきは淨戒も。不便とおぼしめさるゝに。ちかふ御入あつて御申あれとてひつたつる。淨戒御覽じてやう。ちかふきたりて申さずとも。なむぢが訴訟をば聞わけぬるぞ。さらば國春一人は。あの女にとらせよ。のこる廿九人をば。時刻うつればなけきあり。とつくしづめよと仰ければ。のこる人數のなげきは。中〳〵申計もなし。かゝりける所に。淨戒の御内。卅人のわらはの中に。松王こむでいと申て。みめかたちじむじやうなるが。觀音だうにまいり。庭上にかしこまり。卅人の人柱を。みな〳〵たてさせ給ふとも。人のなげきの嶋ならば。成就する事候まし。又おぼしめしたち給ふ。御願をむだにし給ひては。君の御意にもそむくべし。所詮はかせの御申のごとく。一万部の法花經を所寫させられ。卅人の代官に。なにかし一人たつならば。末代嶋は成就して。たえする事候まじいと（カユルフシ）申こうたる松王は。しやうこも今も。末代もためしすくなき心かな。（クトヤ）淨戒不便におぼしめし。誠にすいきのなむだをながし（コトハ）あら不便の物の申事や。さらばはかせともかくも。はからへと仰ければ。はかせなのめによろこふで。いそきはまへ下。先國春を取出し。名月女にたぶ。扨又のこる廿九人をも。皆々取いたし給ひて。ことゝくかへしたびければ（カヘル）請取〳〵はまに出（フシ）うれしきにもなみだ。つらきにもなみださきだつ物はなみた也。（トツ）三十人の人柱。ふじ（ヤウ）ぎの命たすかるは。なには

入江の國春の。姫故なりとよろこび。わが國さとにかへつて。あるいは兄弟。孫子ともに。とりつき〳〵よろこぶ事。うらしまがいにしへ。七世の孫にあひぬるもこれにはいかでまさるべき。淨戒よりの御諚にはたむはの家かぬか。しうとかいのちにかはらんと。おもひきるこそやさしけれ。きむやかたののせの庄八百町をとらするしうとを扶持し天下へ。よきにみやづき申せとてくだしたぶこそ目出たけれ。又。吉日をあらため。七月十三日にさためさせ給ひて。一万部の法花經を。洛中洛外の。寺〳〵へ。日記を上て。所寫させらるゝ程なく御經いてき。兵庫の浦にまいらする。はかせ御經取あつめ。數の御へいを。きりたてゝ。ふねをしうかめ。うち乘てはるかのおきへをし出し。御經しつめ。御へいをふつて。きやうしやくのつと申さるゝ。誠に松王望申ける間かれ一人ひと柱にたてられけるそ殊勝なる。どくじゆの御經有べしとて。一千余人の。御僧たちを。洛中洛外より請し下し給ひて。なぎさに御經あそはせは大乘ぢくのけちえむの。龍神なうじう。有によつて。嶋は成就する。十四町の所也。きやうの嶋と申て。平相國のこうりうの今にありとぞ見えにける。名月と申もたゝよのつねの人ならす。鞍馬の大悲。たもむの。御はからひによつて。吉祥天女の化心にて。嶋をも成就。人柱をも。たすけむために。名月とげむじ給ふ也。さて松王と申もたゝよのつねの人ならす。大日わうの。化心にて嶋を成就のそのためにたち給ふとそ聞えける。つたえきくいにしへの大せ太子は。辱もによいのたまをとらんとてゑむしのかいをもつて。きよつかいをはかりつくし終に寶珠え給へり。大願としては又終にむなしき事あらしこの淨戒も。末代たみを。あはれみて兵庫に嶋をつき給ふ地藏さつたの化心しむくせいくわんの御ちかひ。

ありがたしとも中〳〵に申計はなかりけり

硫黄之嶋

（大頭左兵衛本）

爰に門脇の平宰相教盛折をえて。小松殿に參大臣に申されけるは。今度后の宮御入胎につき。非常の大赦行るべきよし承る。夫人の嘆をやめ給はゝ。なによりもつて勝れたる御祈禱たるべし。然に一とせ硫黄が嶋へ流しうしなはれし。丹波の少將康頼。平判官成常。法勝寺の執行が事。今度の内に赦免ならせ給はゞ。さこそ悦申べき先案じても御覽ぜよ薩摩方。硫黄が嶋の。憂住居おもひやるさへあはれなり大臣げにもとおぼしめし。淨海へおまいりあつて。此よしかくと申させ給へば。淨海聞召れて。丹波の少輔。平判官二人の御教書ばかり出さるゝ。大臣御覽じて。重て申上させ給ひけるは。三人をめしあつめ。ひとつ嶋へながし。二人をめしかへし。一人跡にのこしなば。いよ〳〵うらみふかゝるべし。只おなじくは此次而に。然べしと申させ給へば。淨海大にいからせ給ひ。執行が事は隨分淨海か口入によつて。人となりし者ぞかし。然に獅子の谷にあつまつて。散々に惡口しぬときく。執行が事におひては。淨海はしるべからずと大きにいからせ給へば。此上力及ずとて。二人の御教書はかり八條殿よりいださるゝ。同使廿日に京をたち。さつまがたとは惣名。奥七道はたうと。口五道は日本なり。惣而嶋は十二嶋。初は白石か嶋千鳥嶋。硫黄か嶋へ一人づゝながさるべき

にてありしを。門脇殿御訴訟ふかきによつて。ひとつ硫黄か嶋へながさるゝ。かくて三人の人々。徒然さの餘に。いざや嶋めぐりしてあそばむとて。嶋めぐりをそし給ひけるけにや都にて傳聞しより。遙にこえておぼえたり。戌亥より辰巳へ長山つらなつて。百千万のいかづちの音たえすみねには雷電ひまなし麓の里に雨ふりて昔は鬼が住ければ。鬼界か嶋とも申也。今はまたなにとなく。嶺に硫黄がたちければ。薩摩がた。硫黄か嶋とも申也。たま〳〵。此嶋に住人は。わが住國の人にかはり。我いふをかれしらず。かれいふ事をわれしらず。男はあれとも烏帽子きず。女はあれどもかみさげず。しつが山田を。かへさねはへいこくのたねもなかりけり。そのゝくわをとらさればけむばくのたぐひもなかりけり。水をむすばむとては。さはにくたり。こたらきをとらむとては山林に入てまよひけり。明暮月日を。送りける憂身の程こそ。かなしけれされども少將の御爲に。御しうとにておはします。門脇の平宰相教盛の所領、肥前の國かせの庄たるによつて。少將一人の衣裳食事を。日にしたがつて送せ給へば。少將一人の衣裳食事をもつて。二人の人をはぐくみ給ふ。かくて丹波の少將康頼。ならびに平判官成常。ひとつ心に仰けるは。我都にありし時。熊野を信じ。十度まいらんと大願をたて。五とつゝ參り今五度まいり十度にたさんとおもひし時。此嶋になかさるゝ。誠やくまのゝ權現は。われを念ぜむ衆生のあらば。野の末山のおくに有とも。光をさして道ひかむとの御誓願。本誓今にたがはせたまはずは。いざや此嶋に權現を勸請申。我等が歸洛を祈り申さむ。さて僧都はなにとかおほしめす。僧都きこしめされて。山王の事ならばしかり。權現の御事はさして信心はさうず此上力及ずとて。二人すど

〳〵とおたちあり。まむ〳〵たる海上を見わたし。がゝとある礒邊をつたひ。三の御山にゝたる所をたつねけり。或は山たかふして。上水久しくなかれいて。或は木々の木すゑれい〳〵としてそばだてり。爰は本宮しやう〳〵でむ。かしこは神宮神の倉。はるかの北にあたりつゝ白。石の峨々とあるよりも。龍水雲よりなかれいて。まつの。嵐も神さび。ひりやう權現のおたちあるなちのお山に。似たりとて爰を。なちとそさためける。津の國くぼつのわうじより九十九所のわうじ〳〵をかたのことく勸請申。其より黒邊に下向ある。其間に僧都はたかき所にあかり。東西南北を見渡し。萬觀念してまし〳〵けるに。黒雲あつく引おほひ。石巖くづれて海にいる。其時僧都。禪にふるき詩をおもひいて。風佛前に花をさむず。岸くつれて魚がいすそのきし。心なふしてつみをえす。されば五躰は五つのかりもの。地水火風をかたとれり。心は虛空のことくにて。かたちなければ色もなし。諸法は有無の二道にてありともみえ。又はなし。たつても。ねてもさせむなりとはかいむさんの。高枕しおきぬ。ふしぬとしたまひけり。角て二人の人々は。日かすつもれともたちかふべきじやうゑのあらされば。あさの衣のしほにくちたるを。さはの水にてあらひ。岩田川の清き瀨にてぼむなうのあかをすゝぎ。五諦王子をふしおがみ。それより山路に入ぬれは。高原や。みねのあらしにさそはれて。いはうおこして。參るにそ中天竺もとをからず。ちうでうちか雲熊瀨川。發心門にも。入ぬれははや。本宮に參りけり。あらありがたやこれこそ本宮しやう〳〵でむにて御坐候へ。いざやわれらか歸洛ののつとを申さむとて。三味のあらされば。はまの眞砂をうしほにてあらひ。三味とさため。花をたをつて御幣にさゝけ歸洛

の。のつとをそ申されける。さいはい再拜夫あたりきたるさいし治承二年戊戌。月のならひは十月ふた月。日のかす三百五十余ケ日。吉日良辰を撰むてかけまくもかたじけなくまします。日本第一大りやうげむ。熊野三所權現ならひにひりやう大さつたのきやうりやう。うずのひろまへにして信心の大せしゆうりむ。藤原の成常。井にしやみしやうじゆ一心清淨の誠をいたし。さむこうさうおうの。心さしをぬきむて謹以。敬白。夫せうじやう。大井はさいどくかいの教主三心。圓滿のかくわうたり兩所。權現は東方しやうるり。いわうのしゆ數病。しつちてうの如來たり。あるひは南方ふだらくのうけのしうにうじうげむもむの大士。にやくわうじは。しやは世界の本じゆ。せむしやの大士。頂上の。佛面を現してしゆしやうの諸願をみてしめ給ふ。かるかゆへに上一しむを初下万民にいたるまて。或は現世安穩又は後生。善所のために。朝には淨水をむすんて。ぼんなうゝあかをすゝき。夕ㄗにはしむさむにむかつて。法號を唱に感應おこたる事なし。峨々とある嶺の。たかきをば。神德のたかきにたとふ。けむ〳〵とあるたにの。ふかきをは。くせいのふかきになぞらへ雲を。わけてのぼり露をしのいて下。爰にりやくのちを。たのますんばいかゝあゆみを。けむなむのみちに。はこばむや權現のとくを。あをかずんはなむぞかならす下ゆうゑむのさかへに。ましまさんやよつてせうじやう。大權現井にひれう。大井はしやうれんじひの。御眼をならへ。さほしかの。御みゝをふりたてわれらがむにの。丹誠を示現して。一〳〵のこむじゆを納受。せしめ給へまくのみ兩所。權現は各儀にしたがつて。或は有緣の衆生をみちひき又は無緣の。ぐむるいを。すくはんがために七寶しやうこむの住家をはなれ。八万四千のひかり

をやはらげかりに。すいしやくと現し六道さむうの。塵にどうじ給へり。かるがゆへにぢやうどう。やくなふてんぐじやうじゆ。とくじやうじゆと禮拜袖をつらね幣はく。れいてむをさゝくる事。隙もなし。にむにくの衣をかさね。かくだうの花をさゝげ神てむの床をうこかししじんの水をすまして。利生の池にたゝへたり。神明納受。ましまさば諸願なむそ成就。せさらんやねがはくは十二所權現利生のつはさをつらねて。遙にくうかいの。空をかけつてさせむの愁をやめ歸洛の。本懷を見せしめ給へ。再拜〳〵と禮拜して。淨衣のたもとをしぼるは。ありかたふこそ聞えけれ

文學

（大頭左兵衞本）

爰に源氏の御代に出させ給ふべき。由來を委たづぬるに。本は津の國渡邊源氏の大將に。遠藤武者藤房かの子に。遠藤瀧口守藤と申せしに。出家してのかいみやうを。文學とこそ申けれ。其比あらざる大行をくわたて。眞言教に心をかけ。どくねつに笠をもきず。けむとうのさゆる夜ふすまのかずをもかさねず。大嶺かづらき七度とをり。熊野のたちの瀧に三七日うたれ。正心の大聖明王にあひたてまつりしかば。すでに權者とこそ申けれ。其後都へ上り。あたご山のふもと。高雄の神護寺と申古寺に御座ありしが。かゝるばうゐいぶつかくを建立すべき事こそさいはいなれ。まづしゆろうこむりうあるへしとて。洛中洛外を勸進してまはられしが。東山院の御所法重寺殿に參り。これは高雄の神護寺の。鐘つきだうの勸進にまいりて候。御奉加あれと文學は。勸進帳をたからかにこそよみ上けれ　比は卯月上旬の事なるに。遲櫻ちる木の下はさむからで。空にしられぬ卯の花の。雪はお庭にちり敷て。山郭公村雨に。ぬれてさはたる折ふしに。雲上の管絃こうは。なかばなり上らふたちは御覽じて。さう〳〵なり後日にまいれ御奉加あるべしとの御諚なり。文學聞しめされて。何雲上の管絃こうとや。せうちやくきむくど。ひはねうどうのあそびは一旦の榮花。鐘つきだうの勸進は末世のた

めにあらずや。管絃こうとゞめ。御奉加あれと文學は。又勸進帳をたからかにこそよみ上けれ。上らふたちは御覽じて。さう〳〵なりあの法師を。追出せとありしかば。承ると申て。青侍七八人はらりと立て。文學をひつたて。後日に參れ御奉加あるへしとの御諚にて候に。重而參事こそきつくわいなれ。いそき出よといふまゝに。そくびをついて追出す。文學御覽じて。心にあたはぬ事なれば。いかにもしづかにあゆみ出る。いそぎ出よといふまゝに。文學の持せ給へる勸進帳をひむばうて。ふたつみつにひきさき かしこへかはとなけ捨又とつてひつたてゝあふ門の外へそ引出す。文學御覽じて。抑是は何事そ。いなゝらはいくたびも。そのよしをこそいふべけれ。黑衣の上のちじよくを。あたふる所はいこむなり。つら〳〵ものをあむずるに千手の二拾八ぶしゆ。藥師の十二神じやうと。がうざむせぐたり夜叉明王の。がうまのりけむをひつさげてあくまを退治し給ふに。なむぞ文學か。たいしたる此けむは。いつの用ぞとおぼしめし。薄墨染の衣の袖をくる〳〵とくりあけて。めての脇よりも。氷の樣なる劔をぬき。おつふせ〳〵さす程に。青侍を七八人。時刻もうつさずさしころす。しゆふむのふしともあつまつてたかてこてにいましめて庭上の小庭にひつたてたり 上らふたもは御覽じて。ぼつかうものゝ文學とはあの沙門か事か。いそきうむきをはねよときせられけれは。すでに死罪に及びけり。されども法王よりのせむじには。たとへばあの沙門こそはかいのものといひながら。げだつどうさうの。種々の法衣をみにまとひたるものを。つるきのさきにかくへきそ。七條おほちにどくつをかまへおとし入。百日を待べし。百日過ばほりおこし。跡をばとうてえさせよとのせむじなれは。官人等すきくわをも

つて出 七條西の洞院に 二丈五尺に。つちあなをほつて。文學をおとし入。上にもつちをはねおゝひ。百日ひかすを。送りしはにあはれなる次第也 かくて十日計打過て。文學の籠のあたりに聲あつて。此内のひじり〳〵とありしかば。文學聞しめされて。かやうにどくつにこもりてのち。とひくるものもなきものを。一向に我をうしなはむとのせむじにてありけるな。ぢよくあくせちうなるあいだ。よしそれとても力なし。候とそ仰ける。別の子細にても候はず。中堂藥師いはうぜむせいよりの御諚には。たとへばあの沙門こそ。破戒のものといひながら。あらざる大行をくわたて。いまだ其願成就せず。今一度たすけをき。しよくはむせさせむとの御諚にて。十二神の中よりも。こむぴら大じやう御使に參て候。とくつのくらき闇ならば。るりのつぼをえさするぞつぼのひかりて照してゆけ。しよくじののぞみのあるならは。とてもくすりをえさする上。藥をぶくして命をつけ。それ給はれ文學とて けにあてやかなる御手にて るりの壺をそくたされける けにとくらき闇をは。つぼの光で照しけり。食事ののぞみのある時は。くすりをぶくしていのちをつく。なにゝ其身のおとろふべき。やせすぐろます。文學は日かずを。をくり給ひけり 又十日計打過て此内のひじり〳〵とありしかは。候とこそ仰けれ。中堂藥師いはうぜむぜいよりの御諚には。さやうにどくつにこもらむよりも。わが山に來り。經よみだらにをみて。百日を待へしとの御諚なり。文學聞しめされて。かやうにどくつにこもりては。何としてかは出べきそ。こむひら大じやう腹をたて。さやうの心中にてこそ。かゝる無明のくをうくれ。神通自在たるへくは。などか出ざるへき。文學けにもとおほしめし ゐたる所をたつとおもへは 其身は

けしのことくにて　出られけるそ　しゆせうなる　さてこむひらと打つれて。中堂藥師に參り。經よみたらにをみて給ひて。あかしくらすと。せしほとにはや百日に成にけり　まむしける夜半に。辱も御本尊は。みちやうの內よりあらたに御聲出させ給ひ。いかに聞か文學。日數もけふは百日とおぼゆる也。人の心をやぶるは。ほさつのぎやうにあらずや。いそぎどくつに罷歸。法王よりの御尋にあふべしとの御諚也。文學聞しめされて。承候とて。いそきどくつにかへらるゝ。去間法王よりの御諚には。ありし時のひじりは。日かずもけふは百日とおぼえたり。いそぎどくつをあけ。跡をはとふてえさせよとのせむじなれは。官人等すきくわをもつて出。とくつを明て見てあれは　やせもせすくろみもせず。いとゞけしきはあてやかにことわらつて出給ふ。官人きもをつぶしつゝ東西へはつとにけちつたり。文學御覽じてなふ何とてぎやうてむし給ふそ。是はありし時の。聖にてはなきかと文學に力をつけられ。やう〳〵心を取なをし文學をしゆゝし奉り法重寺殿へそまいりける　上らふたちは御覽して。御目を見合したをまいておちさせ給ふ。法王ゑいらむまし〳〵て。殊勝なりとよ文學。爰にたとへの候ぞ。愚者の作る善は善ともにつみ。智者の作るつみは。罪ともにぜむとは。今こそおもひしられたり。さらばありし時の勸進帳を。たからかによみ候へ。ちやうもむあるべしとの御諚なり。文學聞しめされて。勸進帳はあらはこそ。時刻うつしてかなはじとおぼしめされ。持たる扇ををしひろけ。勸進帳を文學は。たからかにこそよみ上けれ　沙彌文學うやまつて申。殊には貴賤だうぞくのじよじやうをかうふつて。高雄山の靈地に一院を建立し。二世安樂の大りをこむきやうせしめむとこう勸進の狀。夫ひそかにおもむ

みれは眞如くわうだいなり。しやうふつのけみやうをたつといへと。ほつさうずいまうの雲あつくおゝつて。十二因緣の嶺にたなびいしよりこのかた。ほむう。しむでんの月の光かすかにして。いまた三德四万のたいきにあらはれす。かなしきかなやぶつにつはるかにぼつして。生死るてむのちまた。みやう〳〵たり。たゝ。いろにふけり香にふける。たれかぎやうざうちようえむのまとへをしやせむ。いたづらに人をほうじ法をほうず。これ。あひゑむらこくそつのせめをまぬかれむや　爰に文學たま〳〵。ぞくぢむをうちはらつて法衣をかさるといへと悪行なを心にたくましくして。日夜につみを作りせむひよう又みゝにさかつて朝暮にすたるいたましき哉二度三づのくわきやうにかへつてなかく生死の。くうりむを。めくらさむ事を。其故に無二のけむしやう千万ぢく。ぢく〳〵に。ぶつしうのゐむをかむずすいえんしじやうの法。ひとつとして。ぼだいのひがむにいたらすといふ事なしかるかゆへに。文學無常の願文になむたをなかし上下のしむそくをすゝめ上品蓮臺の緣をむすひとうみやうかくわうの。れいぢやうをたてむとなり。夫高雄は。山うつたかふして。じゆぶうせむの。木末をへうし谷しつかにしてしやうざむとうの。苔をしげりがむせんむせんで。布を引れいえむさけむて枝にあそふ人輪遶してけうちむなし。しせき。ことむなふしてしじんのみありちけいすぐれたり尤佛天を。あかむへし奉加すこしきたり。たれかじよじやうせざらんやほのかに聞じゆしや。いふつたう功德。たちまちに佛因をかむずいはむや一紙。半錢のほうざいにおいてをや。ねかはくはこむりう成就して金言法力御願圓滿ないしとひ遠近りんみむしむそぎようしゆむぶゐのくわをうたひちむよう。さいくわいのゑみをひらかむことには又。

しやうりやうゆうひ前後大小。すみやかに。一佛じゆもむのうてなにいたり三心万徳の月をもてあそばむ。よつて勧進修行の趣。けだしもつてかくのことし。治承三年三月の日文學坊とぞよみあげける（コトバ）法王ゐいらむまし〳〵て。殊勝なりとよ文學。さては權者にてまし〳〵けるや。今日よりして文學上人にふせをき申。いそぎわが山へあがり給へ。御奉加あるべしとのせんじは。面目とこそ聞えけれ。然とは申せども。諸卿のこらず一同に。そうもむ申されけるやうは。たとへばあの沙門を。すなをにをかせ給ふならば。らうぜき國にあまるへし。死罪をばやめられて。流罪させられ候へと。そうもむ申されたりけれは。右大將宗盛の卿。此よしを承り。もしさもあつて候はゝ。なにかしに申給はつて。伊豆の大嶋觀音だうへ。ながしうしなふべしと。そうし申されたりけれは。法王ゐいらんまし〳〵て。其比平家の事を是非をむだにし給はず。ともかくも宗盛かまゝたるへしとのせむじなり。宗盛文學を給り。かまへて本道はむやく也。くまのゝなだを渡し。ふなぢたるへしとの御諚にて。福井の庄の下司。次郎太夫ありはるに仰付。ありはる文學を給はり。上下卅六騎にて文學を守護じ奉り。法重寺殿をそ出にける（上クトキ）あらいたはしや文學。都の内を出し事。今はかりとやおほしけむ。七條おほちに立出て。ひがしをはるかにながむれは。音羽の山のまつかせに（下フシ）をのれときむやしらむらん。麓に落る瀧つほは。名になかれたる清水寺。本尊は千手千眼。若（クル）我誓願の御ちかひもらし給はすは。今一度都へ。かへし給へときせいして。西をはるかにながむれば。舟波においの山。嶺のたうたにのだう。嵯峨法輪寺。うつまさの薬師になをもなこりあり。北には鞍馬せき山。鬼門にあたりてひゑい山。中堂薬師の十二神。さて

わか山の十二神。こむひら大しやう七千のやしや。北野を拜し奉り。文學かこのたひのおむるのさいをなためつゝ。いま一度都へ。かへし給へときせいして。南をはるかになかむれは。八幡山に。たつ霧の岩清水にやかゝるらん。がいとくげたつぐせいりき。こがう八幡ねかはくは。けむしをまほりたひ給へと。きせいを申させ給ひつゝ。しつか作りみち鳥羽殿の御さむざう。余所なからふしおがみ。刑部左衛門なにかしか。其舊跡を。見るからにいとゝなみたもせきあへす。念佛申經をよみ。そのいうれいをとふらひて。淀に津につきけれはは河舟にうつされて。水にまかせてなかれゆく。弓手をはるかになかむれは。琴の音しらふるきむやのさと。かのさいこ中將の。ましろの鷹を手にすへし。かたのゝ原の。かり衣今きて見るそよしなき。めては山崎關戸のゐむ。たれかたてけむたから寺。ひなをそたつる鳥飼のかふりのさとはこれかとよ。繪のぐはげたるふる佛。はや渡部に付しかは海上はるかに梶をとりおいてのかせにほをあけて。なみちはるかに。ふかれゆく心さしこそあはれなれ（コトバ）文學仰けるやうは。あつはれけむじの世なりせば。かほとのざいによも遠嶋まてはながされじものを。これも平家のやつはらが。てうくわするによつてなり。これより伊豆の大嶋へ。なむ十日にもゆかばゆけ。けむじをまほるしるしには。しよくじをとゞめぶくすまじとて。ふな底にいらせ給ひ。枕とつて引よせ。打ふし給ひて其後は。おきさせ給ふ事もなくまたね入給ふ事もなし。ふしなから仰けるは。さて爰はいづくをとをるそ。天王寺の沖と申す。文學聞しめされて。異國にては南覚大師。わかてふにては聖德太子。衆生さいどのじひふかし。さりとも佛法がたの文學をば。よも捨はて給はじな。扨爰はいづくを通るぞ。

住吉さかひうぢのみなと。わかふき上やたまつしま。布引のまつきみねてら〳〵ふちしろたうけゆらのみなと〳〵きりへのわうし〳〵ちりのはま〳〵みなへ〳〵田那邊の沖過てなちの沖とそ申ける。文學聞しめされて。われ此御山にまいり。三七日瀧にうたれ。正心の大聖明王に。あひ奉りし其時ははや權者とこそいはれしに。何とおこなひなしたる文學か行そや。爰はいつくそはまの宮。さの〻まつ原太夫のまつ新宮のみなといたのさと。いせの國嶋の國。おはり三川の。沖過て天龍のなたに付給ふ去間かのなだと申は。東國一の惡所なり。富士の高根に黑雲か。ふたなみみなみざつとかゝると見えしかば。あはけしきのかはるは。みつなをといてほこもをおろし。ほばしらをたてなをせと。いへる時刻もなかりけり。伊勢の國くづかあらしといふ風か。まむ十文字にふいたりけり。くまのなる新宮嵐はうしろにふく。一方ならす四五方より〻もみ合たる風なれは。古木はえだをおろしてふき。もくよくをあらひ。くさのねをかへして。あぐるなみはひとへに。けふりのたつかことくなり。四方のかぜか一度にはつと。もみ合てふく時は。今は此ふねかなふへきやうあらすして。かたはらをたてゝくるり〳〵とめくりけり。ふねの内なるものともか。聲をそろへて一同に。南無阿彌陀佛と申けれともふな底なる文學は何おもふたけしきもましまさす空いひきしてこそふされけれ。しゆどのぶしかむどりども。此よしを見るよりも。あらふたうなあのひしりや。たとへは便船なむとにて。のつたりと申共。かゝるふうはのなむならは。御經よみたらにをみて。龍神なうじうの。きたうなむどもあるへきに。此おきにてわれ〳〵が。しせむする事ともはあの文學故とおぼゆるなり。ふな底よりも引出し。海へいれんといふもあり。又あるかた

の意見には。わたくしならぬ文學なればいかゝはせむと申もあり。かやうにいろ〳〵さたしけるを。聖は聞しめさるれとも。いよ〳〵きかぬ躰をして空いひきしてこそふされけれ。かゝりける所に。ともうつ波かあまつて。文學のつぶりの上をさつとうつてそとをりける。其時文學腹をたて。ふしたる所をかつはとおき。ふねの、へいたにつつ立あかつて。大音あけて。いかに此沖を上人かとをるをしらぬかえい。さこそ流人といひなから。龍王だにもあなつりて。此浪風をたつるは。大龍めかわさか。小龍めかわさか。雨風やめぬ物ならは。龍宮とはいふましきぞ。文學分入て。ためしをたつてくれうそえい。龍王め。〳〵とぞいかられける。しゆこのふしかむどりとも。此よしを見るよりも。さればこそ文學にははや物かついてくるはするぞ。龍王めとさうこむせば。いかでなみ風やむべきぞ。これにつけてもわれ〳〵が。死せむする事ともは。うたかひあらじと申つゝ。いよ〳〵念佛しけれとも。聖はちつともとうてむせず。龍王めとそいかられける。文學の御心すゑたのもしく覺けり〻かゝりける所に。びむづらさうにゆふたる天女壹人なみの上にたゝすみ。上人にむかつて申けるは。われをはたれとかおぼしめす。龍宮の乙姫に。こひさい女とはみづから也。聖人の此なみの上をおとをりあるを。おがみ申さむ其爲に。つの國わたなべよりも。これまて付そひ奉り。ひまをうかゞひ申せども。ふねの内に御寢あつて。おきさせ給ふ事もなし。かくて大嶋の御堂にあがらせ給ひては。いつの世にかはおがみ申へきとおもひ。此なみかせをたて申。聖人の御すがたをおかみ申事の有難さよ。今は拾六のつのおち。成佛とくだつうたがひなし。いざゝらはこうはの風やめてまいらせむと。かきけすやうにうせけれは今まてあれておそ

ろしき（下ヲ）闇海（ニ）のおもてへい〳〵とし。追手の風かふきければ。しゆごのぶしかむどりとも上人をらいし奉り。ろかいかぢをたてなをし。風に任せてふかすれは。都をたつて文學。伊豆の大嶋まて。五十五（ハ）日に付給ふに。しよくしをとゝめ。給ひしはげむしをまほるいはれなり（コトハ）かくて文學。大嶋の觀音堂にあがらせ給へは。をくりの人々も御暇申都へこそかへりけれ。爰に文學の御弟子。學文坊と申ておはせしか。一時もはなれ申さねども。今度は流罪の事なれは。力をよばすひとり都にとゝまりて。なげく事かぎりなし。かくてもあられぬ事なれは。御跡をたつね申。本道にかゝり。夜を日について下る程に。大嶋の觀音堂に參。上人にあひ奉りよろこぶ事限なし。かくて師弟の人々。觀音堂に御坐有けれども。あたりの里人（ヒト）まいりたつとむ人もなし。何としてかはちかづけむとおほしめし。さうぎやうの法をおこなはせ給ふ。かゝりける處に。ひるが小嶋に御坐有。兵衛のすけ頼朝はつたえきこしめされて。御めのとに盛長をめされて。いかに盛長承はれ。大嶋の觀音堂へこそ。都よりうけむちとくの上人の御下りあつて。さうぎやうの法をおこなはせ給ふか。露程もちがはぬよしを承る。いざやまいりて御うらひとつとひ申さむ。尤然べしと。しう〳〵御ふねにめされ。大嶋の觀音堂にまいり給ひ。うしろだうの緣の板を。たう〳〵とふみならし給ふ。折ふし文學は。初夜のつとめのそのために。高座にあからせ給ひしが。うしろだうのえむの板のなつたるを聞しめし。御でしの學文坊をめして仰けるは。あらふしぎや。唯今うしろだうのえんのいたのなつたるをとを。ひじりはふしんにおもひ。しかむをとつて見てあれは。遠くは百日。ちかくは五十日の内に。日本國のあるじにならせ給ふべき人の。足音と聞たる事の不審

さよと。師弟子御ものかたりありけれは。頼朝うしろだうにて聞しめし。あらめでたのうらかたや候。是にまたる事あらし。いざもどらむと仰けり。盛長承り。かゝるうけむちとくの上人にあひ奉り。なを〳〵ゆくすゑめてたかるへき事ども。御たづねあれと申。頼朝けにもとおぼしめし。つとめ一座の過ほと。うしろだうにたちやすらはせ給ふ。かくてつとめも過けれは。唯今のまれ人こなたへと仰けり。頼朝座敷になをらせ給ふ。文學御覽じてあらふしきや御みはたれ人そ。童名は文殊子。元服し給ひてそのゝち。右兵衛佐頼朝にてましますか。さむ候と仰けり。御みの父義朝のなれるはてを見たきかとありしかば。頼朝聞しめされて。見たく候とも見たからずとも。中〳〵申に及はず候。いで〳〵さらは見せ申さむとて。そばなる笈を引寄。からげなはふる〳〵とひつといて。上だむよりもにしき七重につゝみたる。しやれたるかうべを取いだし。これこそ御みのちゝのなれるはてよ。見給へよとありしかば。頼朝御覽じて。さらにまことゝおぼさねば。さあらぬ躰にもてなし。そばなる机の上にさしをき給ふ。文學御覽じて。程ふりたる事なれば。さだめて御うたがひあるへし。其しるしを見せ申さむとて。机なるかうべにむかひ。右兵衛佐頼朝こそこれまてたつね來り給へ。義朝。〳〵と二三度四五度よび給へは。しやれたるかうべの御眼より。御なみだそゝき。それかあらぬかと御聲かすかに聞えければ。其時頼朝。机なるかうべ取上。御袖の上にをき。たか〳〵とさしあけて（上ゲトキ）たゞいきたる人に物をの給ふ風情にて。さても西坂本までは御供申て候ひしが。くらさはくらし雪はふる。さがりまつの邊にてをひをくれ奉り。夜もほの〳〵と明るまてりうげの山にまよひしが。北近江くさのゝ庄司にたすけられ。かれが

所に年をゝくり。春にもならは御跡をたつね申さむとおもひしに。尾張のくにのまのうつみにて長田にうたれさせ給ひ。御くひのぼり極門にかゝれるよしを承る。せめてはかはらせ給ふ御すかたをなりとも。見まいらせんとおもひ くさのゝさとを。たち出てしのひ都にのぼりけり。今津川原をとをる時。彌平兵衛にいけどられ。うき六原にわたされて。六條。河原にてすてに死罪にをよひしを。いけのにこうにたすけられ。此國へうつされて。廿余年の春秋を。ゝくりむかへて過行とも。すこしもちゝの御事をわすれ申事もなし。いのちの内に御すかたを。見まいらするうれしさよ。あれは文殊か右兵衛佐かと今一度仰候へと。きえ入やうになき給ふ。文學も學文もさて御供の。盛長も聲をおしまずなきねたり 文學此よし御覽じて。それは五ぎやくざいの人なれば。なみたをかけぬ事にて候。それこなたへと仰あり。やがてもとのごとくにおさめ給ふ。文學仰けるやうは。此法師があらん程は。御心安くおぼしめせ。平家をてうぶくすへしとて。やがて十二ケ條のまき物を書こそしるし給ひけれ。抑拾二ケ條と申は。第一に天地のきたう。第二に國王のきたう。第三に父母のきたう。第四には源氏のきたう。第五にはげむじをまほるじゆじやうのきたう かくのごとくの五ケ條は。五躰五行五節の。いはじをかたとる所なり。今のこる七ケ條は。平家をうしなひほろぼすべきてうぶくの七ふしきを。あらはす七つのかずなりけり。これは御身のはるゝ〳〵と。來り給へる此たびの御引出物とてまいらせらる。頼朝なのめにおぼしめし。三度いたゞきまほりにかけ。万事はたのみたてまつる。さらば御暇申とて。又御ふねにめされて。なこやの御所にそかへられける。これぞこのげむじのはむしやうのはじめと聞えけり 其後文學

はしらきのこしをさゝせ。南のえむにかきすへて。こくうにむかつて仰けり。文學こそたゝいま上洛仕れ。こしかきやあると仰けれは。おつとこたへて程もなく。力者二人來り。御こしをかき こくうへあかると見えしかは。せつなか間にわうじやうのあふぎおむばやしにつき給ふ。ひるは人目をはゞかれば。夜にいれば文學。四條の町へ立出。かずのぐもつをかひあつめ。祇薗林の其中に。三重にたむをつき。七重にたなをゆひ。百八十本のへいぐしをきりたてかすの人形をつくつて。平家のむねとの雲客の。名字名乘を書しるしてうふくの法をおこなはる。三七日にまむずる時。上たむ中たむ下たむの。百八。十本のへいぐしが。一度にばつとみたれあひ。平家のむねとの雲客の御くびきれて明王の。りけむにたつと見えしかば一方は成就したりとてたむをやぶつて出給ふさてこそ壽永の春の比平家都をおとされ。終いくさにかたずしてほろびはてさせ給ひしは。文學のいきとをり。こはきゆへとそ聞えける

夢あはせ

（藤井氏本）

こゝに物のめでたきはたんばの國のぢうにんくはうげつのげん五もりやすのちやくしあだちのとう九郎もりながまださうてうの事成に君の御ざ所に參る君はいまだよるの所にまし〳〵けるにもりながもきこしめされていつ〳〵よりももりながけさのしゆつしのはやさよと仰ければさん候それがし過し夜きたひなる御むさうをかうふりて候程にかたつて君にたもたせ申さんためしゆつし申て候頼朝きこしめされてよるの所を御出あり何がしがきちしの夢ならばはや〳〵かたり給へたもたんとの御ぢやうなりもりながが承りそれ夢と鷹はあわせからにて候と承りて候へばよきやうにあはせらるべき人の候へかしおりふし御まへにおほばのへいだかげよししこう申て候ひしが我が君の御きちじの夢ならばはや〳〵かたりたまへよきやうにあはせ申さうずるにて候もりながなゝめによろこふでそれ夢と申はわたくしならぬ事にて候むかしちうてんぢくじやうぼん大わうのきさきのみやは七月十四日の日しゝんでんのおほゆかにうちまどろみ給ふひるの御夢にびやくさうにめされたるこんじきのはだへの御さう一人御くちのうちへとび入給ふと御覽じてあくるせいへいぐはんねんにしちだたいしをまうけ給ひ佛法をひろめ給ふ今のしやかは是なり我がてうのようめい天わうのきさきのみやは

あるよの御むさうにこがねの玉手ばこをひだりのうつけふにうつすと夢に御覽じてしやうとくたいしをまうけ給ひなんばに四天わうじをたてもりやがあくじをしづめしもみなこれ夢のいとくなり又でんげうだいしはれんげをいたゞくと御覽じてひえいざんをこんりうしめいしうとあふがれ給ふされば夢と鷹はあわせからにて候ぞやよきやうにあはせてたべや大ば殿とぞ申ける大ば此よしきくよりもたゞ今こそ夢のいとくを念比に承り候へはや〳〵語り給へよきやうにあはせ申さうずるにて候もりながきひてまづ一ばんの御むさうにひがし山小松ばらむらさきのやえぐもをかきわけつる〳〵と出させ給ふ朝日を君のさんごにいだきとらせ給ふと見參らせて候其つぎの御夢にきみはしろきじやうえにたてゑぼしあさいくつをめされさがみの國やぐらがだけに御こしをかけさせ給ひひがしへもみなみへもにしへもむかせ給はで北へむかせたまひひだりの御足をきかいが嶋のかたへふみおろさせ給ひ扨又めての御足をそとのはまのかたへふみおろさせ給ひこくうをゑひじてまします所に君のてうあひにおぼしめす大ばのきそうほうしがしろきへいじをてうがたにくちつゝませさかなに九けつのあわびをもつてわか君に參らする君は御覽じてあはびのふとき所を口にふくませ給ひほそきかたを御手にもちしゆをたぶ〳〵とおひかへありいかにやとのきそうさかなひとつとありしかばきそうほうし承りしきのはがへしかもの入くび一もみもふでいはひのわかをぞあげにける其つぎの御夢に君のさうの御たもとに三ぼんのひめ小松をそだておかせ給ふとたしかにもりながゞ見參らせ候ぞやよきやうにあわせてたべや大ば殿とぞ申ける大ば聞てあらめでたの御夢や候まづ一ばんの御むさうにひがし山小松ばらむらさきのやえぐもをかきわけ

つる〳〵と出させ給ふ朝日を君のさんどにいだきとらせ給ふと御覽あつて候はうたがひなく我が君は日のもとの將軍とあをがれさせ給ふべき御ずいさうにて候なり其つぎの御ゆめに君はしろきじやうえにてたてゑぼしあさひくつをめされさがみの國やぐらがだけに御こしをかけさせ給ひひがしへもみなみへもにしへもむかはせ給はできたへむかはせ給ふと御覽あつて候はさるよみの候ぞ きたかさぬるとかひてはほうでうとよみ候ぞ いか樣にも我がきみはほうでうの四郎をおたのみあつて御よをひらかせ給ふべき御ずいさうにて候なり其後君のてうあひにおぼしめす大ばのきそほうしがしろきへいじをてうがたに口つゝませさかなに九けつのあわびをもつて我が君に參らすると御らんあつて候はあはびはうみの物なればかいしやうはろかいのとゞかん程くがはこまのひづめのかよはん所迄わが君の御ちぎやうにまいらふずるにて候なりひだりの御足をきかいが嶋のかたへふみおろさせ給ひさて又めての御あしをそとのはまのかたへふみおろさせ給ふと御覽あつて候はきかいかうらいけいたんどくしんらはくさいこく迄も我君の御ちきやうに參らふずるにて候なり其つぎの御夢にきみのさうの御たもとに三ぼんのひめこまつをそだておかせ給ふと御らんあつて候は一ほんは我君一本はあだち殿今一ほんはかう申す大ばのへいだかげよしなりそれ松と申は一すんだにものびぬればちゞにえださかへちやうせんねんのよはひをたもつよしうけたまはる其松のごとく若君あまたいでき給ひすゑはる〳〵とさかえさせ給ふべし君一代にかぎるまじ百わう百だい我〳〵がすゑまでもあらめでたやとあはせけりもりながの夢物語大ば殿のあわせやうすゑはんじやうときこえけり

馬揃

（大頭左兵衞本）

頼朝の御前に盛長をめされ。いかに盛長承れ。此間の事どもは。夢うつゝの吉事。文學のうらのさす所。果報の花のつぼみきて。匂ひかつがうの風情なり。めいむうら方とも。既漸時をうくる。いそひて廻文をまはしてみむとの御諚也。盛長承つて。狀をかいて參らせければ。頼朝御判をすへさせ給ふ。盛長御判を給はつて。先誰〳〵と申すとも。三浦の大助は。榮報目出度人なれば。いそき三浦の舘につき。君の御判とさしあけければ。三浦の大助吉明は。年つもつて百六になられしが。君の御判と承り。をしかふり烏帽子にて。直垂のひほつがひ。孫ちやくしに和田の吉盛。大とうの彦太郎をひそかにめされ。いかに孫とも子とも承れ。先祖の君の御判をおかみ申せ。いのりにも名聞にも。又は後生のうつたへにも。何事か是にまさりなむ（上巻）されはしむほうけむの翁は。うむなんのるすゑをのかれむとて。大石によせてひちをおる。太公望はうき木にのり。いひむのなみに鉤をたるゝ。瓢覃しば〳〵むなし。草顏淵かちまたにしけし。藜藿ふかくとさす。雨原憲かとほそをうるほふすかことくなり（下）されば屈原は。世のうき事を厭ひつゝ。 さの庵りに身をかくし。むかしを忍ひて老にけり。吉明も人ならは。山もこもるへけれとも。今のうれしさを。此老が身につもる雪。わがみひと